

山口県教育財団埋蔵文化財調査報告 第1集

よし まさ
吉 政 遺 跡

—柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査報告—

1996

財団法人山口県教育財団



西方より遺跡を望む



出土した弥生土器

序

本書は、山口県土木建築部の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に係る遺跡の発掘調査の記録です。

私達にとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解するうえで大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力とうるおいに満ちた郷土の創造にとって欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今私達に与えられた課題であるといえます。

当教育財団では、埋蔵文化財保護の立場から、基本的には遺跡の現状保存策を取り、やむをえず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に先立ち関係諸機関と協議調整を重ねて参りましたが、当事業によって遺跡が破壊される範囲について、発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、弥生時代後期後半から終末期にかけての集落が発見されました。特に、直径10mを越える円形住居や斜面特有の住居の構築方法など注目すべきことがあります。また、昨年の小谷遺跡に引き続き、通常の文書資料記録に加えて映像による記録保存も並行して実施するなど、記録保存における新たな試みも行いました。これらの資料は当時の人々の暮らしを考える上できわめて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

おわりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 小 河 啓 祐

例 言

- 1 本書は、財団法人山口県教育財団が、平成7年度に実施した柳井市大字新庄字林所在の吉政遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、財団法人山口県教育財団が、山口県柳井土木建築事務所の委託を受けて、平成7年度に実施したものである。

- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体

財団法人山口県教育財団

調査担当

財団法人山口県教育財団事務局指導主事

豊島 正行

田中 敏夫

平海 泰政

資料整理

財団法人山口県教育財団

- 4 調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。
- 5 調査にあたっては、山口県柳井土木建築事務所、柳井市教育委員会、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 6 出土遺物のうち、磁器については、山口県教育委員会文化課萩美術館浦上記念館開設準備室専門学芸員上田 秀夫氏の指導・助言を得た。石製品の石質鑑定は、山口県山口博物館専門研究員亀谷敦氏に依頼した。なお、石質鑑定は表面観察によるものである。
- 7 本書の第1図は、国土地理院発行5万分の1の地形図「柳井」を使用した。第2図は山口県柳井土木建築事務所提供のものである。
- 8 本書で使用した方位は、すべて国土座標（第3座標系）で北を示し、標高は海拔標高である。
- 9 本書に使用した土色の色調の表記は、Munsell方式による。
(農林省農林水産技術会議事務局 監修 「新版標準土色帖」)
- 10 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 11 土器実測図の断面について、白抜きは土器・土製品断面、黒塗りは磁器・瓦器皿、斜線は石器、網かけは鉄器を表わす。
- 12 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SB：竪穴住居 SK：土坑 ST：墓坑 SX：用途不明遺構
- 13 本書に掲載した実測図・写真の作成及び執筆は、豊島・田中・平海が共同で行い、編集は、豊島が行った。

目 次

本文目次

第1章	遺跡の位置と環境	1
1	遺跡の位置	
2	地理的環境	
3	歴史的環境	
第2章	調査に至る経緯と経過	3
第3章	遺構と遺物	10
1	竪穴住居	10
2	土坑	37
3	墓坑	42
4	その他の遺構と遺物	46
第4章	まとめ	50

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	調査区設定図	5
第3図	遺構配置図	7
第4図	S B 0 1 実測図	10
第5図	S B 0 1 遺物実測図	11
第6図	S B 0 2 実測図	12
第7図	S B 0 2 遺物実測図①	13
第8図	S B 0 2 遺物実測図②	13
第9図	S B 0 3 実測図	14
第10図	S B 0 3 遺物実測図①	15
第11図	S B 0 3 遺物実測図②	16
第12図	S B 0 4 実測図	17
第13図	S B 0 4 遺物実測図①	18
第14図	S B 0 4 遺物実測図②	19
第15図	S B 0 5 実測図	21
第16図	S B 0 5 遺物実測図①	22
第17図	S B 0 5 遺物実測図②	22
第18図	S B 0 5 遺物実測図③	23
第19図	S B 0 6 実測図	25
第20図	S B 0 6 遺物実測図①	27
第21図	S B 0 6 遺物実測図②	28
第22図	S B 0 7 実測図	30
第23図	S B 0 7 遺物実測図	30
第24図	S B 0 8 ・ 0 9 実測図	31
第25図	S B 0 8 遺物実測図	32
第26図	S B 0 9 遺物実測図①	33
第27図	S B 0 9 遺物実測図②	33
第28図	S B 1 0 ・ 1 1 実測図	35

第29図	S B 1 0 ・ 1 1 遺物実測図	36
第30図	S K 0 1 ・ 0 2 実測図	37
第31図	S K 0 3 出状実測図	38
第32図	S K 0 4 実測図	38
第33図	S K 0 5 出状実測図	39
第34図	S K 0 5 遺物実測図	39
第35図	S K 0 6 出状実測図	40
第36図	S K 0 6 遺物実測図	40
第37図	S K 0 7 出状実測図	41
第38図	S K 0 7 遺物実測図	41
第39図	S T 0 1 出状実測図	42
第40図	S T 0 1 遺物実測図	42
第41図	S T 0 2 出状実測図	43
第42図	S T 0 3 出状実測図	43
第43図	S T 0 3 遺物実測図	43
第44図	S T 0 6 出状実測図	44
第45図	S T 0 4 ・ 0 5 ・ 0 6 遺物実測図	44
第46図	S X 0 1 遺物実測図	46
第47図	S X 0 1 ・ 0 2 実測図	46
第48図	S X 0 3 遺物実測図	47
第49図	S X 0 3 出状実測図	48
第50図	S X 0 4 実測図	49
第51図	S X 0 4 遺物実測図	49

表目次

第1表 竪穴住居一覧表……………	9	第6表 土器観察表 ⑤……………	56
第2表 土器観察表 ①……………	52	第7表 土器観察表 ⑥……………	57
第3表 土器観察表 ②……………	53	第8表 土器観察表 ⑦……………	58
第4表 土器観察表 ③……………	54	第9表 土器観察表 ⑧……………	59
第5表 土器観察表 ④……………	55	第10表 土器観察表 ⑨……………	60

図版目次

巻頭図版 ① 西方より遺跡を望む

巻頭図版 ② 出土した弥生土器

図版1 東より古柳井水道を望む 南より吉政遺跡を望む
調査前

図版2 上空より遺跡を望む 完掘近景

図版3 (S B01・02) S B 0 1 完掘 S B 0 2 完掘

図版4 (S B03) S B 0 3 完掘 土器の出状 ①
土器の出状 ② 土器の出状 ③
南東より望む

図版5 (S B04) S B 0 4 完掘 土器の出状 ①
土器の出状 ② 土器の出状 ③
土器の出状 ④

図版6 (S B04) 輪状土製品出状 砥石の出状 ①
砥石の出状 ② 砥石の出状 ③
焼土面検出 焼けた木材

図版7 (S B05) S B 0 5 完掘 北側土層断面
南側土層断面

図版8(S B05)	土器の出状 ① 土器の出状 ③ 鉄器の出状 排水溝か	土器の出状 ② 土器の出状 ④ 砥石の出状
図版9(S B06)	S B 0 6 完掘 南側土層断面	北側土層断面
図版10(S B06)	土器の出状 ① 土器の出状 ③ 土器の出状 ⑤ 砥石の出状	土器の出状 ② 土器の出状 ④ 土器の出状 ⑥ 焼土面検出
図版11(S B07)	S B 0 7 出状 土器の出状 ② 完掘(北より)	土器の出状 ① 土器の出状 ③
図版12(S B08・09)	S B 0 8 ・ 0 9 出状 土器の出状	北側土層断面 石製紡錘車の出状
図版13(S B10・11)	S B 1 0 ・ 1 1 出状 S B 1 1 北側土層断面	東西土層断面
図版14(S B10・11)	S B 1 0 土器出状 S B 1 1 土器出状 ②	S B 1 1 土器出状 ① S B 1 0 ・ 1 1 完掘
図版15	S K 0 1 土層断面 S K 0 2 土層断面 S K 0 3 土器出状 S K 0 4 完掘	S K 0 1 完掘 S K 0 2 完掘 S K 0 3 完掘 S K 0 5 土層断面
図版16	S K 0 5 土器出状 S K 0 6 土器出状 S T 0 1 甕棺出状 S T 0 1 甕棺出状(西より)	S K 0 5 完掘 S K 0 6 完掘 S T 0 1 甕棺出状(南より) S T 0 1 甕棺出状(上部取り上げ後)

図版17	ST01 甕棺取り上げ後 ST01・02 土器出状 (西より) ST01・02 完掘 (西より) ST03 甕棺出状 ST04 甕棺出状	ST02 土器出状 ST03 検出状況 ST03 完掘	
図版18	ST05 甕棺出状 SX01 完掘 SX03 土器出状 ② 作業風景	ST06 出状 SX03 土器出状 ① SX03 完掘 実測風景	
図版19	出土遺物 (1)	図版20	出土遺物 (2)
図版21	出土遺物 (3)	図版22	出土遺物 (4)
図版23	出土遺物 (5)	図版24	出土遺物 (6)
図版25	出土遺物 (7)	図版26	出土遺物 (8)
図版27	出土遺物 (9)	図版28	出土遺物 (10)
図版29	出土遺物 (11)	図版30	出土遺物 (12)

第1章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

吉政遺跡は、柳井市大字新庄字林に所在する。

柳井市は、山口県の南東部に位置し、瀬戸内海に面する。熊毛半島の東半部を市域としている。地域の北側は周東町、西側は大和町・田布施町・平生町、南側は上関町、東側は由宇町・大島町とそれぞれ隣接している。

柳井市は、国道1路線（国道188号）・JR1路線（山陽本線）・主要県道5路線を有する。

本遺跡の所在する大字新庄は、柳井市西部に位置し、大字余田を介して田布施町に近接する。

2 自然的環境

柳井市は市域の25%が平地で、そのほとんどは市中枢部に集中する。そのため、市中枢周囲は山間、丘陵地が占めている。

気候は温暖で、雨量は年間を通して少ない。

熊毛半島の基部にある赤子山（標高230m）とその北側の大平山（標高316m）との間には、東西に柳井低地、南北には台地群が広がる。柳井低地は、柳井市大字新庄を経て、田布施町・平生町に通じ、標高の低い部分の地層には青灰色砂泥層がある。この層からはかつて生息した貝の化石が産出し、さらに周囲には、大波野・砂田・浜・海田などといった地名が残るため、柳井低地は最大海進期には海面化していたと考えられる（古柳井水道）。また、赤子山・大平山の両山麓下の台地群は、舌状の洪積礫層をのせ、楕円状にのびている。特に、大平山山麓下の台地は、平坦地が広く、緩傾斜をなしている。本遺跡は、柳井低地を見渡せる大平山側の台地群の一角に位置する。

これらのことから、当時遺跡周辺は南側に海峡、北側に山地を有しており、海での漁労や山地における狩猟・採集が可能であり、集落の立地に好条件であると考えられる。

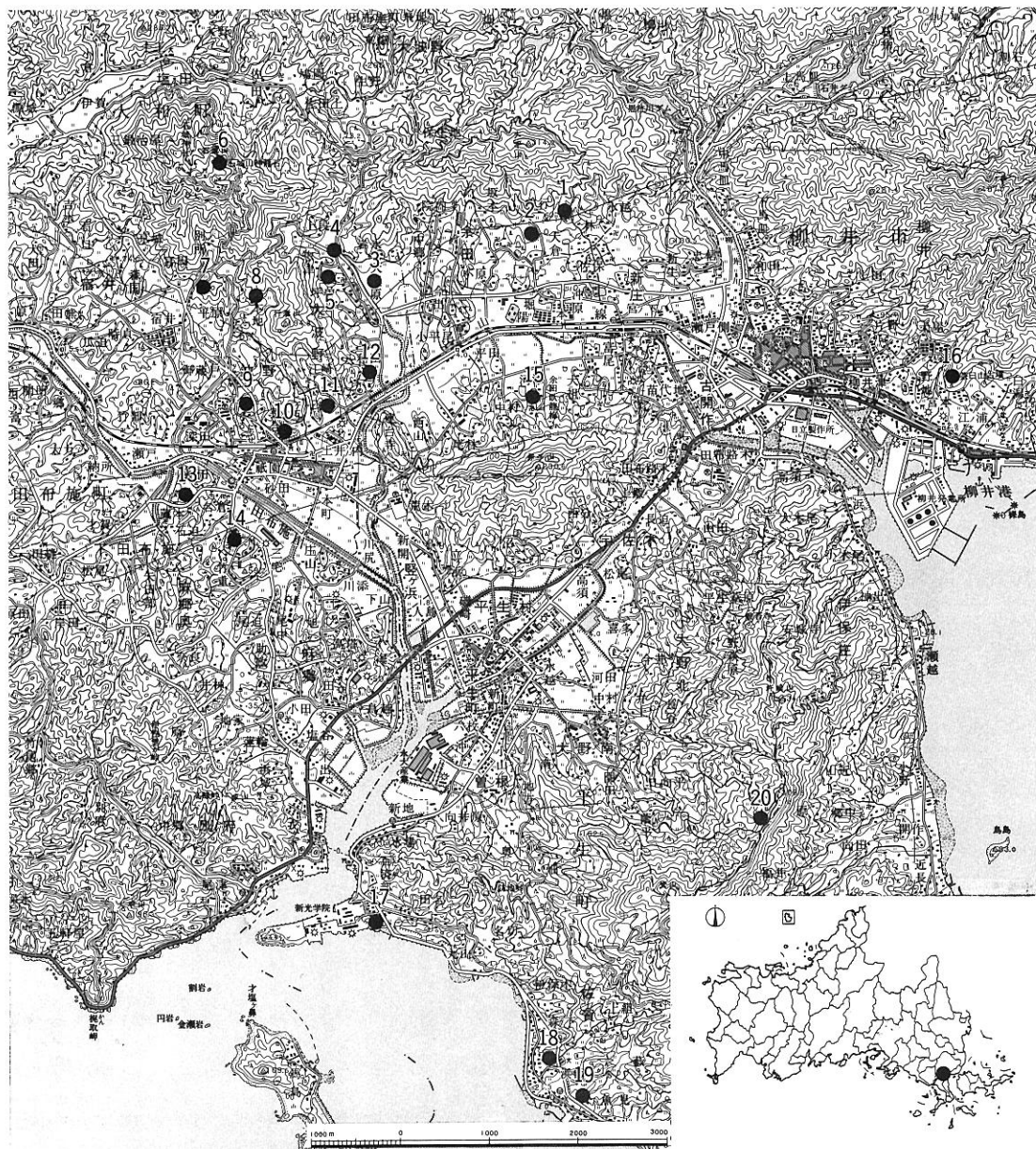
3 歴史的環境

縄文時代の遺跡は、伊保庄の宮田遺跡・黒島浜遺跡、阿月の与浦遺跡、平生町の岩田遺跡等があり、主に熊毛半島東岸に分布する。これらの遺跡からは、多くの石錘が出土し、漁労を営んでいたことがわかる。

弥生時代の遺跡は、宝前遺跡・長合遺跡・天王原遺跡・明地遺跡・吹越遺跡等がみられる。明地遺跡は、現標高20m付近から10m程度の場所に立地し、これは古柳井水道の存在を考慮すると、かなり海面に近い低地で集落形成をしていたことになる。また、この遺跡は吉政遺跡より西南西約2.3kmという比較的近い位置にあり、弥生時代中期から古墳時代中期にかけてかなり長期間に渡って営まれていた。一方、吉政遺跡は弥生時代後期後半から終末期の短い期間に営まれており、その性格は異なる。吹越遺跡は、弥生終末期から古墳時代初期にかけて営まれていた。またこの遺跡は、吉政遺跡から南南東に直線距離にして約7kmの地点で、安芸灘・伊予灘・周防灘の交界地に突き出た熊毛半島の標高275m前後の高所に立地している。このことから弥生系の高地性集落とみられている。この遺跡が軍事的機能をもったものだろうという推察がなされているが、そのことからほぼ時代を共有する吉政遺跡の性格の一端をうかがい知ることができるのではないだろうか。

古墳時代の遺跡は、納蔵原古墳・赤子山北麓遺跡・茶臼山古墳・神花山古墳・白鳥古墳等がある。茶臼山古墳は、吉政遺跡から南東へ約4.8km地点にある標高約60mの向山に位置する前方後円墳である。南には柳井湾を、また当時は西に古柳井水道を望んだことであろう。4世紀末から5世紀初期にかけて造築されたものと考えられ、直径44.8cmの変形神獸鏡が出土している。この古墳の存在は、古墳時代の前中期にはこの地方にかなりの勢力をもった豪族が存在し、かつ畿内王権との関係を維持していたことを示している。白鳥古墳は熊毛半島北西部（平生町）に所在し、5世紀に造築された西部瀬戸内最大の前方後円墳である。さらに、白鳥古墳の北西には、やはり5世紀に造築された神花山古墳がある。この古墳も前方後円墳で、白鳥古墳とともに、周防灘に面している。

これらの大規模な古墳を築くには人々の結集が必要不可欠と思われるが、熊毛半島およびその周辺に中心となりうるような遺跡は、明地遺跡のほかにはまだ確認されていない。



- | | | | | |
|---------|----------|-----------|------------|----------|
| 1 吉政遺跡 | 5 納蔵原古墳 | 9 長合第2遺跡 | 13 長田遺跡 | 17 神花山古墳 |
| 2 濡田廃寺 | 6 石城山神籠石 | 10 長合遺跡 | 14 神過原遺跡 | 18 白鳥古墳 |
| 3 明地遺跡 | 7 宝前遺跡 | 11 尾崎遺跡 | 15 赤子山北麓遺跡 | 19 岩田遺跡 |
| 4 天王原遺跡 | 8 平井遺跡 | 12 八和田廃寺跡 | 16 茶臼山古墳 | 20 吹越遺跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章 調査に至る経緯と経過

山口県柳井土木建築事務所では、都市公園整備事業にもとづき、柳井ウェルネスパークの建設を計画し、建設予定地内の遺跡の存在について、山口県教育委員会に調査を依頼をした。平成6年に山口県教育委員会で予察調査を実施し、弥生時代のものと推定される建物の柱穴や炭化材、焼土、土器等を検出した。この結果、建設予定地内には弥生時代の集落跡が埋存していることが予測され、山口県柳井土木建築事務所と財団法人山口県教育財団で協議をし、吉政遺跡の調査を実施することとなった。

大平山麓から舌状に張り出した斜面の4000㎡を調査対象地とした。

調査対象地の樹木の伐採終了後、平成7年5月現地における関係機関との打合せを行い、6月1日より発掘調査を開始した。

まず、全面発掘に先立ち、調査前の地形測量を行った。その結果、比高が約10m、傾斜角度が約8度の傾斜地であった。測量の際には、光波距離計・光波アリダード等の機器を用い、作業を順調に進めることができた。次に、試掘溝の設定を行った。試掘溝はまず南北方向に1本を設け、さらに、それに直交するように斜面上・中・下位に各1本ずつを設けた。

6月6日より試掘溝の掘り込みを開始した。人力であったが、斜面での作業とともに、切り株を除去しなければならず、能率は上がらなかった。また、調査区が高台に位置し、周囲には田畑等もあるため、土砂流出が起きないように、遺跡周囲に土のうを積む防災作業も進めていった。

試掘調査した結果、表面から30～50cmの深さで遺構面を確認できた。その後、重機による表土除去作業を行った。斜面にもかかわらず、作業は順調に進んだ。そして、表土除去最終日には調査区の東西2か所に防災のための沈砂池を設置した。



6月27日より遺構検出を開始した。この調査区は水はけがよく、土が固いため、水をかけながらの作業を余儀なくさせられた。そのため、近くに水を得る場所もなく、沈砂池に溜まった水を運び上げる作業が付加された。

検出作業は、微妙な土色の違いや根による攪乱などに悩まされ、順調に進んだとはいえ、1か月を要して終了した。

7月28日より、斜面上位部から遺構掘り込み作業を開始した。ちょうど暑い時期をむかえ、土は以前にもまして固く締まっており、多量の水をかけないと掘り込めない状態になった。さらに、沈砂池の水も、雨が降らないため、底をついてしまった。このような状況の中でも作業員の協力でなんとか水を調達し、作業を進めていった。

斜面上位部では、竪穴住居を2軒掘ったところ、かなりの削平を受けており、残存する住居の肩から遺構床面までは深い所でも35cmだった。さらに2軒とも南半分は削平を受け、遺構を検出することができなかった。このことにより、斜面下位に進むにつれ、削平を強く受け、遺構の残存状況も悪くなるのではないかと危惧されたが、心配するほどの削平を受けていなかった。

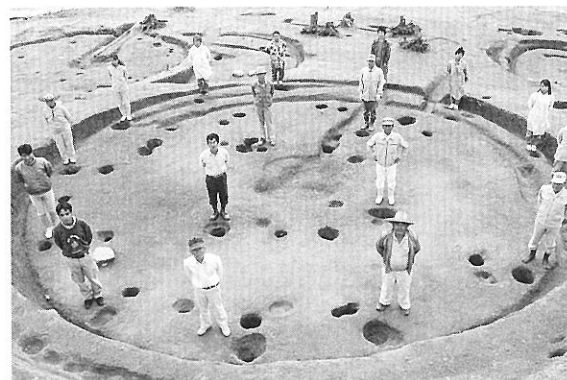
斜面中位部では遺構検出の際、長径10mほどの円形の住居状遺構を確認していた。試掘溝において北側では床面まで1mほど掘り込む必要があると確認したが、時期的な前後関係等のことを考慮しながら慎重に掘り込んでいった。その結果、1軒の住居であることが確認された。

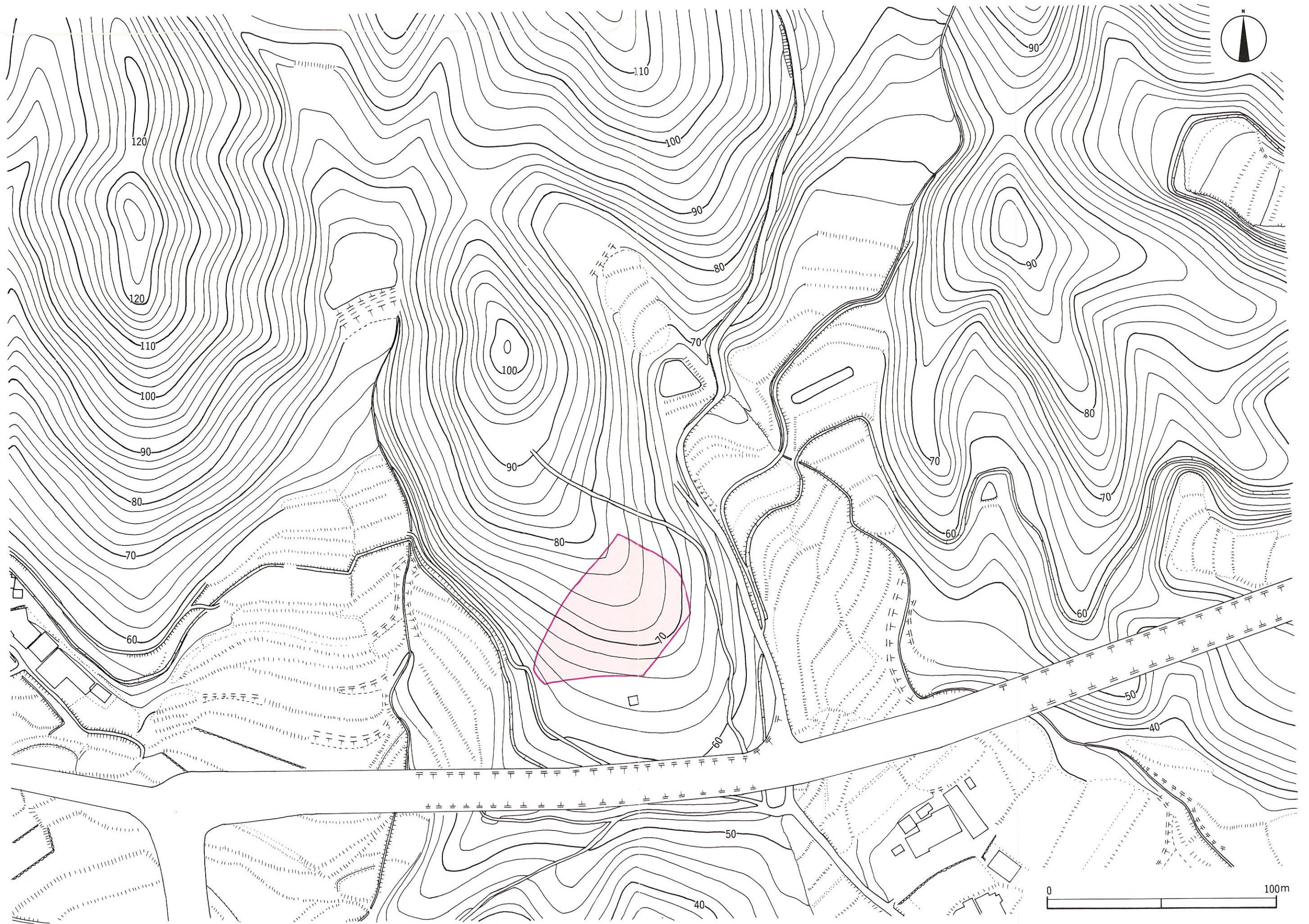
斜面下位部では円形住居と方形住居との遺構の切り合いが確認されるなど、調査も終盤をむかえ忙しい日々が続いた。

この掘り込み作業全体を通して、前述した水不足と運び出す土量の多さに終始悩まされた。一方でこの期間中、地元中・高校生の見学・体験学習の要請を受け、社会教育に対して場の提供を行った。またこのことは、地域の人々の本遺跡に対する関心の高さを表わしていると感じた。

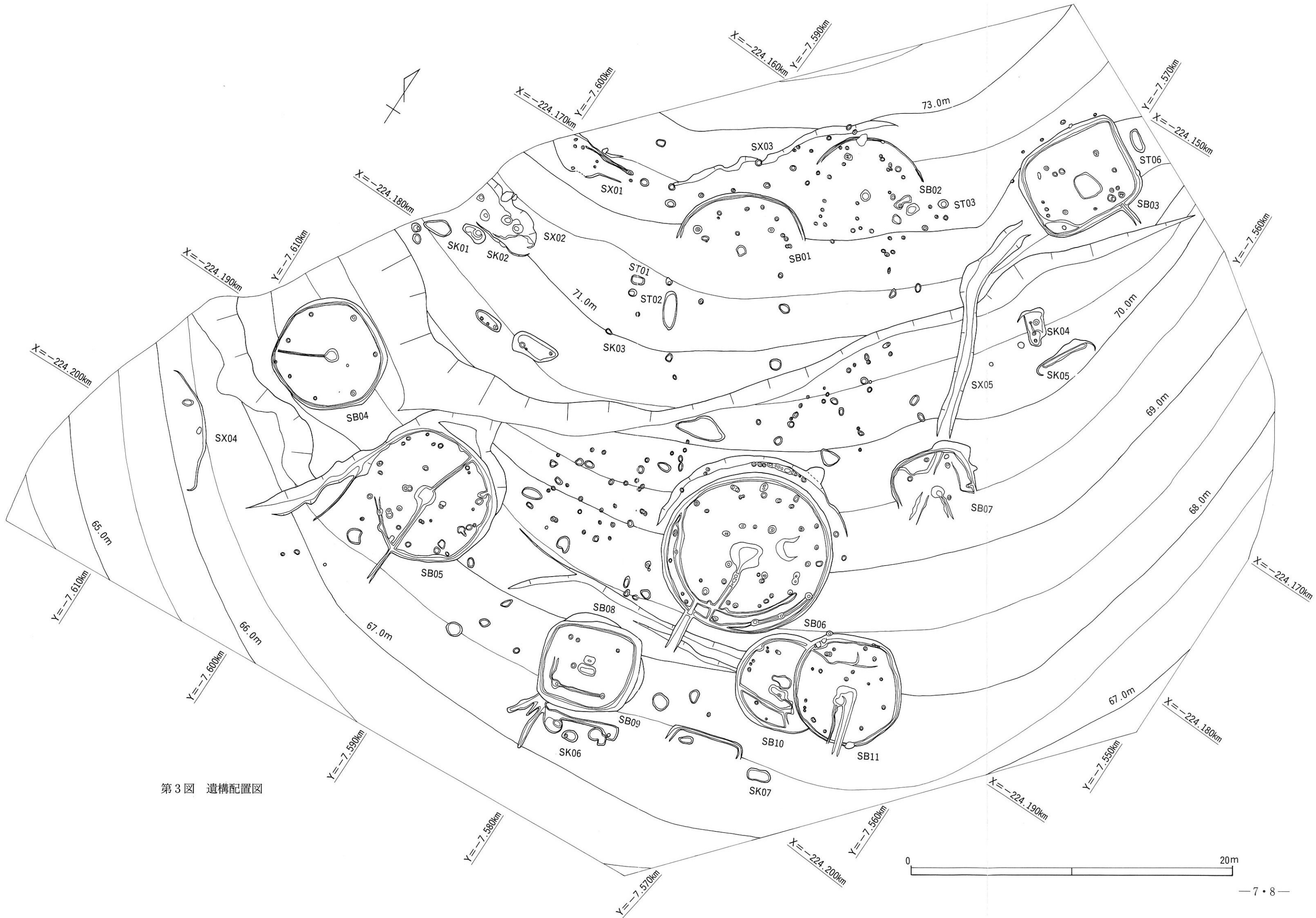
9月29日をもって遺構の掘り込み作業を終え、調査区内の清掃を行った後、10月3日に空中撮影を行った。10月4日には、現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。

その後、調査区内に10mごとのグリッドを設定して実測を行い、10月24日にすべての調査を終了した。





第2図 調査区設定図



第3図 遺構配置図

竪穴住居一覧表

住居 番号	平面形	規			模cm		軸方位 長軸を基本	主柱穴	中央土坑 からの 溝状遺構	焼失	ベット状 遺構	土器以外の出土遺物	時代	備 考
		長軸	短軸	軸	残存壁高 (高/低)									
01	円形	-	-	-	35/-	-	4(8)	×	×	×	×		A	南東側半分を削平
02	円形	-	-	-	4/-	-	6	×	×	×	×	鉄鎌	A	北側のみ周溝残存
03	方形	678	582	-	60/-	N25°E	4	×	×	×	×	砥石	B	北西側壁面に斜柱穴
04	円形	666	654	76/4	76/4	N54°W	7	○	○	×	×	砥石(3)・輪状土製品	B	
05	円形	814	776	65/-	65/-	N83°W	10	○	○	×	×	砥石(2)・鉄鎌(3)・刀子	B	北から南に溝状遺構
06	円形	1038	912	63/2	63/2	N55°E	13	○	○	○	×	砥石・叩き石・土製紡錘車・石庖丁・鉄鎌・石鏃	B	北側壁に2段構築
07	方形	-	-	-	22/-	-	3(4)	○	○	×	○		B	南東側半分を削平
08	円形	-	-	-	32/-	-	-	-	-	-	-	砥石	B	S B 09に切られる
09	方形	564	504	52/18	52/18	N70°E	4	×	×	×	×	石製紡錘車	B	
10	円形	-	-	-	47/3	-	4	○	○	○	×		B	S B 11に切られる
11	円形	652	650	43/15	43/15	N25°W	8	○	○	×	○	鉄鎌	B	

長軸・短軸については、住居の中心をとおるものとし、床面上の計測値。
 残存壁高については、2段構築の場合も1段目の計測値。
 主柱穴 実数…残存柱穴 ()…推定柱穴
 時代区分 A…弥生時代後期後半～終末期 B…弥生時代終末期

第3章 遺構と遺物

1 竪穴住居

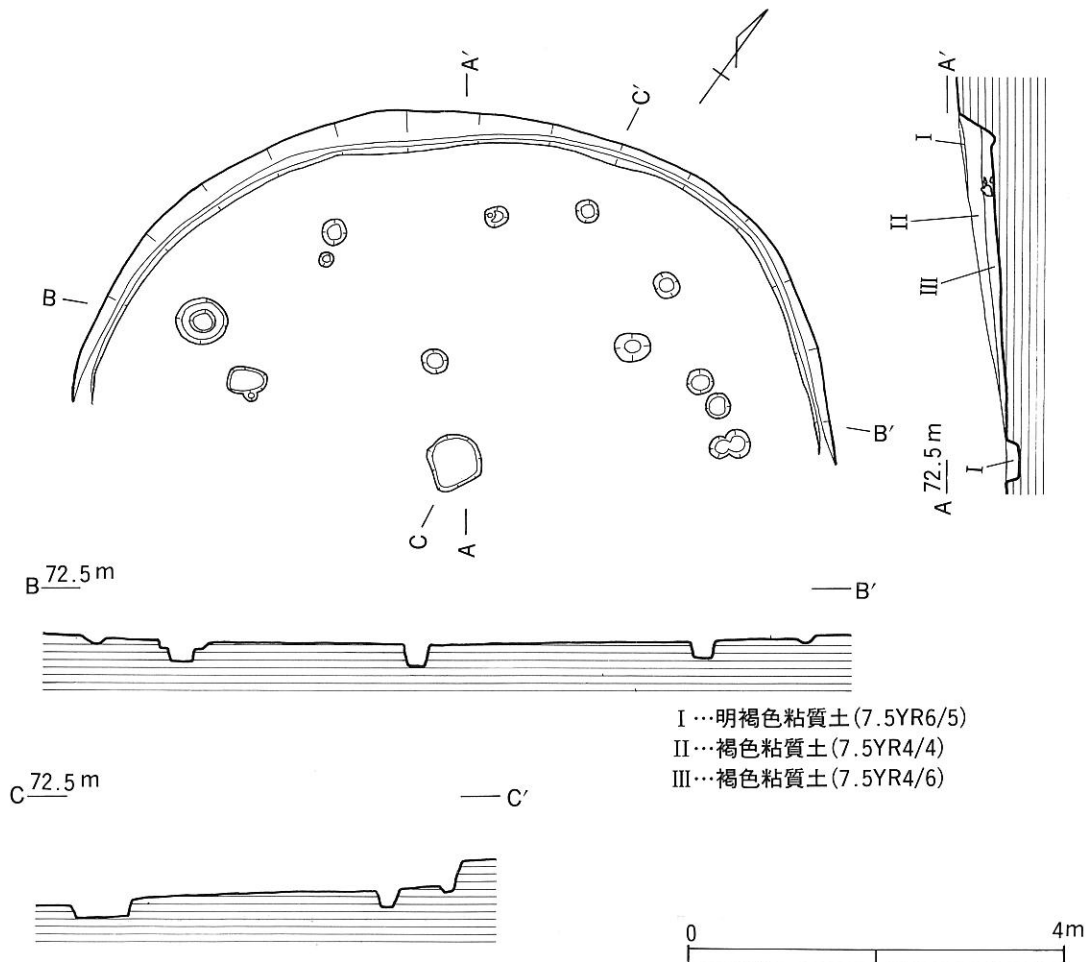
検出された弥生時代の竪穴住居は11軒であり、うち、円形住居8軒、方形住居3軒を数える。それらの住居のうち、調査区の斜面上位に位置するSB01・SB02・SB07は、後世に削平されており、遺存状態が悪い。SB03を除いて遺存状態の比較的良好な住居は、斜面中位から下位の中央から西側にかけて現存する。東側については、後世の削平のため遺構は確認されなかった。

その中で、切り合いの見られる住居は、SB08・SB09とSB10・SB11である。SB08とSB09の切り合いは、円形住居(SB08)とほぼ同じ位置に方形住居(SB09)が掘り込まれている。それに対して、SB10とSB11の切り合いは、ともに円形住居で、SB10の東側に、一部が重なるようにSB11が掘り込まれており、SB11がSB10を切っている。

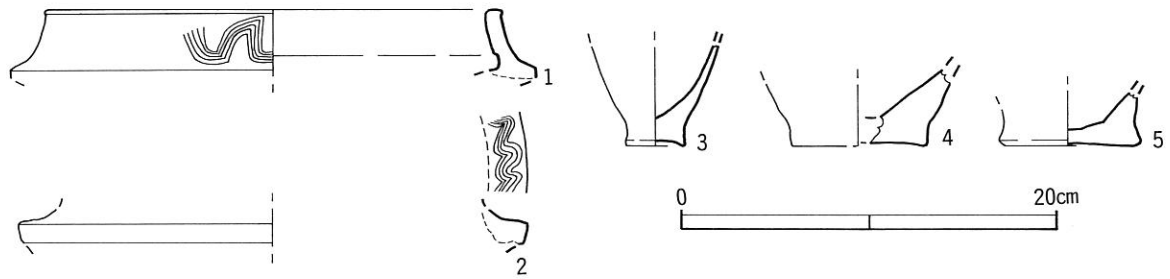
また、11軒のうち、SB03とSB04・SB06・SB10の4軒が焼失家屋である。

(1) SB01 (第4図 図版3)

SB01は、調査区の北西端部の北西から南東に約10度傾斜する緩斜面に位置する。平面形は北東・南西方向にやや長い円形であると推測される。南東部約50%が後世の削平により残存しない。長径は約8mで、残存壁高は北西部で35cmである。



第4図 SB01実測図



第5図 SB01 遺物実測図

周溝は残存した壁際に巡っており、幅20cmから44cm、深さ4cmから8cmである。

住居のほぼ中央に、焼土を含んだ土坑があり、炉と考えられる。形態は不整形で、深さ約18cm、壁は焼き締まっている。

支柱穴は、その炉を中心に約2mから2.5mの間隔で円形に4個並んでいる。残存する柱穴の間隔から実際には8個の支柱穴があったと推測される。それらの柱穴は、西側の1個を除いて、直径約24cm、深さ約20cmである。西側の1個は、2段掘りで1段目が直径34cm、深さ8cm、2段目が直径28cm、深さ12cmである。各柱穴ともやや浅い。

埋土は3層に分かれる。第I層は明褐色粘質土(7.5YR6/5)、第II層は褐色粘質土(7.5YR4/4)、第III層は褐色粘質土(7.5YR4/6)で層序の状態から自然堆積と思われる。特に、第II層には、多数の土器片と礫が混入しており、それら土器片の摩滅の状態と、埋土が自然堆積であることから斜面上位からの流入と考えられる。

また、削平された南東部は、約10度の傾斜の地山の上に、斜面上位の地山整形の際に出た土砂で斜面下位を埋め床面を造成している。その張り床は、ほぼ中央炉付近から南東に向かって約20cm認められる。

出土遺物

土器 (第5図)

1は、複合口縁の壺の口縁部で、柱穴内より出土した。立ち上がり部はやや外反しながら内傾し、端部に至る。端部は面を持つ。立ち上がり部外面に楕円波状文が施されている。

2は、複合口縁の壺の屈曲部で、屈曲部上面に楕円波状文が施されている。調整はヨコナデ。

3はやや上げ底、4は平底、ともに甕と思われる。5は、平底の壺と思われる。

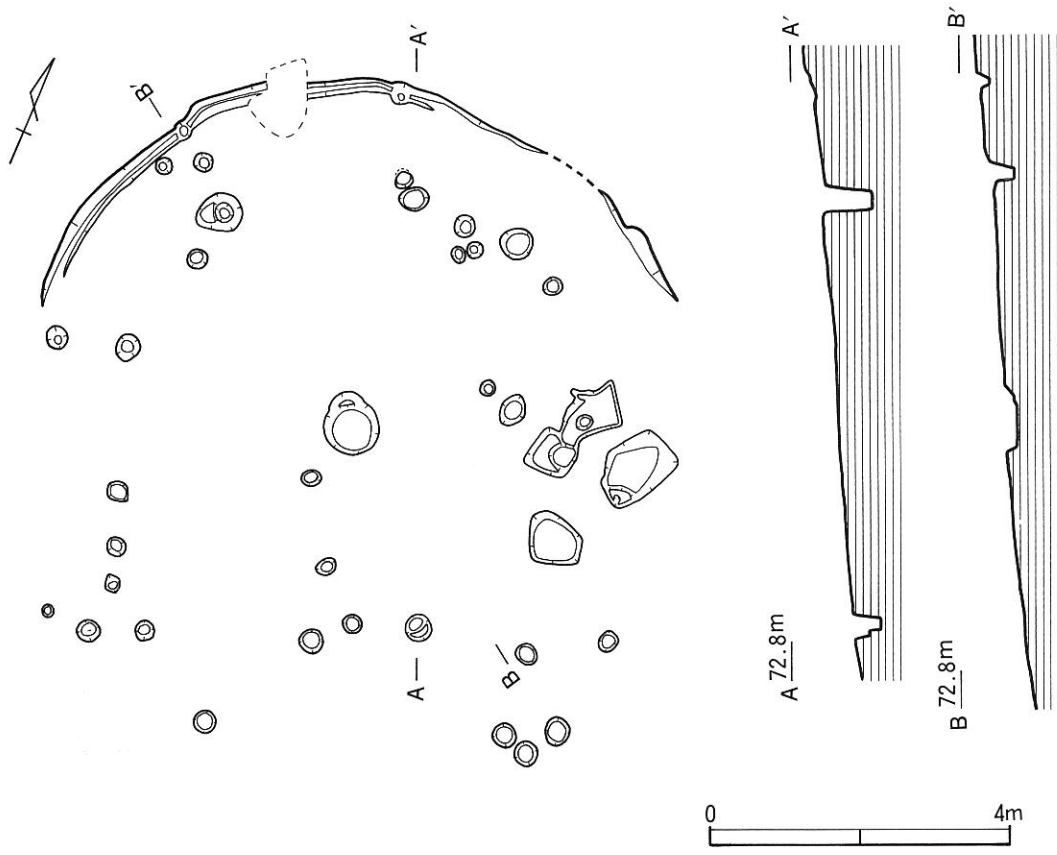
2・3・4・5は、床面より出土した。

(2) SB02 (第6図 図版3)

SB02は、SB01の北東部に隣接する。SB01に比べ、傾斜角度が約5度とほぼ平坦部に立地しており張り床は認められない。しかし、全体的に削平されており住居の規模については不明である。ただ北西部に一部壁が残存しており、その形状から平面形はほぼ円形と推測される。残存壁高は北西部で約4cmである。

周溝は、壁際に残存しており、幅約16cm、深さ約12cmである。

住居のほぼ中央に土坑があり、形態は楕円形で、長径68cm、短径60cm、深さ12cmである。しかし、



第6図 SB02実測図

その埋土中には焼土は確認されず、炉として使用されたかは不明である。

主柱穴は、中央土坑を中心にほぼ円形に2.2mから3.0m間隔で6個確認できる。それらの柱穴は、直径約24cm、深さ28cmから48cmである。深さに幅があるが、床面が削平により緩斜面になっているため、床面がほぼ水平であるとするとはほぼ同じ深さである。

埋土は3層で、第I層は明褐色粘質土(7.5YR6/5)、第II層は褐色粘質土(7.5YR4/4)、第III層は褐色粘質土(7.5YR4/6)である。第II層には、多数の土器片と礫が混入しており、SB01同様斜面上位からの流入と思われる。

出土遺物

土器 (第7図)

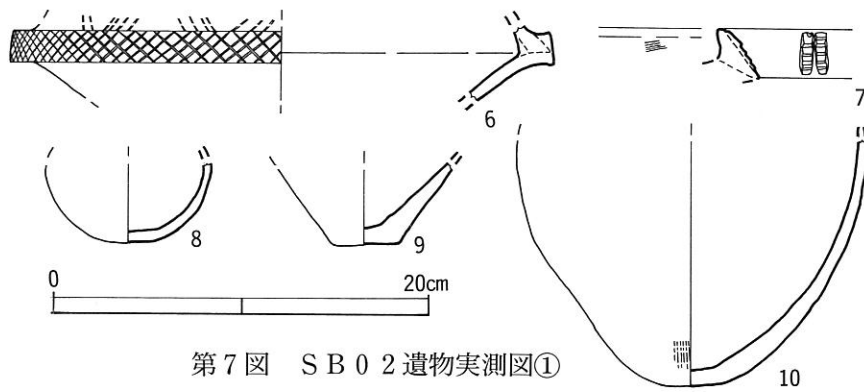
6は、複合口縁の壺の屈折部である。屈折部外面に篋描斜格子文が、屈折部より内傾しながら立ち上がる部分の外面に篋描文が施される。内面の調整はヨコナデ。

7は、複合口縁の壺と思われる。立ち上がり部外面に縦の板状の粘土ひもを2本貼付け、篋状工具により刻み目を入れた浮文が施されている。内面の調整はハケ。

8は、丸底の壺と思われる。内面の調整はハケ。

9は、平底の甕と思われる。6・7・8・9はともに床面付近から出土した。

10は、周溝の中から出土した甕である。胴部内外面の調整はハケで、2次焼成がみられる。

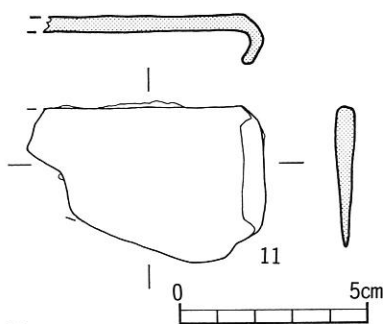


第7図 SB02遺物実測図①

鉄器 (第8図)

11は、鉄鎌で床面付近より出土。基部側が残存しており、刀身部の途中より欠損。残部全長6.3cm。

基部の折り返しは、刃部を下にして右側に



第8図 SB02遺物実測図②

位置し、2.9cmの幅で刀身部に対して直角に折り返している。折り返し部の断面は、逆U字形を示す。折り返し部より0.8cm地点で3.6cmと広がり基部をなす。

さらに、刀身部は、基部より1.5cm地点で4.6cmと広がり約30度の角度で背部に向かって細くなっている。

刃部は、逆三角形で先細りで尖る。

(3) SB03 (第9図 図版4)

SB03は、北端部の北西から南東に約12度傾斜する緩斜面に位置する。平面形は北北東・南南西方向にやや長い方形である。長軸は6.78m、短軸は5.82m、残存壁高は斜面高位の西側で60cm、南側で44cm、北側で12cmである。東側は削平のため壁が残存していない。また、北側についても中世の墓坑(ST06)が隣接しており、その残状からも削平を受けている可能性が高い。

特に西側の壁は、地山を床面より約60cmの高さまで約30度の角度で掘り込み、さらに床面まで約72度の角度で掘り込んだ2段構築になっている。

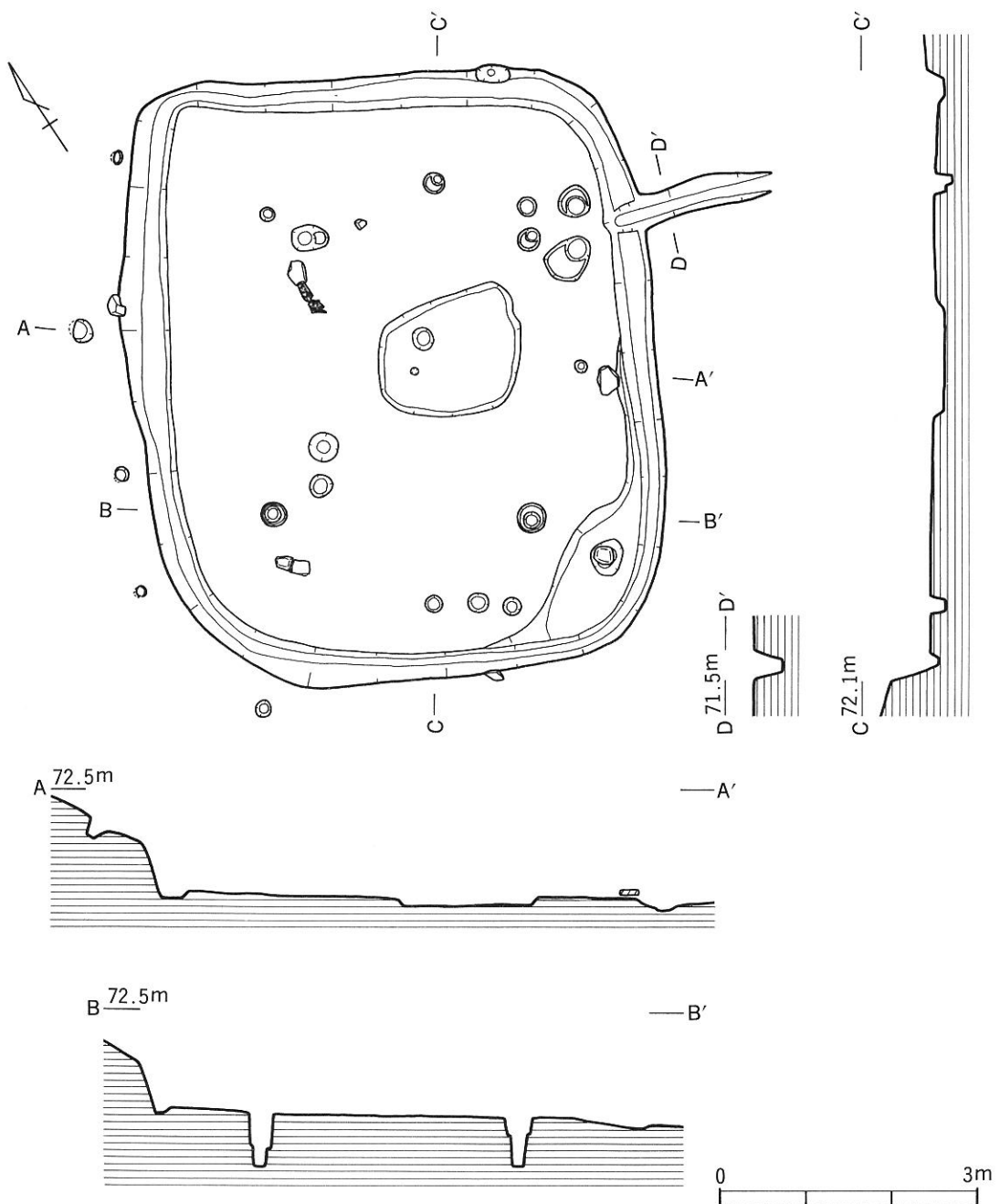
周溝は、壁際を巡っており、幅30cmから52cm、深さ約10cmである。さらに東側のやや北寄りに住居より外に向かって、幅32cm、深さ32cmの溝状遺構が伸びている。この遺構は、住居より外側に向かって傾斜しており、排水施設と思われる。

住居のほぼ中央に、長径168cm、短径140cmの長方形の土坑があり、埋土は焼土が堆積していることから炉として利用されたと思われる。

支柱穴は、その炉を中心に南北方向に西側3.2m、東側3.6m、東西方向に北側2.6m、南側3.0mの間隔で4個並んでいる。炉に対して南側の2個は2段掘りになっている。北東の柱穴は直径22cm、深さ54cm。北西の柱穴は直径28cm、深さ58cm。南東の柱穴は1段目が直径32cm、深さ18cm、2段目が直径20cm、深さ36cm。南西の柱穴は1段目が直径26cm、深さ40cm、2段目が直径16cm、深さ20cmである。各柱穴ともほぼ深さが一定で、埋土もすべて焼土である。

また、西側の壁の上位の斜面に、斜めに掘り込まれた柱穴が5個確認された。5個の平均は、直径は平面形で約18cm、斜面形で約25cm、深さ約20cmである。これらの柱穴は、すべて住居の内側に向けて約40度の角度で掘られており、住居建設の際に利用されたものと思われる。

床面の東側と南側に作業台と思われる平石が3個置かれている。



第9図 SB03実測図

埋土は基本的には5層で、住居の東端部で後世の攪乱を受けている。

第I層は褐色土（10YR4/6）で平均25cmの厚さで全面に堆積しており、小礫を含む。

第II層は明褐色土（7.5YR5/8）で住居中央より斜面下位に堆積している。

第III層は暗褐色土（7.5YR3/4）で平均60cmの厚さで全面に堆積している。全体に小礫を含み、その低位に流入と思われる多数の土器片を含んでいる。

第IV層は明褐色土（7.5YR5/6）で斜面上位に一部堆積する。

第V層は赤褐色粘質土（5 YR4/8）で平均40cmの厚さで全面に堆積している。この層の大部分が焼土で、特に床面近くには大量の炭とともに数本の炭化木材も検出されている。また、床面と壁面の一部が焼き締まっており焼失家屋と推定される。

出土遺物

土器 (第10図)

12は、鉢の体部上位から口縁部である。口縁部はくの字形に強く外反し、さらに外湾しながら端部に至る。調整は口縁部内外面でハケのちヨコナデ。床面より出土。

13は、甕の胴部上位から口縁部である。口縁部はくの字形に強く外反し端部に至る。端部は下方につまみ出している。胴部上位に篋描斜め文が施されている。調整は口縁部内外面でナデ。

14は、甕の胴部中位から口縁部である。口縁部はくの字形に強く外反し端部に至る。端部は若干下方につまみ出している。口縁部は貼付けて器厚が胴部より厚い。調整は口縁部内外面でナデ、胴部外面でハケ、2次焼成がみられる。

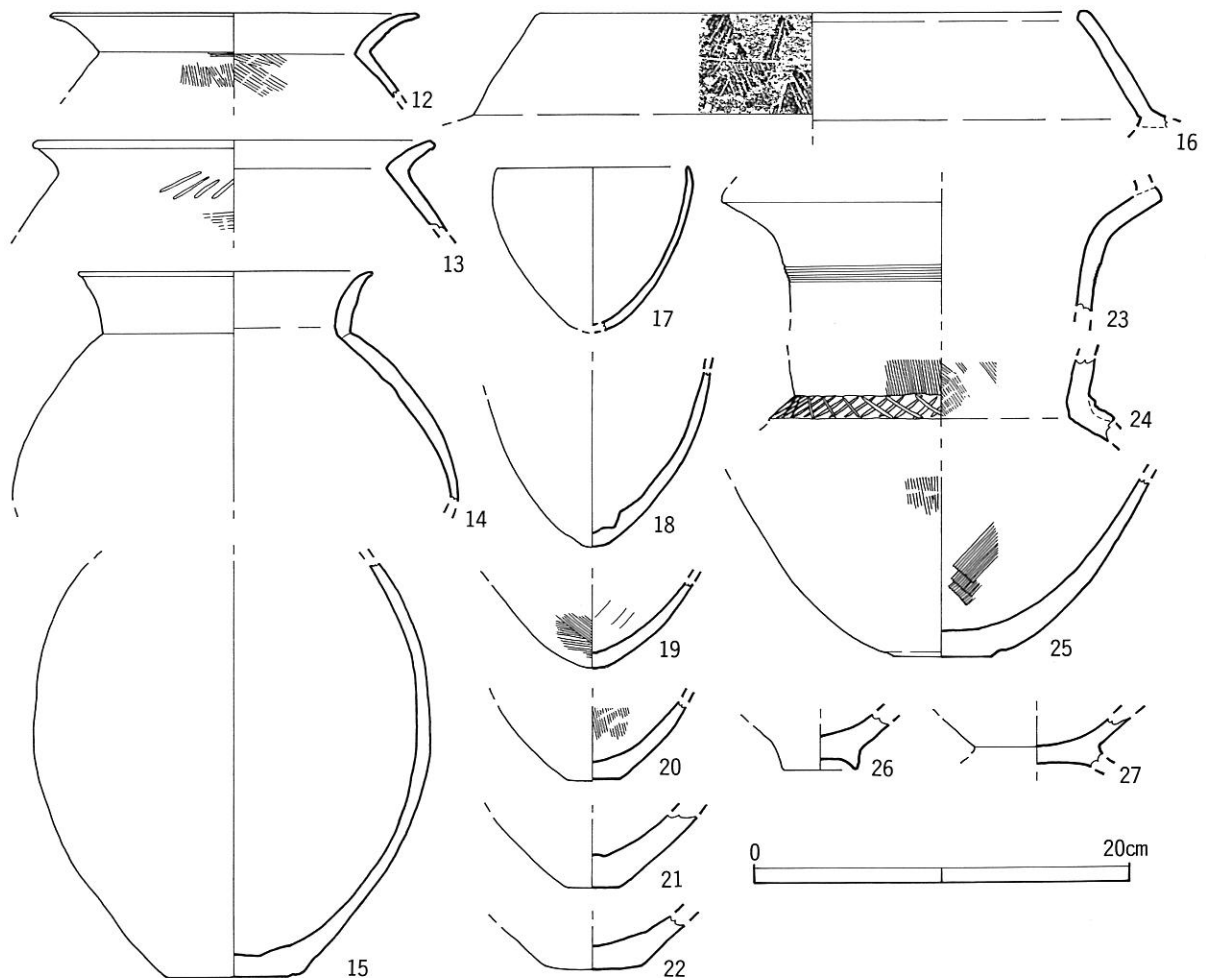
15は、平底の壺で底部に黒斑がみられる。調整は胴部外面でハケのちヘラミガキ、底部内外面でナデ。14・15はともに北側の周溝より出土。

16は、複合口縁の壺の口縁部である。口縁部は屈折部より内傾しながら直線的に立ち上がり端部に至る。口縁部外面に2重の篋描山形文が施されている。第Ⅲ層下位より出土。

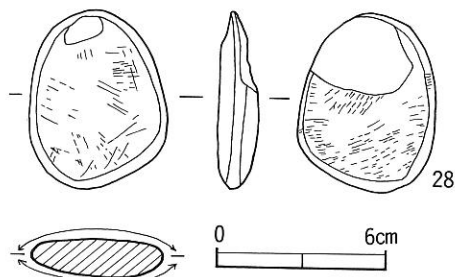
17は、丸底の鉢で、体部上位が張る。口縁部がやや内湾している。調整は内外面でハケ。西側の周溝内より出土。

18は、丸底の甕である。2次焼成がみられる。

19は、不安定な平底の甕と思われる。調整は内外面でハケ。



第10図 S B 0 3 遺物実測図①



第11図 SB03 遺物実測図②

20は、平底の甕と思われる。調整は胴部内外面でハケのちナデ。

21は、平底の壺である。

22は、底部が凸レンズ上の不安定な甕と思われる。調整は内外面でハケ。2次焼成がみられる。

23は、複合口縁の壺の頸部である。頸部外面に櫛描平行線が施されている。調整は内外面ともハケ。

24は、壺である。頸部と胴部との境に篋描斜格子文の施された貼付け突帯が巡る。調整は頸部内外面でハケ。23・24は第V層より出土。

25は、平底の壺で調整は内外面ともハケ。

26は、やや上げ底の甕と思われる。調整は内外面ともナデ。2次焼成がみられる。

27は、台付き鉢である。台部は貼付けで内面の調整はハケ。25・26・27は床面より出土。

石器 (第11図)

28は、砥石で床面より出土。石材は安山岩で一部欠損するが、角のない円形外郭の残存状態はよい。長径6.4cm、短径4.8cm、厚さ1.3cmである。両面に鋭い擦痕が認められる。

(4) SB04 (第12図 図版5)

SB04は、調査区の東端やや下位に位置する。段落ちに挟まれた傾斜角約3度のほぼ平坦面に立地する。段落ちは、上段の上部の傾斜角が約10度であり、下段の下部の傾斜角が約15度である。住居の床面は斜面下位側、南西側で不安定になる。そして住居の外側で行った試掘調査の結果などから、斜面上位側の土砂で斜面下位側を造成して平坦面を形成したことが確認された。

平面形は長径6.66m、短径6.54mの円形である。

残存壁高は、斜面上位の北東側で約76cm、南東側で約45cm、北西側で約60cm、南西側は削平されており一部壁がない部分もあるが平均約10cmである。

住居のほぼ中央に長径84cm、短径72cmの楕円形の土坑があり、埋土は焼土を含んでいることから炉として利用されたと思われる。

周溝は、壁際を巡っており、斜面上位の東側で幅40cm、深さ10cmから18cmであり、斜面下位の西側では幅20cm、深さ6cmから8cmとなっている。

また、中央の炉より西に向かって1条の溝状遺構がある。幅12cm、深さ8cmで、炉より西側に傾斜しているが、周溝の直前で消滅している。

支柱穴は、炉を中心として5.3mから7.0mの間隔で円形に7個並んでいる。そのうち東側の3個は2段掘りになっており、直径30cmから40cm、深さ38cmから47cmである。それに対して、西側の4個は直径30cmから16cm、深さ7cmから52cmと大きき深さにばらつきがある。

特に深さについては、斜面下位の西側の柱穴ほど浅くなっている。これは、壁が西側の一部でないことや周溝が狭く浅くなっていること、さらに炉からの溝状遺構が西側で消滅していること、床面が

若干西側に傾斜していることなどから後世に削平を受けたと考えられる。

埋土は基本的には5層で、住居の中央部（第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層）と南南西部（第Ⅹ層）で攪乱を受けている。

第Ⅰ層は、褐色土（7.5YR4/6）で流入と思われる土器片を多数含む。

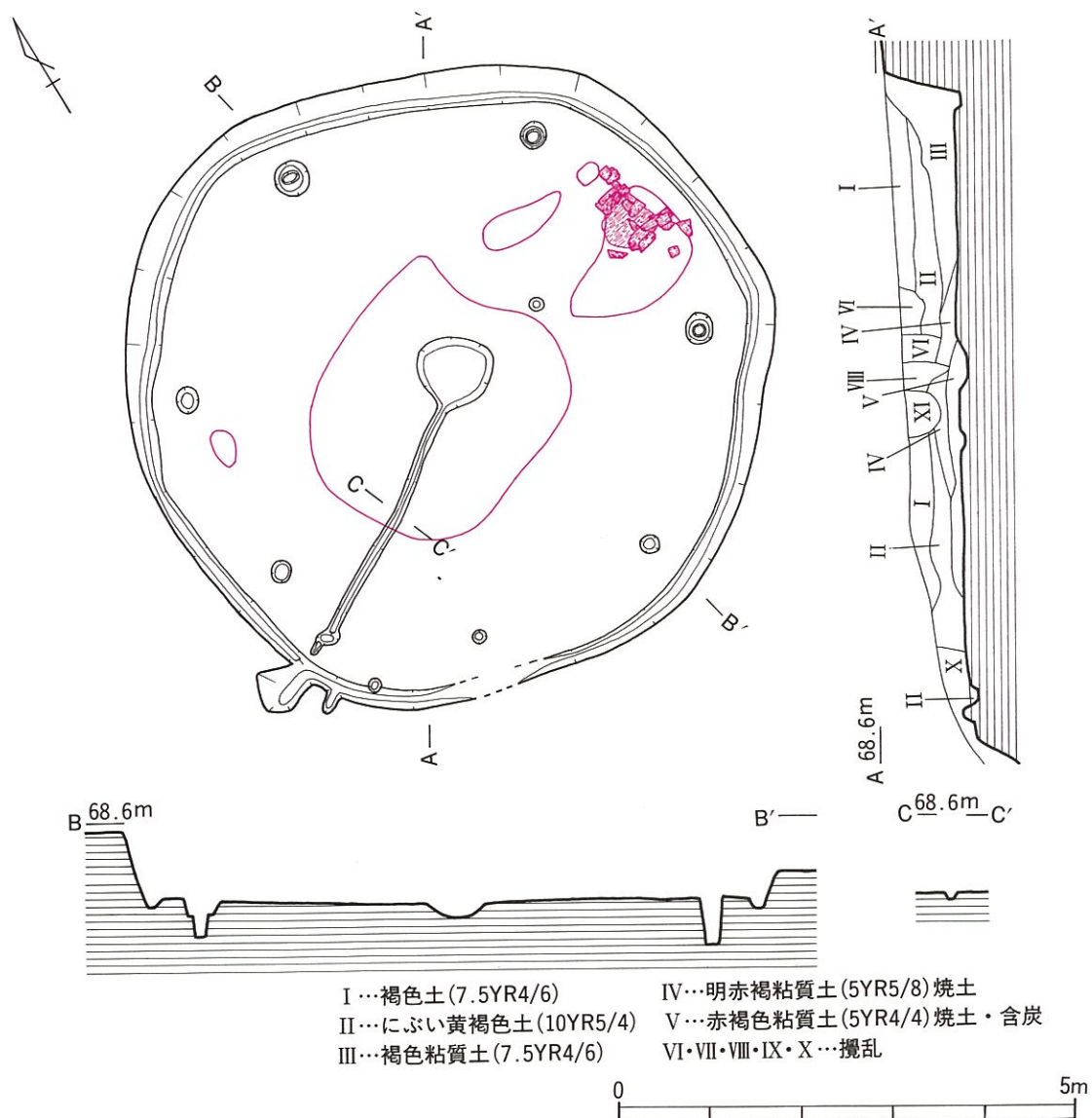
第Ⅱ層は、にぶい黄褐色土（10YR5/4）。第Ⅲ層は、褐色粘質土（7.5YR4/6）。

第Ⅳ層は、明赤褐色粘質土（5YR5/8）で大部分が焼土である。

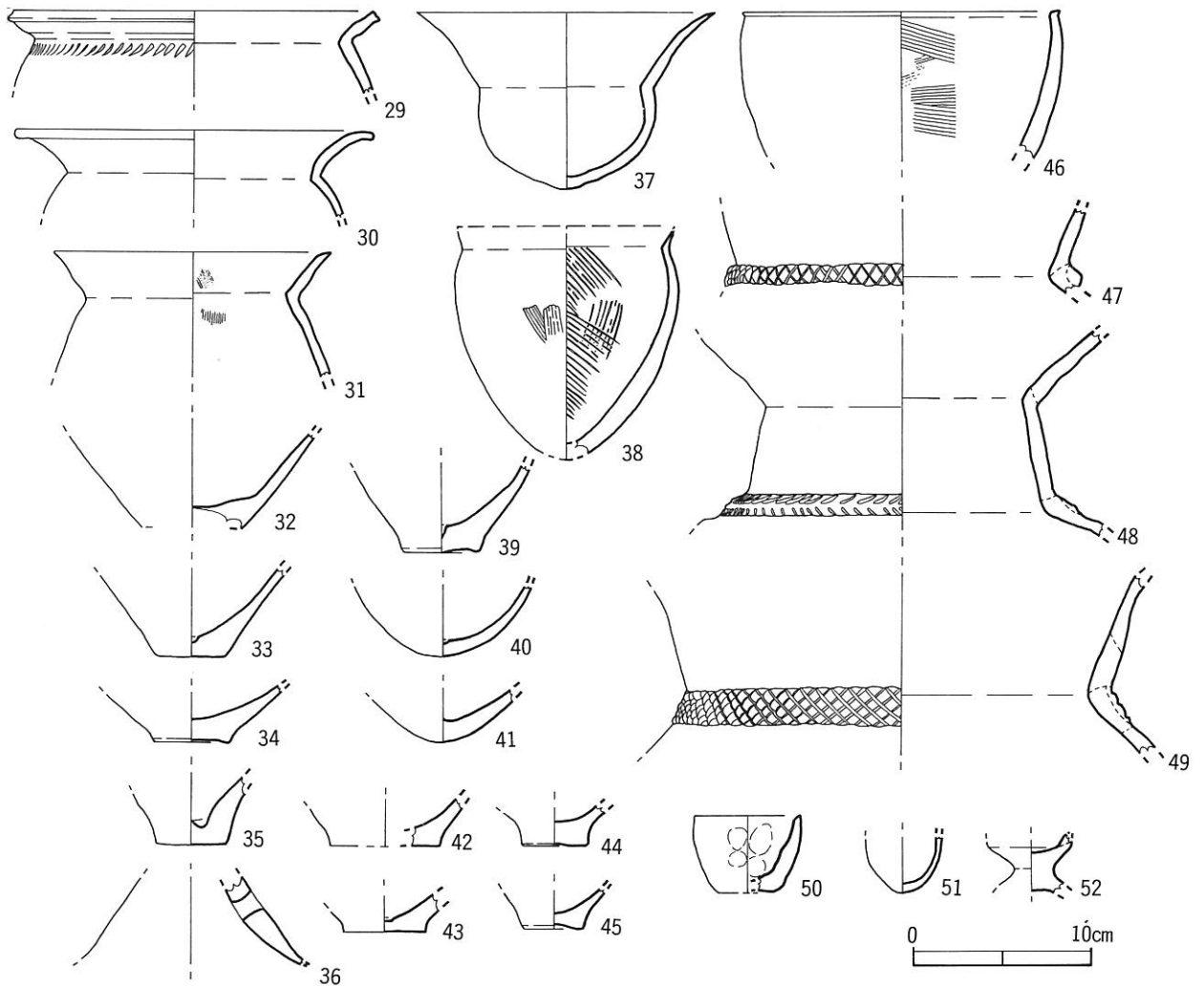
第Ⅴ層は、赤褐色粘質土（5YR4/4）で大部分が焼土であり、大量の炭を含んでいる。第Ⅳ層・第Ⅴ層は、主に住居の中央部と東側に堆積している。また、床面の東側には炭化木材が検出されており壁面の一部が焼き締まっていることなどから焼失家屋と推定される。

また、住居の焼失との関係ははっきりしないが、西側の段落ち部分でも大量の焼土の層が確認されている。

検出された炭化木材は、板状のもので住居の中央に向かって並んでおり、壁面に近いことから壁の張り板の可能性もある。



第12図 SB04 実測図



第13図 S B 0 4 遺物実測図①

出土遺物

土器 (第13図)

29は、甕の胴部上位から口縁部で、第I層より出土。短い口縁部はくの字形に強く外反し、やや器厚をましながらか、面を持つ端部に至る。頸部直下に篋状工具による斜位の刺突文を1条巡らす。調整は口縁部内外面にナデ。

30は、鉢の体部上位から口縁部である。口縁部はくの字形に強く外反し、さらに外湾しながら端部に至る。

31は、甕の体部上位から口縁部である。口縁部はくの字形に外反。30・31は、床面より出土。

32・33・35・41・42・43・44・45は、甕の底部と思われる。34・39・40は、壺の底部と思われる。

36は、高坏の脚部である。脚部中位に穿孔があるが、数については不明である。脚部中位より器厚を減しながら端部に至る。

37は、鉢で、上位が張ったほぼ球状の体部から口縁部が外反し大きく開く。底部に若干の突出がある。

38は、甕で、上位がやや張った胴部から、口縁部がわずかに外反しながら立ち上がる。調整は外面にハケ、内面にヘラケズリのちハケ。

46は、甕で、胴部は内湾ぎみに立ち上がり口縁部に至る。口縁端部をつまみ出している。2次焼成がみられる。

47は、複合口縁の壺の頸部である。頸部が外傾して立ち上がり、頸部と胴部との境に篋描斜格子文の施された貼付け突帯が巡る。

48は、複合口縁の壺の頸部から口縁部である。胴部より内傾して頸部が立ち上がり、くの字形に外反して口縁部に至る。頸部と胴部との境に突帯の中心を頂点として、上下に篋描斜め文の施された貼付け突帯が巡る。

49は、やや長い頸部を持つ複合口縁の壺である。頸部と胴部の境に篋描斜格子文を施した貼付け突帯が巡る。36・37・38・46・47・48・49は床面及び周溝内より出土。

50・51・52は、ミニチュア土器である。50・51は手づくねの鉢である。52は高坏で、坏部は貼付けである。

石器 (第14図)

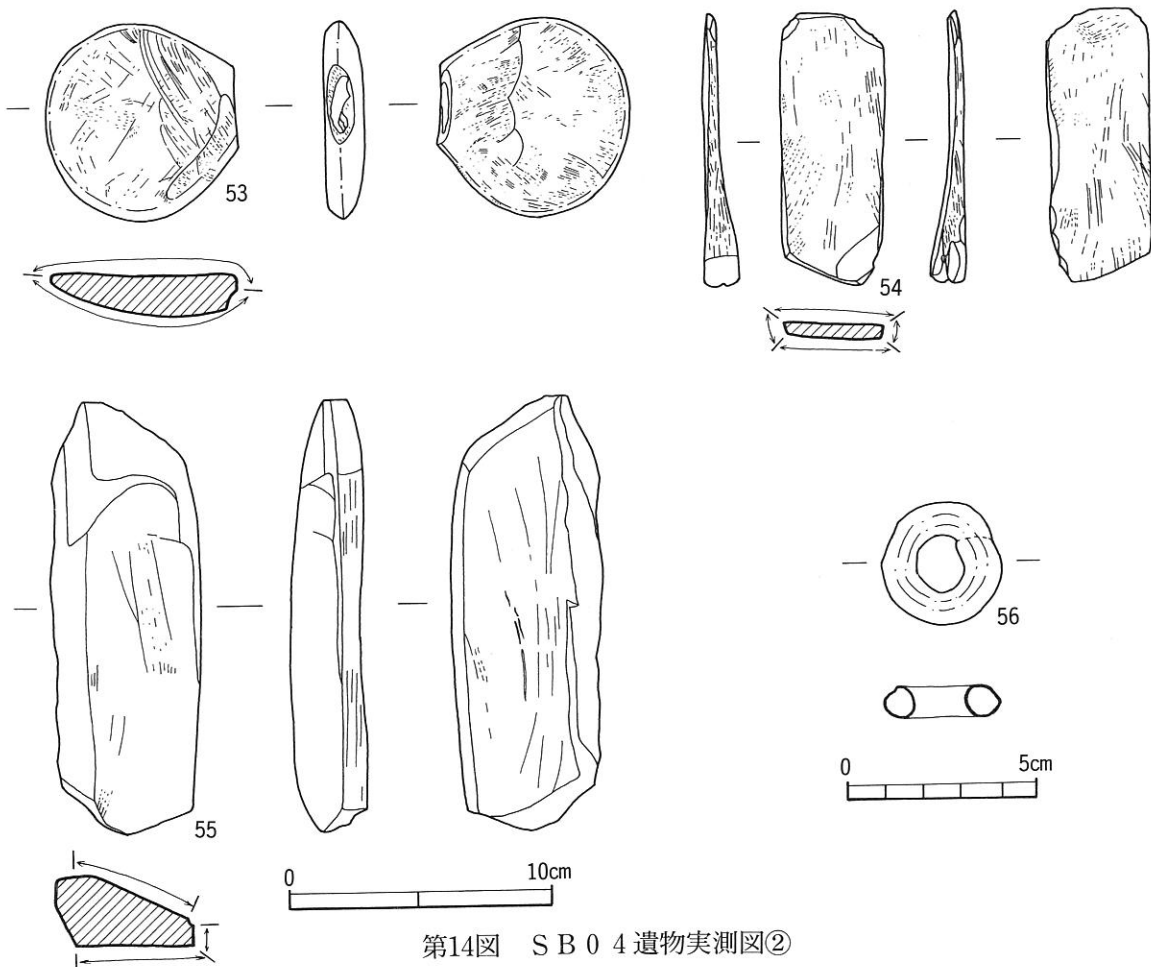
53は、円形の砥石で一部欠損する。石材は凝灰岩で、2面を使用しており鋭い擦痕が残る。

54は、凝灰岩製の砥石である。4面を使用しており、かなり使い込んでいる。使用面に擦痕が残る。

55は、泥質片岩製の砥石である。2面を使用しており、使用面に細かい擦痕が残る。

土製品 (第14図)

56は、直径3.2cmのドーナツ状の土製品である。直径0.8cmの粘土紐をつないでおり用途は不明。



第14図 SB04 遺物実測図②

(5) SB05 (第15図 図版7)

SB05は、SB04の東に隣接する北から南に約10度傾斜する緩斜面に位置する。平面形は南北方向にやや長い円形である。長径は8.14m、短径は7.76m、残存壁高は、斜面上位の北側で約65cm、東側で約52cm、西側で約24cm、南側については壁が残存しない部分もあり、平均約10cmである。

特に北側の壁については、地山整形の際、2段構築を行っており、上段の上部から床面までの高さは約120cmである。1段目は、約55度の傾斜角で床面から約60cmの高さまで掘り込み、一端平坦面をつくり、さらに約70度の角度で床面まで掘り込んでいる。しかし、SB03や後記するSB06のように1段目の斜面や平坦面には柱穴や溝状遺構は検出されず、住居建設の際に利用されたものではなく、壁面の崩落を防ぐためのものと推定される。

住居のほぼ中央に、直径120cmの円形の土坑があり、埋土は焼土を含んでいることから炉として利用されたと思われる。

周溝は、西側の一部を除いて壁際を巡っている。幅は40cmから50cm、深さ10cmから18cmである。西側については、北側からの周溝はそのまま外部の溝状遺構につながっており、もう1条は南西部を起点として南東方向に傾斜しながら周溝を形成している。周溝のない南西側は出入口の可能性もある。

また、溝状遺構が周溝の北北西側から炉に向かって伸びており、そのままわずかに方向を変えながら直線的に南側の周溝に到達している。さらに南に向かって住居外に伸びている。この一連の溝状遺構は、住居の北北西から炉へ、さらに炉から住居外へと傾斜しており排水施設と考えられる。

支柱穴は、炉を中心として1.7mから2.3mの間隔で10個並んでいる。直径約35cm、深さは20cmから60cmである。深さにばらつきがあるが、北側で浅く、南側で深い傾向がある。そのうち中位にテラス状の段を持つ柱穴が4個ある。

また、10個の支柱穴のうち7個に直径16cmから24cm、深さ12cmから40cmの少し小型の柱穴が近接しており、補助柱穴と思われる。

炉の東西には、炉を挟むように柱穴がある。それらの柱穴は一部が重なるように2個ずつあり、炉からの距離もほぼ同一である。それぞれ、浅い柱穴が西側直径40cm、深さ10cm、東側直径20cm、深さ6cmで、深い柱穴が、西側直径36cm、深さ15cm、東側直径28cm、深さ23cmで支柱穴と思われる。

炉の東側には、長径32cm、短径24cmの楕円形の平石があり、上面には使用痕も認められ作業台として利用されたと思われる。

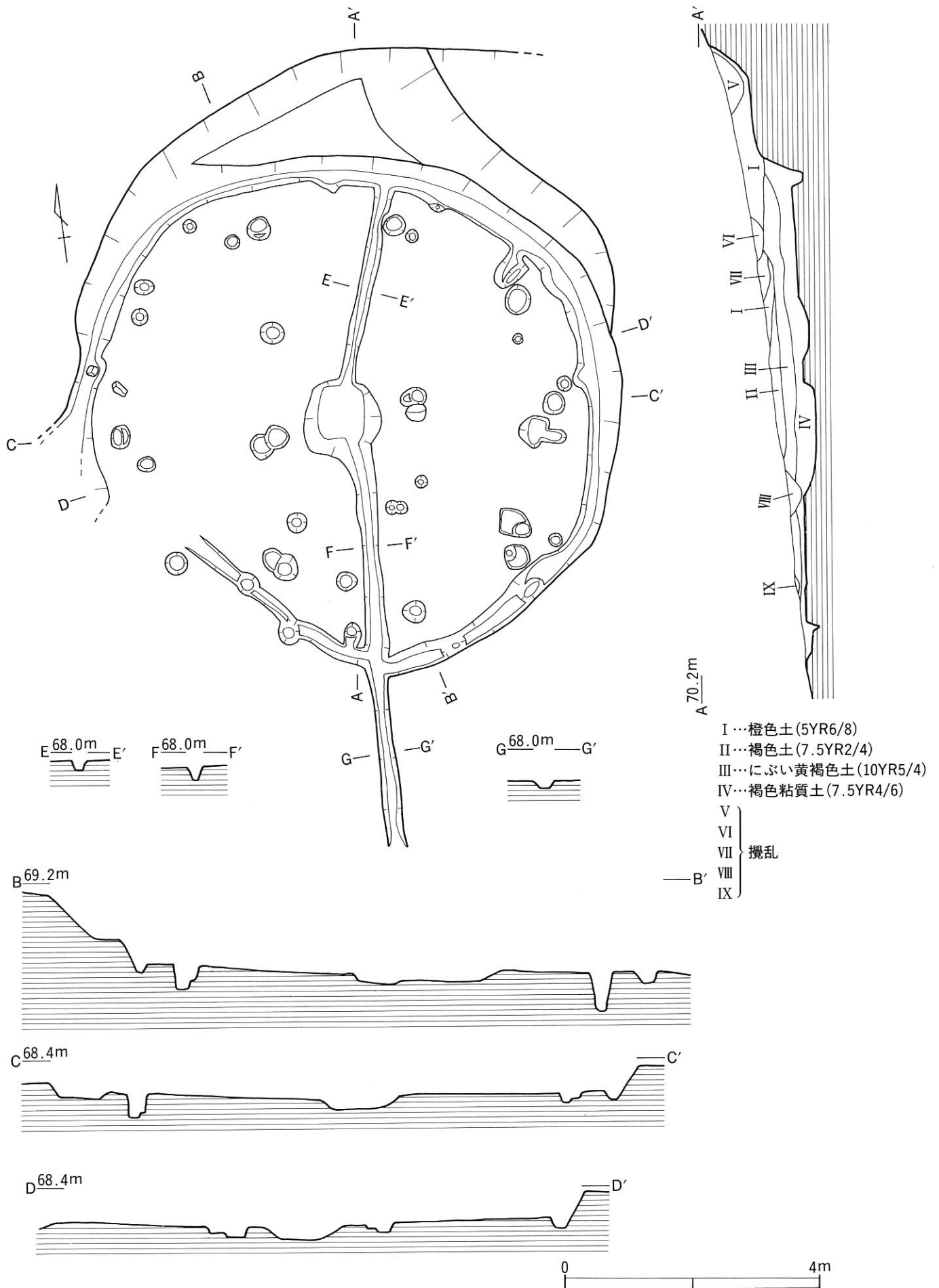
埋土は基本的には4層で、上層に一部攪乱がみられる。

第I層は、橙色土(5YR6/8)で、土の状態が他の層に比べて柔らかく後世の攪乱の可能性もある。

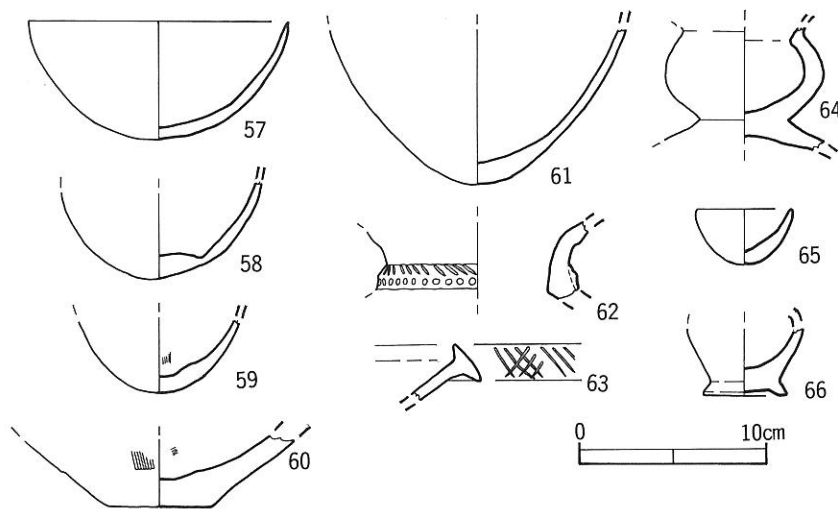
第II層は、褐色土(7.5YR2/4)で、流入と思われる土器片を多数含む。

第III層は、にぶい黄褐色土(10YR5/4)。第IV層は、褐色粘質土(7.5YR4/6)である。

第V・VI・VII・VIII・IX層は、攪乱と思われる。特に第V層は、直径10cm前後の礫を大量に含んだにぶい褐色土(7.5YR5/4)の層で、平面形は楕円形で陶器の細片を含んでおり、後世の人口的な攪乱と思われる。



第15図 SB05 実測図



第16図 S B 0 5 遺物実測図①

出土遺物

土器 (第16図)

57は、他の土器を再利用したと思われる鉢である。器形は半球状で、周溝より出土。

58は、鉢と思われる。底部に黒斑が認められる。

59は、甕と思われる。

60は、平底の壺で、底部より大きく外傾して立ち上がる。

61は、壺と思われる。丸底

の底部より外傾し立ち上がり、徐々に内傾し胴部を形成する。調整は内外面にハケ。周溝より出土。

62は、複合口縁の壺の頸部である。頸部は外傾しながら立ち上がり、さらに外反して口縁部に至る。頸部と胴部の境に斜め文や刺突文を施した貼付け突帯を巡らす。調整は頸部外面にハケ。

63は、器台の口縁部である。口縁端部を上下に拡張し、外面に篋描斜格子文を施す。

64は、台付壺である。台部より外傾して立ち上がり胴部中位で内傾し、さらに頸部で外反し口縁部に至る。調整は胴部内面にハケ。周溝内より出土。

65・66は、ミニチュア土器である。65は鉢である。66は手づくねで底端部をつまみ出している。

58・59・62・63・65・66は床面付近より出土。60は第Ⅲ層より出土。

鉄器 (第17図)

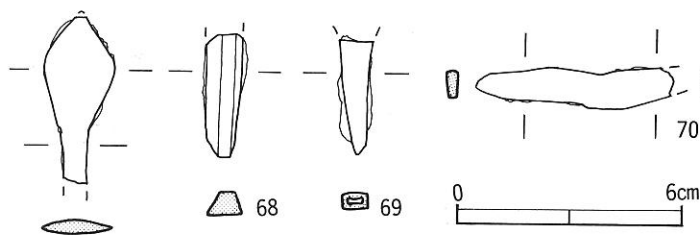
67は、有茎で幅の広い柳葉形の鉄鎌である。身部の先端と茎部の一部を欠損しており、残部法量は全長4.4cmである。身部は長さ3.0cm、最大幅1.9cm、厚さ0.4cmで、断面形はレンズ形である。茎部は長さ1.4cmで断面形は長径0.6cm、短径0.4cmの四角形であり、中空になっている。

68は、鉄鎌の茎部で、茎部途中より身部側を欠損する。残部法量は全長3.3cmで、断面形は長辺0.9cm、短辺0.4cm、厚さ0.6cmの台形である。

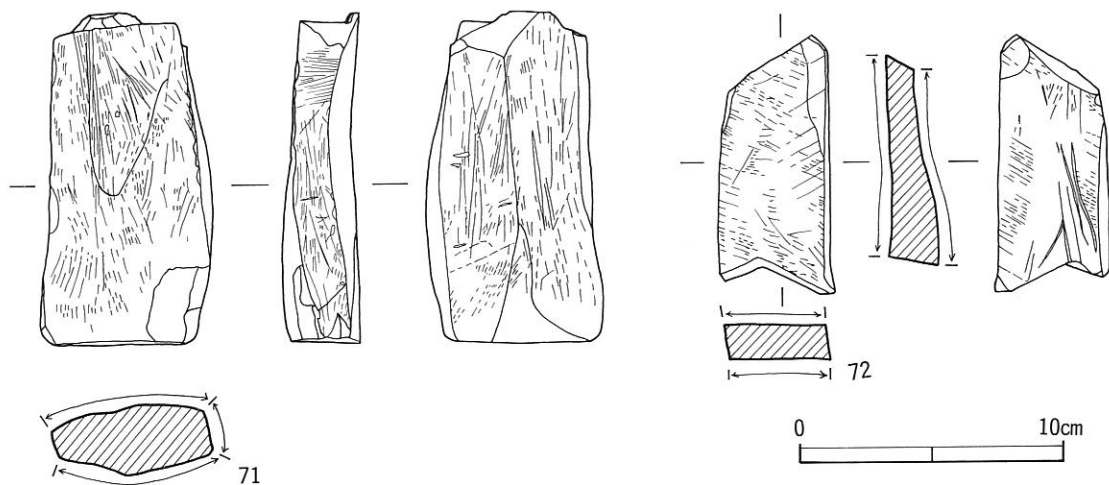
69は、同じく鉄鎌の茎部で、茎部途中より身部側を欠損する。残部法量は全長3.1cmで、断面形は長辺0.7cm、短辺0.4cmの四角形で、中空になっている。

70は、片刃の刀子である。残部法量は全長5.3cmで、刀身部を一部欠損する。茎部は2.8cmで断面形は、やや刃部側に薄い長方形である。その茎部より刃部側に斜め関を持って刀身部に至る。刀身部は2.5cmで断面形はクサビ形である。

これらの鉄器はすべて床面付近より出土した。



第17図 S B 0 5 遺物実測図②



第18図 SB05 遺物実測図③

石器 (第18図)

71は、凝灰岩製の砥石で周溝内より出土。3面を使用しており、うち一面に稜を持つ。使用面には鋭い擦痕が残る。

72は、凝灰岩製の砥石で埋土中より出土。2面を使用しており、1面には比較的大きな擦痕が残り、もう1面には細かい擦痕が残る。

(6) SB06 (第19図 図版9)

SB06は、調査区のほぼ中央部やや下位に位置する。北西から南東に向かって約10度傾斜する緩斜面に立地する。平面形は、東西方向にやや長い円形である。長径は10.38m、短径は9.12mで県下最大級の規模を誇る。残存壁高は、斜面上位の北側で約63cm、東側で約54cm、西側で約23cm、そして南側で約2cmである。

特に北側の壁については、SB05と同様に地山整形の際、2段構築を行っており、上段の上部から床面までの高さは約110cmである。1段目は、約35度の傾斜角で床面から約72cmの高さまで掘り込み、一端平坦面を作り、さらに約72度の角度で床面まで掘り込んでいる。その上段の平坦面に柱穴を掘り込んでいる。しかし、これらの柱穴はSB03のように、住居の内側に向かって柱が立つような角度ではなく、ほぼ垂直に立つようになっている。このことから住居建設の際に、これらの柱穴を利用したとは考えにくい。むしろ若干削平のため残存状態が悪いが、最も良好な北側にある連続した柱穴に注目すると、斜面上位からの土砂や雨水の流入を防ぐための施設があった可能性が高い。

住居の中央には長径200cm、短径168cmのほぼ楕円形の土坑がある。この土坑の埋土には、焼土が含まれており炉として利用されたと思われる。

周溝は、壁際に巡っており、幅32cmから44cm、深さ6cmから12cmである。そのほか西側から壁際を巡る周溝から分離し、そのまま住居の内側の約1/2を巡る周溝と、南側で分離し、壁際の周溝と東側で分離した周溝との間を住居の約1/4を巡る周溝とがある。住居を約1/2巡る周溝は、分離した部分が幅44cm、深さ15cmで、その後徐々に狭くなりながら消滅する。住居を約1/4巡る周溝は、幅約24cm、深さ約5cmで支柱穴を3個結んでいる。

また、炉から溝状遺構が住居を約1/2巡る周溝に接続し、さらに外側の周溝に接続している。住居約

1/2巡る周溝からはもう1か所外側の周溝に接続し、さらに住居の外に伸びる溝状遺構がある。これら一連の溝はすべて住居の外へ向かって傾斜しており、排水施設と推測できる。

主柱穴は、炉を中心に外側の周溝の近くに1.80mから2.60mの間隔で13個並んでいる。それらの柱穴は直径20cmから44cm、深さ30cmから69cmで、うち7個は途中で段を持つ柱穴である。また、うち10個の主柱穴に隣接して小型の柱穴がある。これらの柱穴は補助的なものか、もしくは住居を約1/2巡る周溝の内側に続く柱穴もあり、住居を南側に拡張した可能性もある。

他の主柱穴としては、炉の回りに約2.50mから3.00mの間隔で4個の柱穴がある。それらの柱穴は直径32cmから40cm、深さ33cmから48cmですべて2段掘りになっている。

埋土は5層で、第I層は、橙色土(5 YR6/8)で土の状態が他の層に比べて柔らかく後世の攪乱の可能性もある。

第II層は、褐色土(7.5YR4/6)で、流入と思われる土器片を多数含む。

第III層は、褐色土(7.5YR2/4)で、小礫が混在している。第IV層は、赤褐色土(5 YR4/6)である。

第V層は、赤褐色粘質土(5 YR4/4)で、大部分が焼土であり、大量の炭を含んでいる。この層は、住居のほぼ全面に堆積しており、一部炭化木材も検出されていることから焼失家屋と推定される。

出土遺物

土器 (第20・21図)

73は、台付甕である。球状の胴部からくの字形に強く外反する口縁部をもち端部はやや薄くなる。台部は裾に向かって緩やかに広がり、頸部にはハケ原体による段がある。調整は口縁部及び台部内外面にハケのちナデ。

74は、台付鉢である。上位が張る体部から、口縁部はくの字形に強く外反し、さらに外湾しながら端部に至る。調整は口縁部内外面及び体部内面にナデ、体部外面にハケ。

75は、体部上位の張った鉢である。調整は内外面にハケのちナデ。

76・77は、甕の底部と思われる。78は、壺の底部。

79は、壺である。中位やや下方で張る球状の胴部から、くの字形に強く外反する口縁部を持つ。胴部上位に篋状工具により、斜線を組み合わせた斜格子文のような文様と三角形の中に平行線を入れた文様を施している。調整は口縁部内外面と胴部内面にナデ、胴部外面にヘラケズリのちハケ。

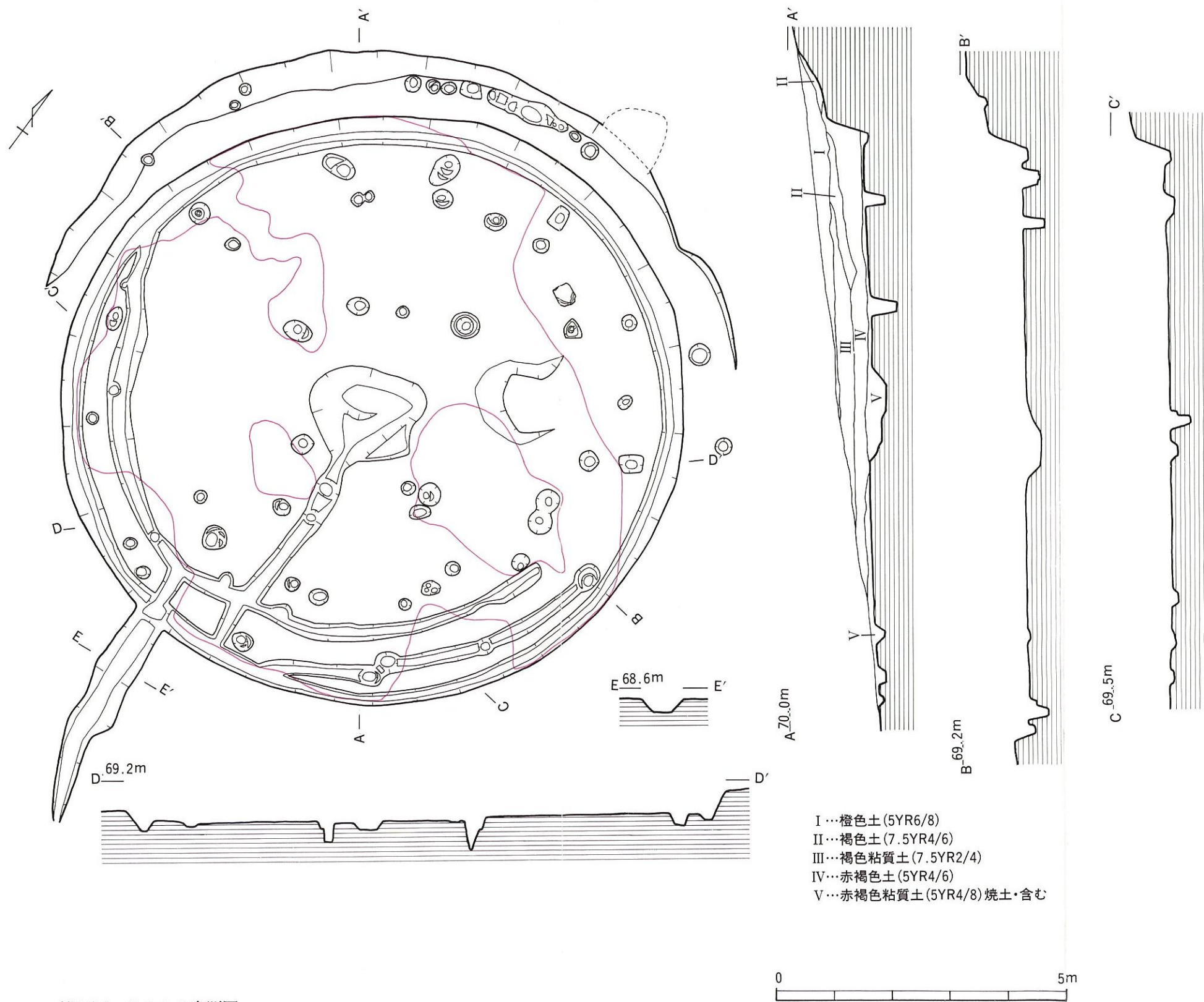
80は、他の土器を再利用した鉢である。平底より外反しながら体部を形成し、体部の上端で内湾し口縁部をなす。底部に対して口縁部が傾く。調整は口縁部内外面と体部下位にナデ、体部外面と内面上位にハケ。

81は、甕の胴部中位から口縁部である。口縁部はくの字形に外反し、端部上面で斜傾する。調整は口縁部内外面にナデ、胴部内面にヘラケズリ。

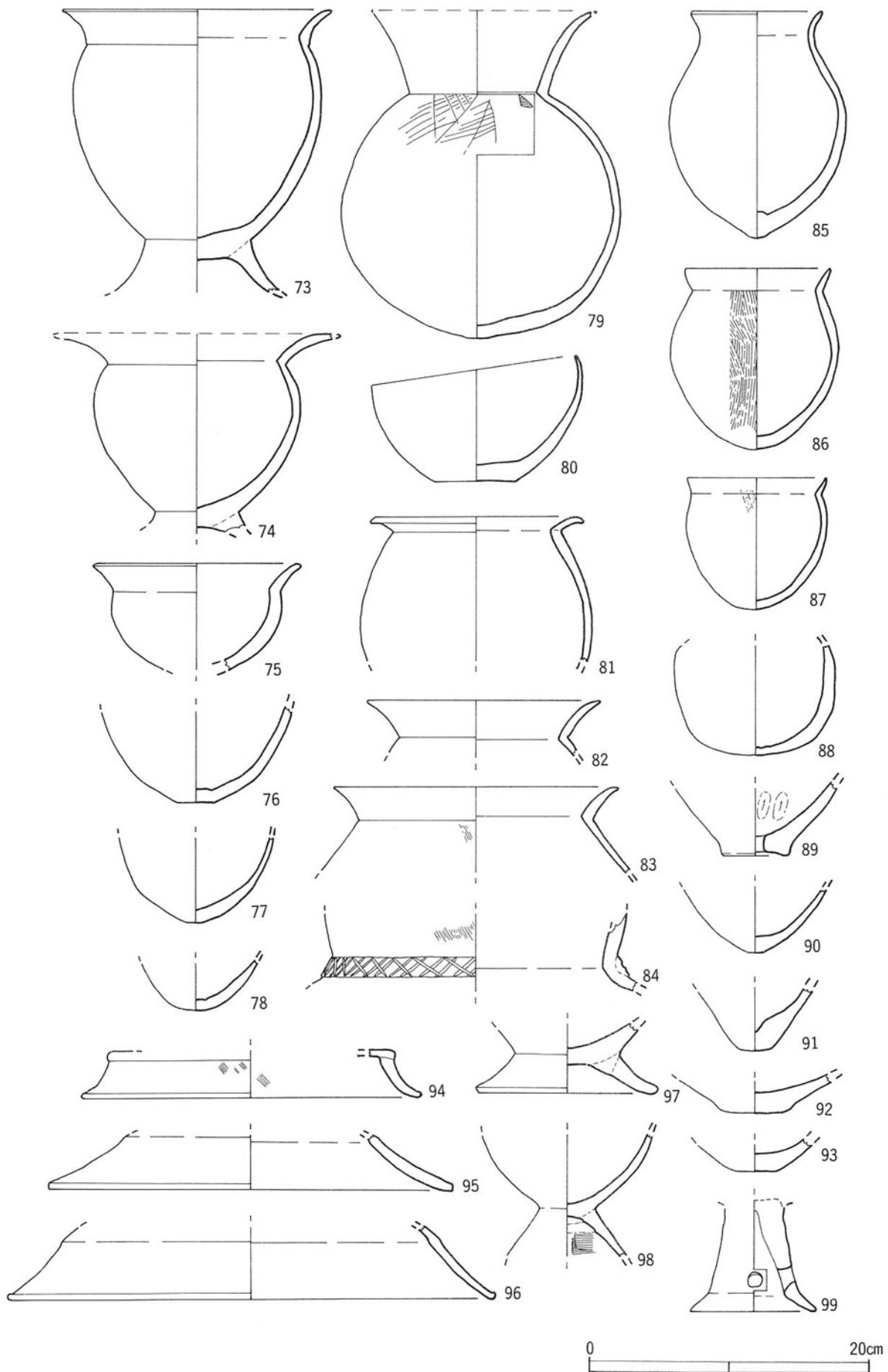
82は鉢。83は甕。ともに口縁部はくの字形に強く外反し、頸部にハケ原体による段がある。

84は、複合口縁の壺の頸部である。頸部は外傾して直線的に立ち上がる。頸部と胴部の境に篋描斜格子文の貼付け突帯が巡る。調整は頸部外面にハケのちヨコナデ。

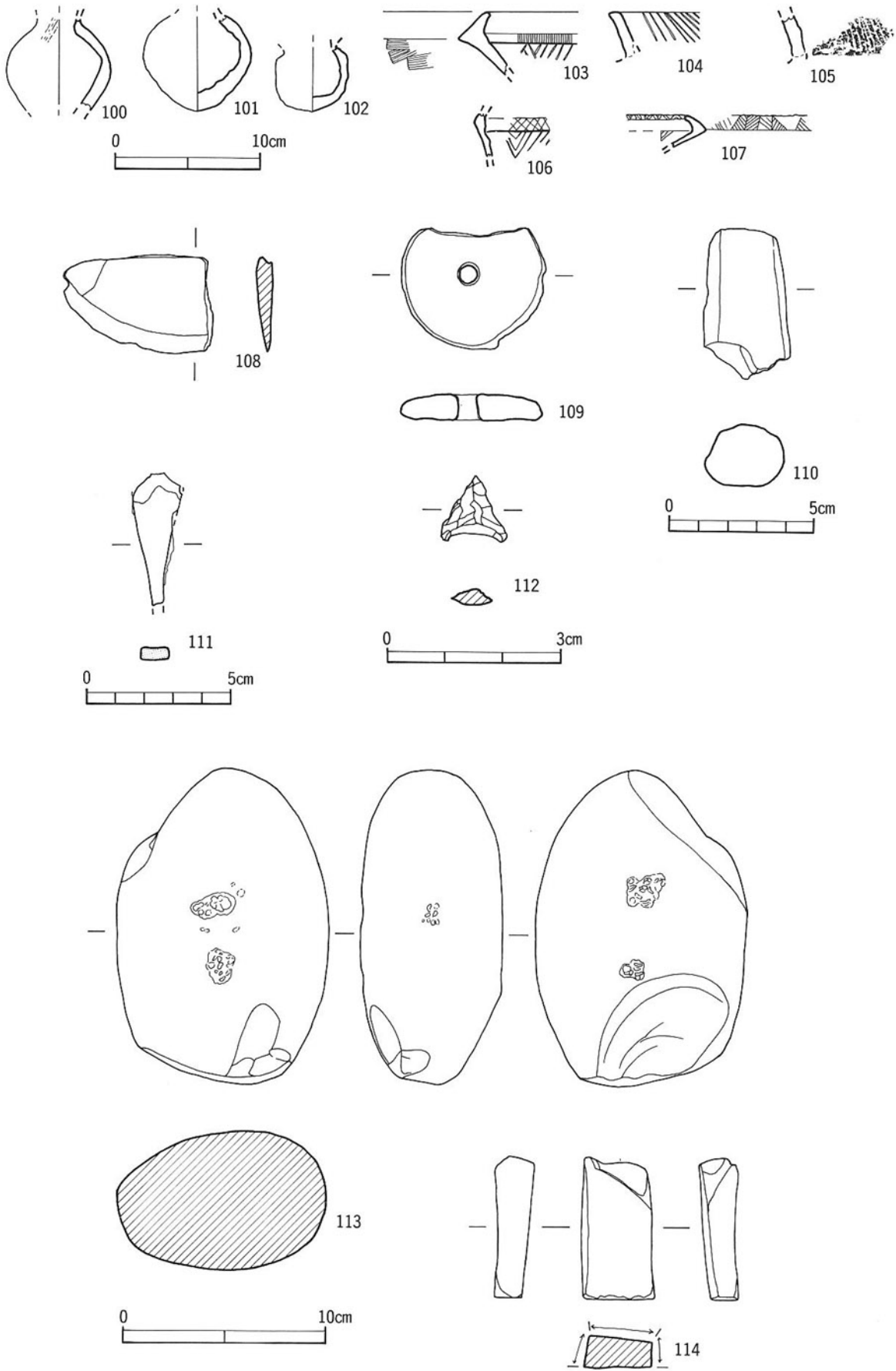
85は、甕である。底部内面にしぼり痕がある。



第19図 SB06実測図



第20図 SB06 遺物実測図①



第21图 SB06 遺物実測図②

86は、甕である。口縁端部でわずかに内湾する。2次焼成が認められる。

87は、鉢である。口縁端部がわずかに内湾する。85・86・87の調整は内面にナデ、外面にハケ。

88は、鉢と思われる。大きい凸レンズ状の底部より緩やかに立ち上がり、体部下位より内湾ぎみに丸みをもって頸部付近で強く内傾する。底部内面に指頭圧痕が残る。

89は、甕で底部中央に穿孔がある。底部の端部をややつまみ出している。

94は、大型の高坏の台部と思われる。裾部はほぼ水平に開いたのち、段をなしさらに下方に伸び端部に至る。

95・96は、ともに大型の器台である。裾部は外下方に開いたのち緩やかに屈曲し、さらに外下方に伸び端部に至る。95は端部をつまみ出している。96は端部に面を持つ。

97・98は、ともに台部貼付けの台付鉢である。97は台端部に面を持つ。98は台部内面に輪積痕が残る。調整は内外面にハケ。

99は、低脚の高坏の脚部である。脚部下位で屈曲して外下方に開く。3方向に透かし孔がある。

100は、小型の壺。

101・102は、ミニチュア土器である。101は、手づくねの壺。102は、鉢で口縁部が貼付けである。

103は、器台と思われる。屈折部にハケ原体による段があり、その下方に篋状工具による沈線、さらに、三角形を交互に組み合わせ、その中に交互に斜めの平行線を入れた文様が施されている。

104・105は、ともに複合口縁の壺の口縁部である。104・105は、外面に篋描斜め文。

106は、壺で、屈曲部外面に篋描斜格子文の施された貼付け突帯と立ち上がり部外面に山形文が巡る。

107は、器台と思われる。口縁端部に山形文が施されている。また、外面には篋状工具により台形を縦線で4分割し、その中に交互に斜めの平行線を入れた文様を施している。さらに内側に三角形の中に斜めの平行線を入れた文様を施している。

土製品 (第21図)

109は、一部を欠損する土製の紡錘車である。直径約5cm、厚さ0.9cmで中央に穿孔がある。穿孔は両面穿孔である。柱穴内より出土。

110は、一部を欠損する用途不明の土製品である。

鉄器 (第21図)

111は、有茎の柳葉形の鉄鏃で、身部と茎部の途中から欠損する。残部法量は、全長4.5cm、最大幅1.7cm、厚さ0.5cmである。茎部の断面形は長方形である。床面より出土。

石器 (第21図)

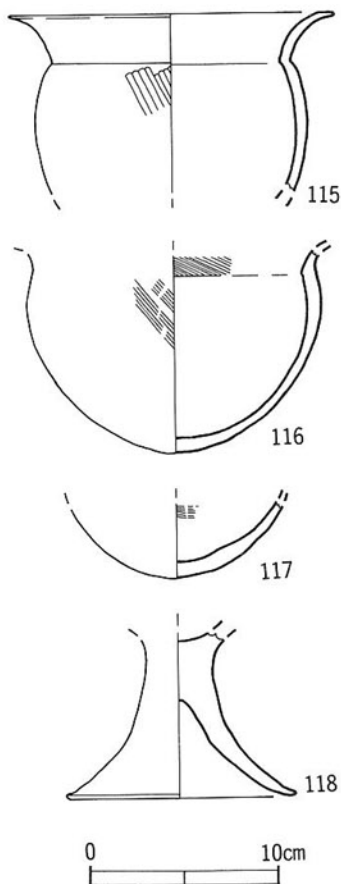
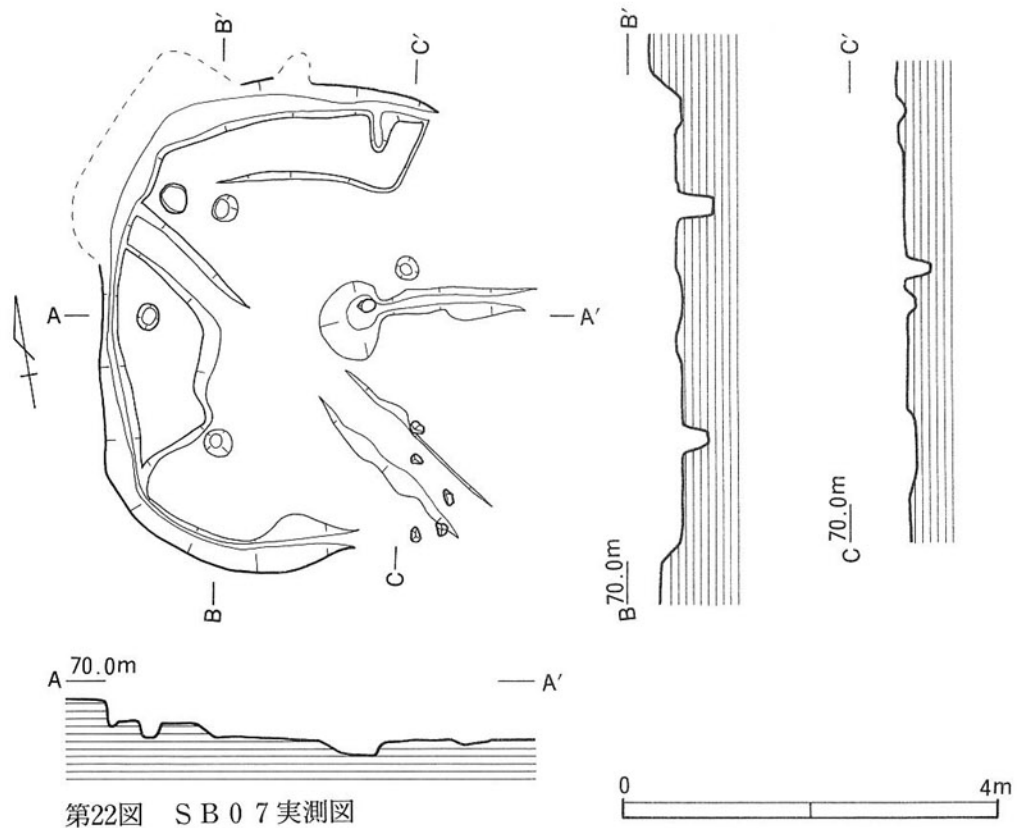
108は、泥岩製の石庖丁で一部を欠損する。床面付近の埋土中より出土。

112は、黒曜石製の小型の石鏃である。周溝内より出土。

113は、砂岩製の叩き石である。3面に使用痕が残る。床面付近の埋土中より出土。

114は、泥質片岩製の砥石である。3面に使用痕が残る。周溝内より出土。

(7) SB07 (第22図 図版11)



SB07は、SB06の北東部に位置する。西から東に約8度傾斜する緩斜面に立地する。全体的に削平されており、特に東側半分は削平され残存しない。平面形は、方形で南北方向に5.12mで、残存壁高は約20cmである。

住居を北西から南東にSX05が横断しており、床面とベット状遺構が削平されている。残存するベット状遺構は、東側で床面より約17cm、北側で約5cmの高さである。

周溝は壁際を巡っており、幅8cmから22cm、深さ約7cmである。

住居のほぼ中央に長径84cm、短径64cm、深さ13cmの楕円形の土坑がある。埋土には焼土が含まれており炉として利用されたと思われる。その炉より東に向かって幅約24cm、深さ約7cmの溝状遺構が伸びており、炉から東側に傾斜していることから、排水施設と思われる。

支柱穴は、炉を中心に北側に2.2m間隔で2個、その北西の1個より南に2.4mの間隔で1個、計3個の柱穴が残存する。それらの柱穴は幅24cmから32cm、深さ25cmから40cmである。それら3個の柱穴の間隔などから支柱穴は4個であったと推測される。

埋土は2層で、第I層は明黄褐色土(10YR6/6)、第II層は褐色土(7.5YR4/4)である。

出土遺物

土器 (第23図)

115・116・117は、鉢である。115・116は球状の体部より大きく外反する口縁部を持つものである。118は、高環の脚部である。脚部は外反しながら端部に至る。端部はつまみ出す。すべて床面及び周溝付近より出土。

(8) SB08 (第24図 図版12)

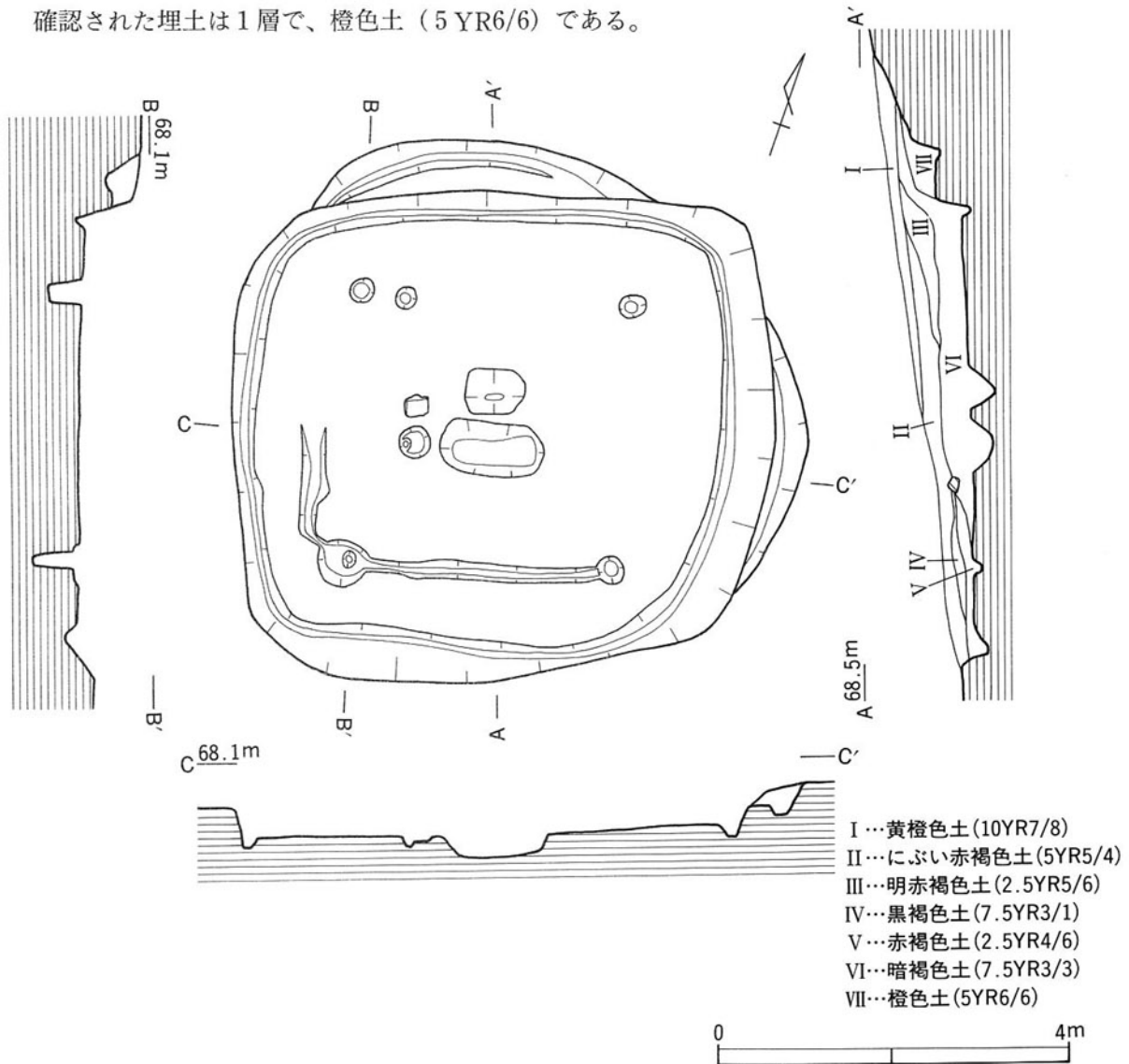
SB08は、SB06の南側に位置する。北北西から南南東に約9度傾斜する緩斜面に立地する。SB08が廃棄された後に、ほぼ同位置にSB09が掘り込まれており、SB08の残存状態は極めて悪い。

平面形は円形で、残存壁高は北側で約28cm、東側で約24cmである。

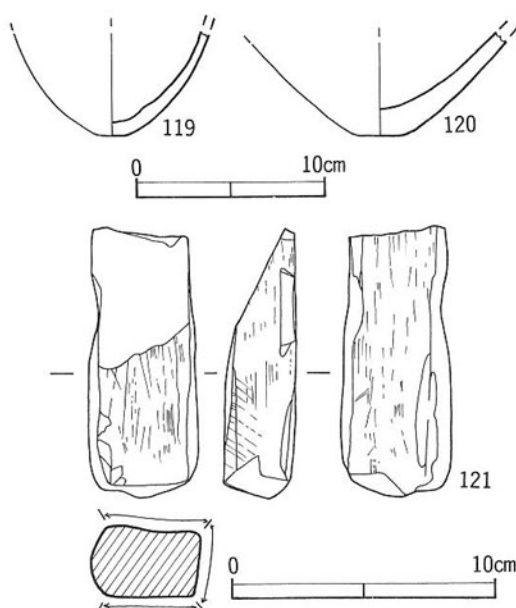
周溝は壁際を巡っていると思われ、北側で幅24cm、深さ4cm、東側で幅40cm、深さ10cmである。

柱穴等は確認されない。

確認された埋土は1層で、橙色土(5YR6/6)である。



第24図 SB08・09実測図



第25図 SB08 遺物実測図

出土遺物

土器 (第25図)

119は、平底の甕と思われる。

120は、平底の壺と思われる。調整は内面にハケ。

石器 (第25図)

121は、泥質岩製の砥石で、3面を使用している。使用面には、鋭い擦痕が残る。

(9) SB09 (第24図 図版12)

前記したように、SB09はSB08と同位置に立地する。平面形は東西方向にやや長い方形で、長軸5.64m短軸5.04mである。

残存壁高は、斜面高位の北側で約52cm、東・西側で約35cm、南側で約12cmである。

住居のほぼ中央に、長径68cm、短径52cmの楕円形の土坑があり、埋土に焼土を含むことから炉として利用されたものと思われる。そのすぐ南側に長径120cm、短径60cmの楕円形の屋内土坑がある。

周溝は、壁際を巡っており幅24cmから40cm、深さ10cmから18cmである。住居の南側には、壁際の周溝の内側に支柱穴を結ぶように幅約22cm、深さ約10cmの溝状遺構がある。この溝は、西側の途中で消滅しており用途は不明である。北側の柱穴間にも床面に痕跡が残っており、各支柱穴間を巡っていた可能性もある。

支柱穴は、炉を中心に約3.0mの間隔で4個並んでいる。南西側の1個を除いて、直径20cmから32cm、深さ32cmから39cmである。南西側の柱穴は、2段掘りになっていて、1段目が直径52cm、深さ8cm、2段目が直径20cm、深さ46cmである。

炉の西側には、作業台と思われる平石がある。

埋土は5層からなる。

第I層は、黄橙色土(10YR7/8)。第II層は、にぶい赤褐色土(5YR5/4)。第III層は、明赤褐色土(2.5YR5/6)。第IV層は、黒褐色土(7.5YR3/1)で、流入と思われる土器片を含む。第V層は、赤褐色土(2.5YR4/6)である。

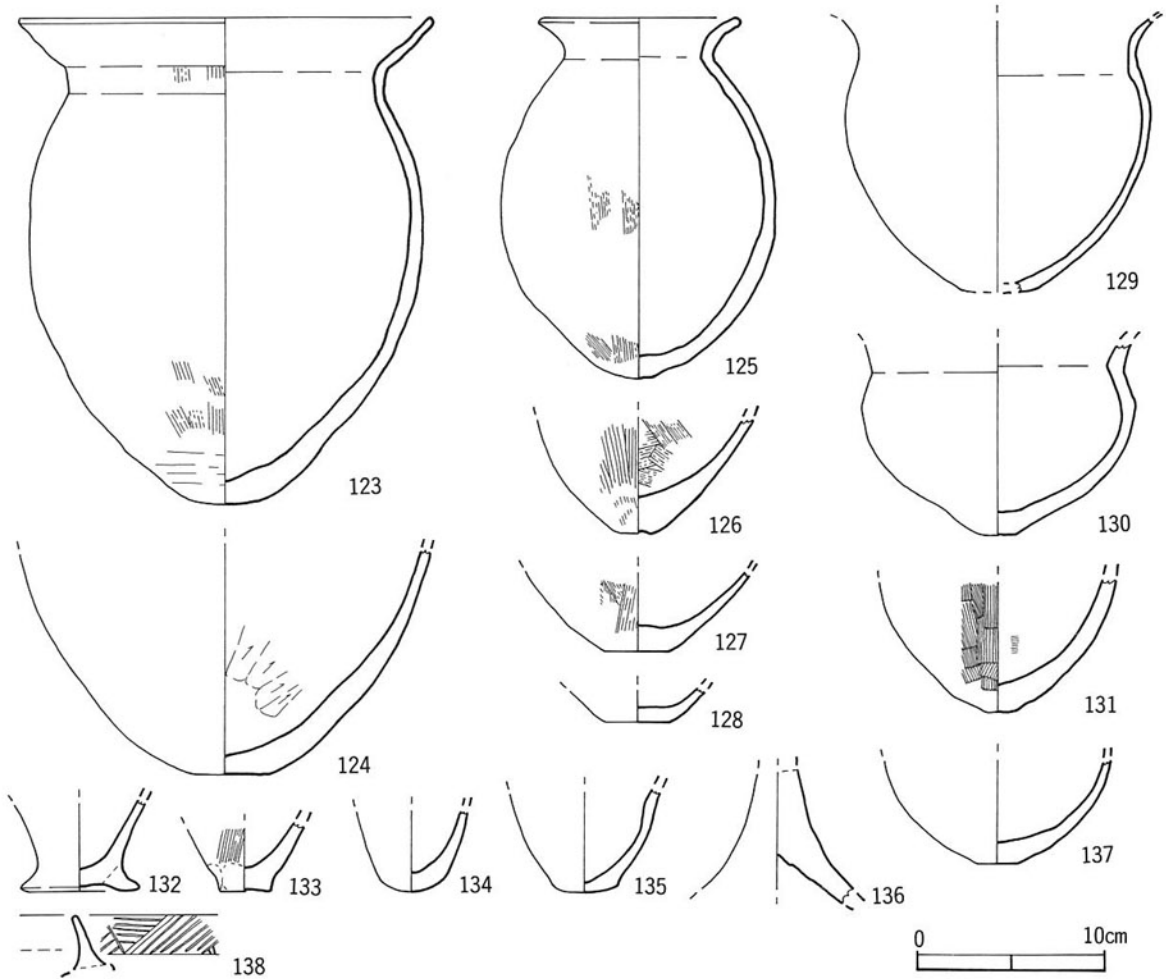
出土遺物

土器 (第26図)

123は、甕である。外反した口縁部に、倒卵形の胴部がつづき底部は不安定な丸底ぎみ平底である。調整は胴部外面にタタキのちハケ、胴部内面にヘラケズリのちナデ、頸部外面にハケ、口縁部内外面にナデ。床面より出土。

124は、平底の壺。調整は内面にヘラケズリ。周溝内より出土。

125は、甕である。外反した口縁部に、長胴部が続き底部は丸底である。調整は胴部外面にハケ。



第26図 SB09 遺物実測図①

口縁部内外面にナデ。床面より出土。

126・127は、甕と思われる。調整は126の内面にハケ、底部外面にハケのちミガキ。127は外面にハケ。

128は、平底の壺の底部と思われる。

129は、鉢である。上位が張った体部から緩やかに外反した口縁部が続く。

130は、鉢である。突出した底部から上位が張った体部が続く。

131は、底部がやや突出した甕である。調整は内外面にハケ。

132は、台付鉢と思われる。脚部は貼付けで端部をつまみ出している。

133は、やや上げ底の甕と思われる。134は、ミニチュア土器。135は、凸レンズ状の底部を持つ壺。

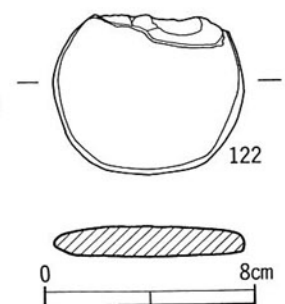
136は、高坏の脚部である。脚部は外傾しながら裾部に向かって開く。

137は、球状の体部を持つ鉢と思われる。

138は、複合口縁の壺の口縁部である。内湾し立ち上がる口縁部外面に篋状工具でV字形を入れ、その左に直交する平行線、右に平行線、中に横向きの平行線を入れた文様を施している。

石器 (第27図)

139は、安山岩製の石製紡錘車の未製品である。一部欠損し、穿孔はない。



第27図 SB09 遺物実測図②

(10) SB10 (第28図 図版13)

SB10は、調査区の南東部、SB06の南東に隣接する。北から南に約7度傾斜する緩斜面に立地する。SB10はその東側約 $\frac{1}{3}$ をSB11に切られている。平面形は直径約6.0mの円形である。

残存壁高は、斜面上位の北側で約52cm、西側で約12cm、南側は一部削平され壁がないところもあるが、平均約6cmである。斜面上位で残存状態が良い。

周溝は壁際を巡っており、幅23cmから48cm、深さ7cmから11cmである。また、周溝の西側から分離し東側に直線的に伸びる溝状遺構がある。幅約36cm、深さ約17cmで中央の炉とつながり、さらに南側で壁際の周溝に向かって伸びている。

住居のほぼ中央に長径130cm、短径84cm、深さ59cmの不整形な土坑がある。その南に長径128cm、短径52cm、深さ10cmの長方形の土坑がある。ともに埋土は焼土であるが、長方形の土坑は壁面が焼き締まっており、炉として利用されたと思われる。

支柱穴は住居内に2個認められる。さらにSB11の中に2個だけ埋土が焼土の柱穴があり、この2個はSB10の支柱穴と思われる。これら4個の柱穴は炉を中心に2.64mから3.12mの間隔であり、直径16cmから28cm、深さ30cmから52cmである。

住居の北西側には、使用痕の残った作業台と思われる平石が2個ある。

埋土は2層で、第I層は、褐色粘質土(10YR4/6)。第II層は、赤褐色粘質土(5YR4/8)の焼土で大量の炭を含んでおり焼失家屋と推定される。また、土層の北側の壁際にある第II層は、炭化木材で壁板が焼けた状態で残ったものである。

出土遺物

土器 (第29図)

155は、やや上げ底の鉢である。底部より外傾し直線的に立ち上がる。脚部の端部をつまみ出す。

(11) SB11 (第28図 図版13)

前記のとおりSB11はSB10の東側に掘り込まれた住居である。平面形は長径6.52m、短径6.50mの円形である。住居の中央をほぼ北から南にSX05が横断している。残存壁高は、斜面高位の北側で約40cm、東側で約20cm、南側は削平のため壁がほとんど残存していない。

住居の北側には、ベット状遺構があり、一部SX05に削平されているが残存高は約14cmである。

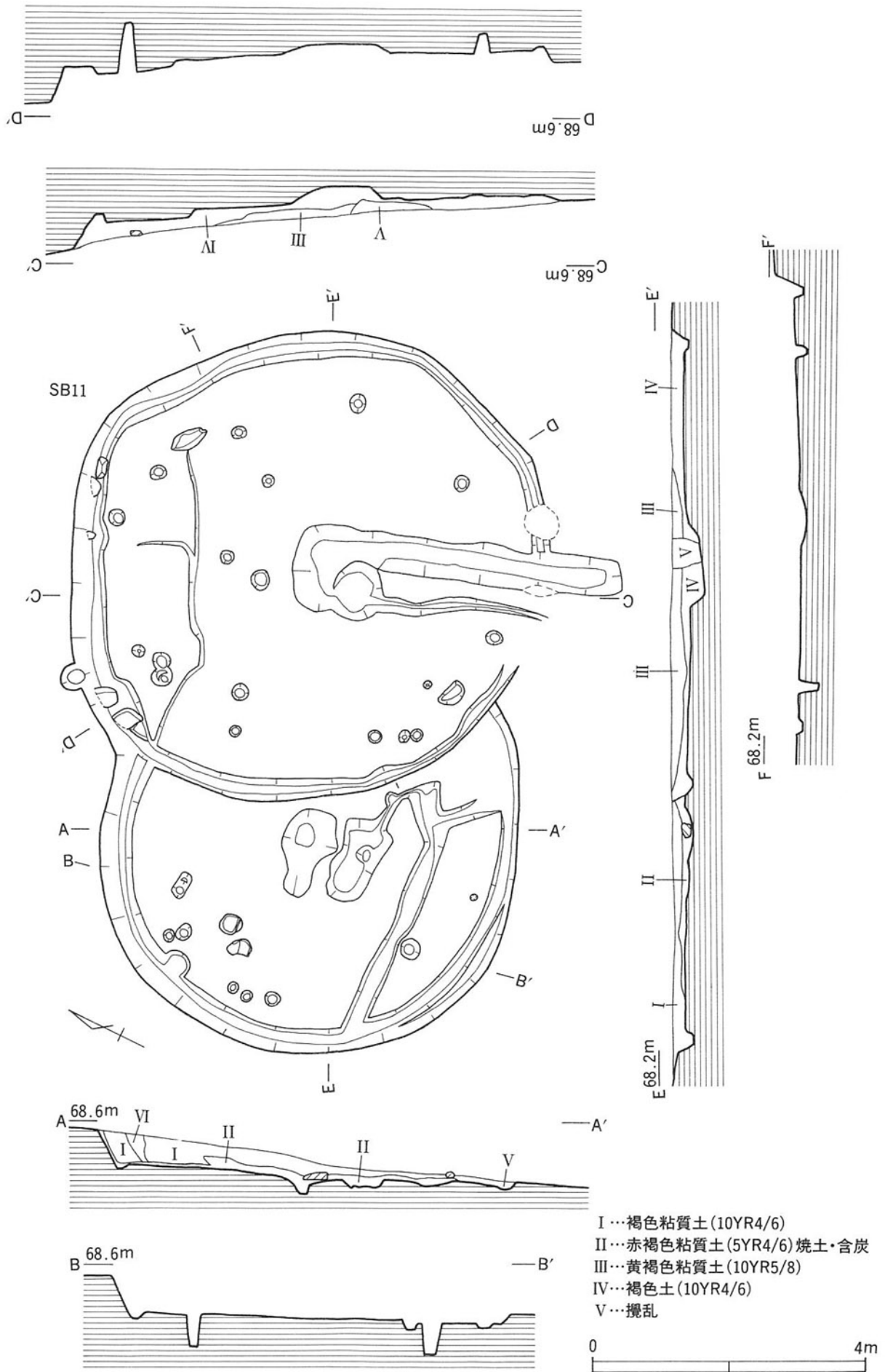
住居のほぼ中央に直径約88cmの円形の土坑があり、埋土に焼土が含まれており、壁面が焼き締まっていることから炉として利用されたと思われる。

周溝は、壁際を巡っており幅14cmから48cm、深さ8cmから12cmである。また、炉から1条の溝状遺構が南に向かって伸びている。この溝は、炉から南に向かって傾斜しており、排水施設と思われる。

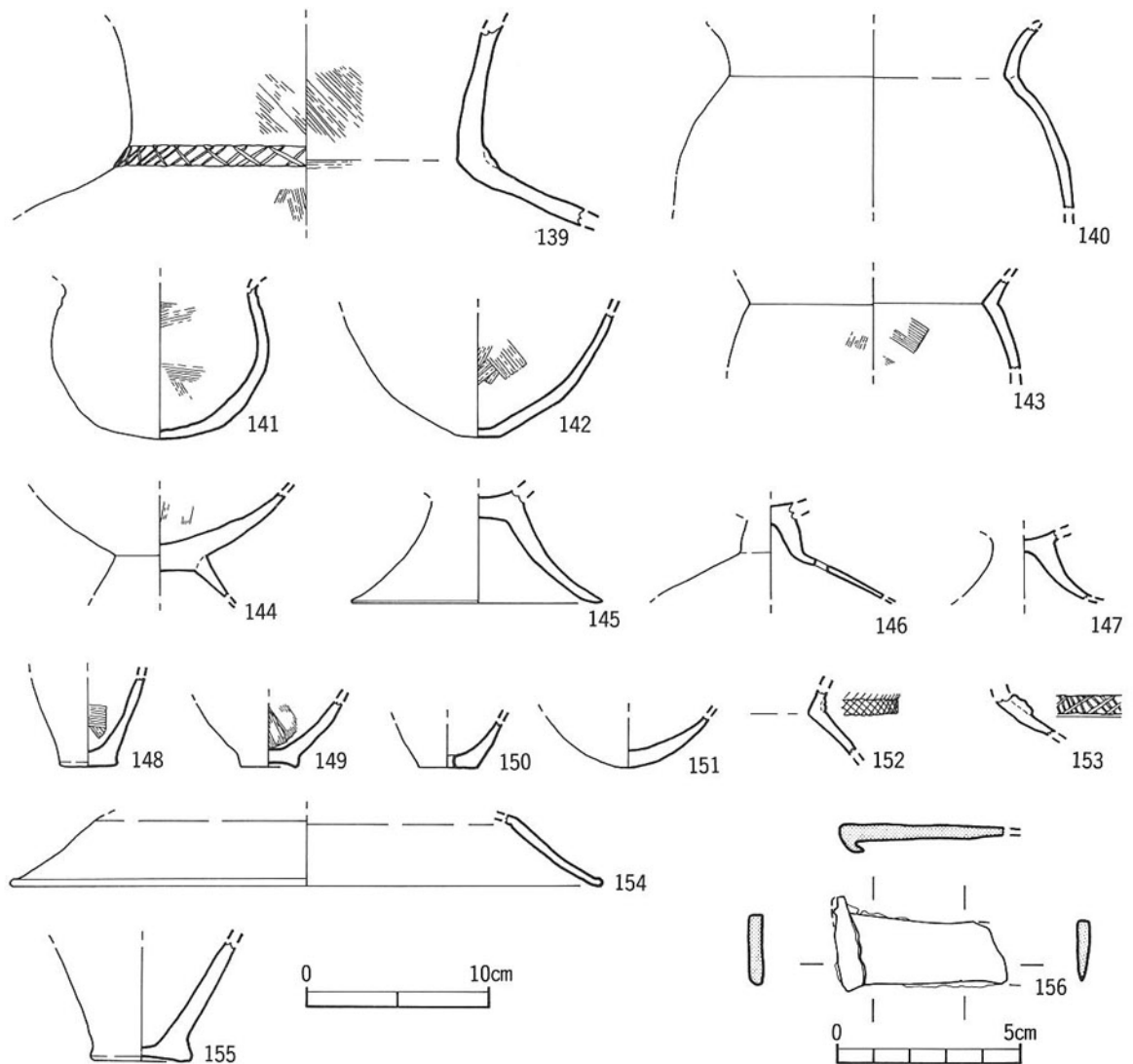
支柱穴は、炉を中心に1.32mから3.00mの間隔で、ベット状遺構上面に2個、床面に6個、計8個認められる。直径は約20cm、深さ20cmから70cmと深さに差がある。

床面の北東部に作業台と思われる平石が1個ある。

埋土は基本的には2層である。第III層は、黄褐色粘質土(10YR5/8)。第IV層は、褐色土(10YR4/6)。



第28図 SB10・11実測図



第29図 SB10・11 遺物実測図

出土遺物

土器 (第29図)

139は、複合口縁の壺の頸部である。頸部と胴部との境に篋描斜格子文の施された貼付け突帯が巡る。頸部は外反しながら立ち上がる。調整は内外面にハケ。床面より出土。

140は、口縁部がくの字形に外反する甕である。調整は胴部内外面にハケ、頸部内外面にナデ。

141は、球状の体部をもつ鉢である。周溝内より出土。 142は、甕と思われる。

143は、口縁部がくの字形に外湾する甕である。調整は内外面にハケ。床面より出土。

146は、器台の台部である。台部は外下方に広がりさらに大きく広がって端部に至る。台部に穿孔がある。埋土上位より出土。 148は、ミニチュア土器。 150は、底部中央に穿孔のある壺と思われる。

152は、甕の頸部で胴部と頸部の境に篋描斜格子文の施された貼付け突帯が巡る。頸部上面に斜め文。

153は、壺である。屈折部直下に斜格子文の施された貼付け突帯が巡る。 154は、器台の脚部である。

鉄器 (第29図)

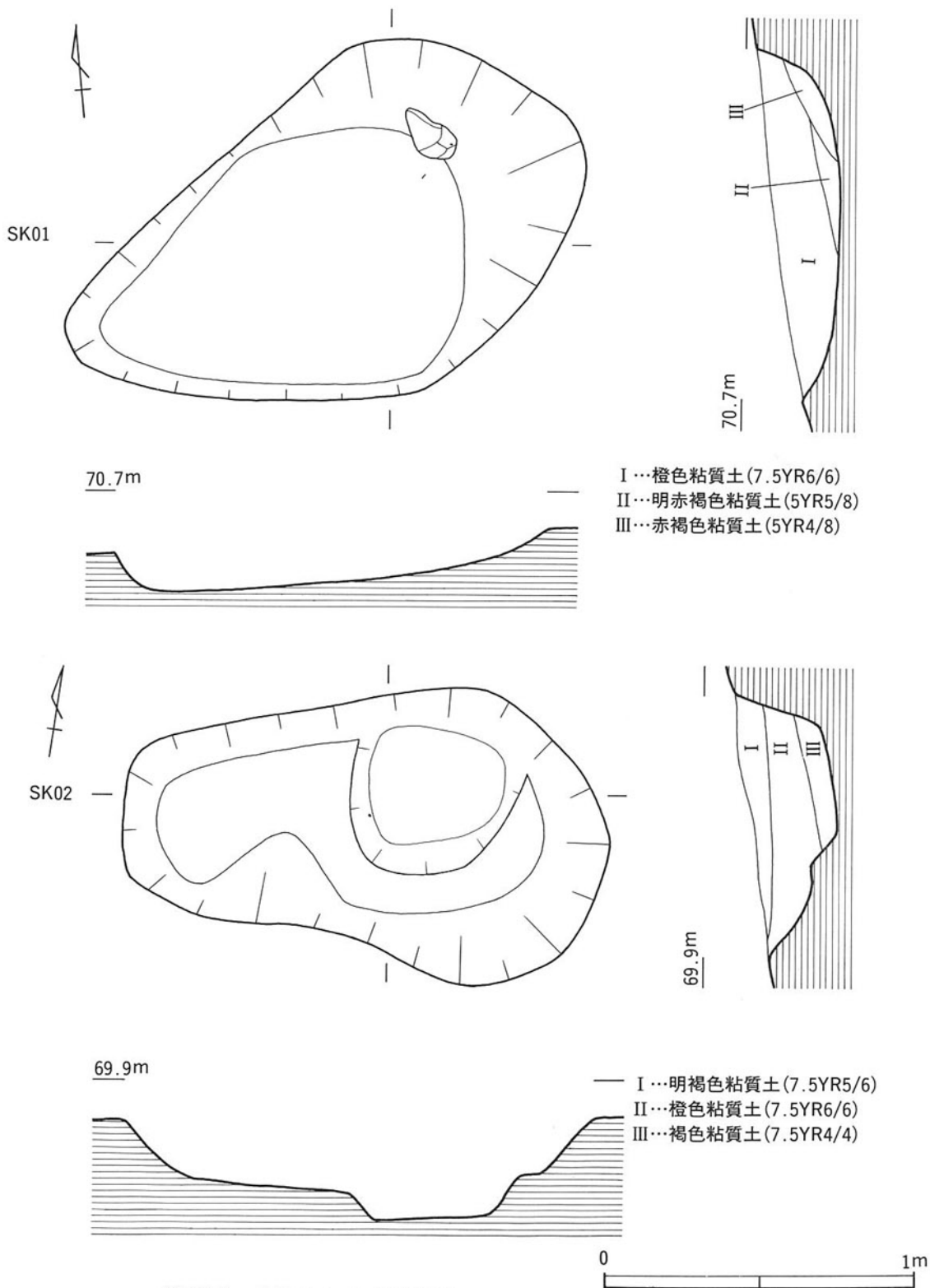
156は、刀身部の一部を欠損する鉄鎌である。残部法量は全長4.7cm。基部の折り返しは、刃部を下にして左側に位置し、2.5cmの幅で直角に逆コ字形に折り返している。刃部の断面は逆三角形。

2 土坑

SK01 (第30図 図版15)

この土坑の平面形は、長軸が1.80m、短軸が1.00mの菱形である。深さは、深い所で0.24mである。土坑の断面は、皿状になっており、土坑の南西側は、削平を受けている。

埋土の土層は、第I層が橙色粘質土(7.5YR6/6)、第II層が明赤褐色粘質土(5YR5/8)、第III層が赤褐色粘質土(5YR4/8)である。この土坑からの出土遺物はない。



第30図 SK01・02実測図

SK02 (第30図 図版15)

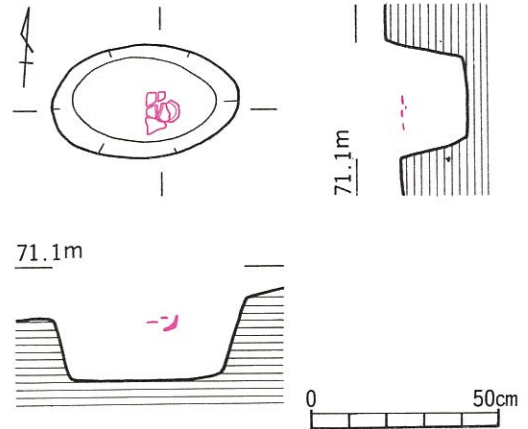
この土坑は、SK01の北東側、0.60mの所にある。この土坑の平面形は、長軸が1.80m、短軸が広い所で0.96mの卵形である。この土坑は、2段掘りがなされており、深さは、浅い所で0.20m、深い所で0.51mである。

埋土の土層は、第I層が明褐色粘質土(7.5YR5/6)、第II層が橙色粘質土(7.5YR6/6)、第III層が褐色粘質土(7.5YR4/4)である。この土坑からの出土遺物はない。

SK03 (第31図 図版15)

この土坑の平面形は、長軸が0.50m、短軸が0.30mの楕円形である。この土坑は、他の土坑と比べて小さい。深さは0.20mである。

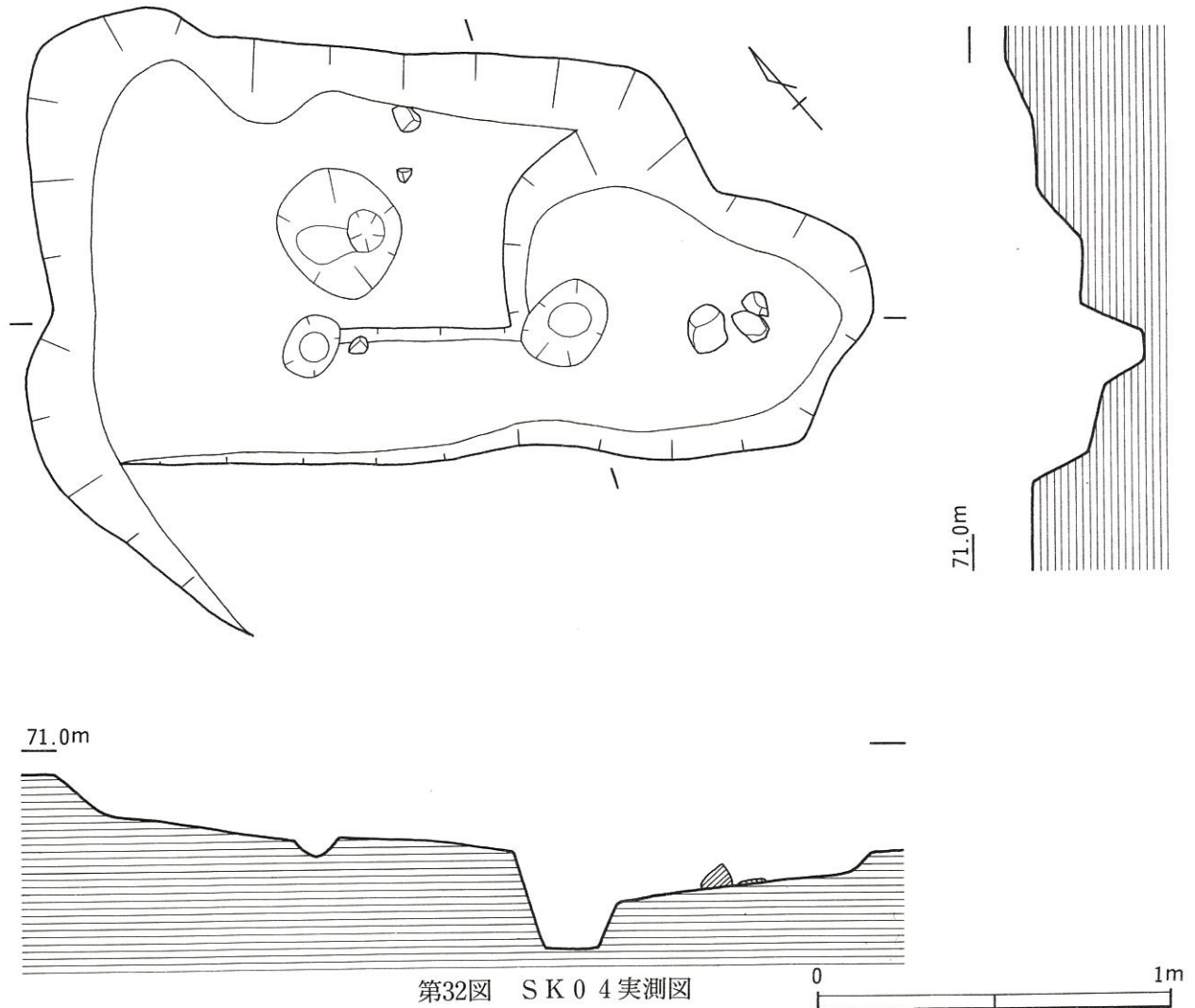
土坑内から、数片の弥生土器片が出土した。



第31図 SK03 出状実測図

SK04 (第32図 図版15)

この土坑の平面形は、長軸が2.35m、短軸が1.20mの不整形である。土坑は、2段掘りがなされており、深さは、



第32図 SK04 実測図

南東側の深い所で0.35m、北西側の浅い所で0.20mである。また土坑内には、溝状の段落ちがあり、柱穴が3個掘り込まれている。深さは、深いもので0.24mである。

土坑内には、地山の石が露出しており、土坑の南側は削平されている。

この土坑からの出土遺物はない。

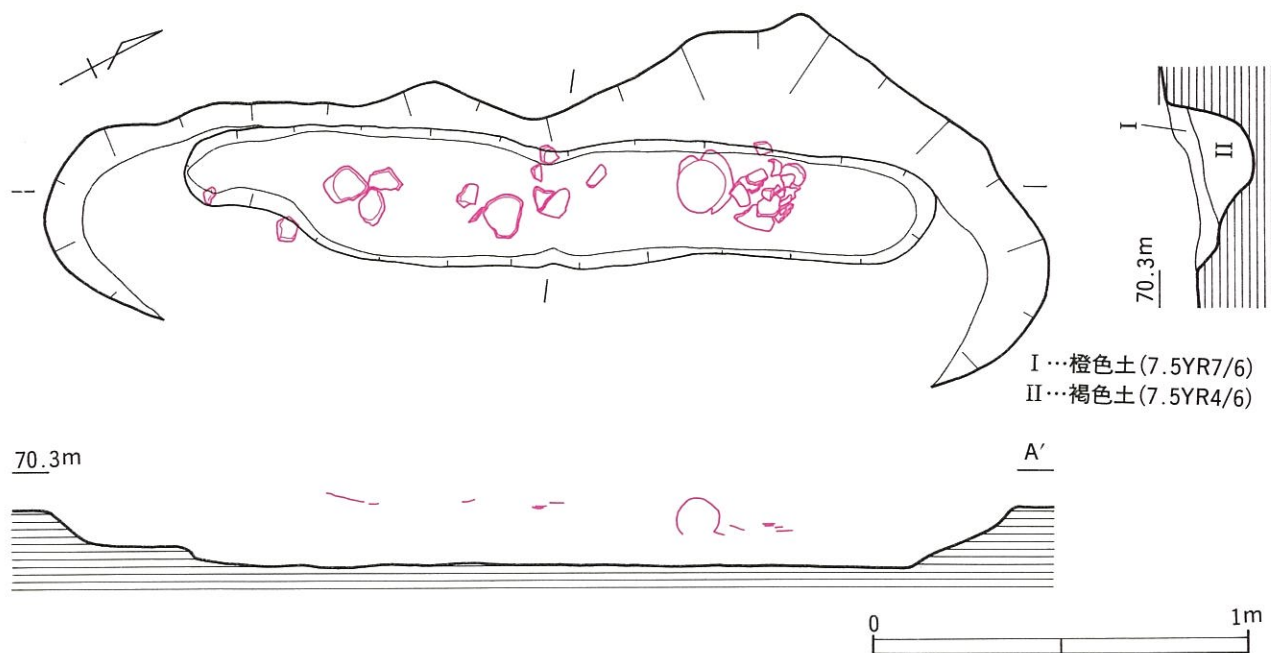
SK05 (第33図 図版15・16)

この土坑の平面形は、長軸が2.68m、短軸が0.60mの長楕円形をしている。深さは0.30mである。土坑の南東側は、著しい削平を受けている。

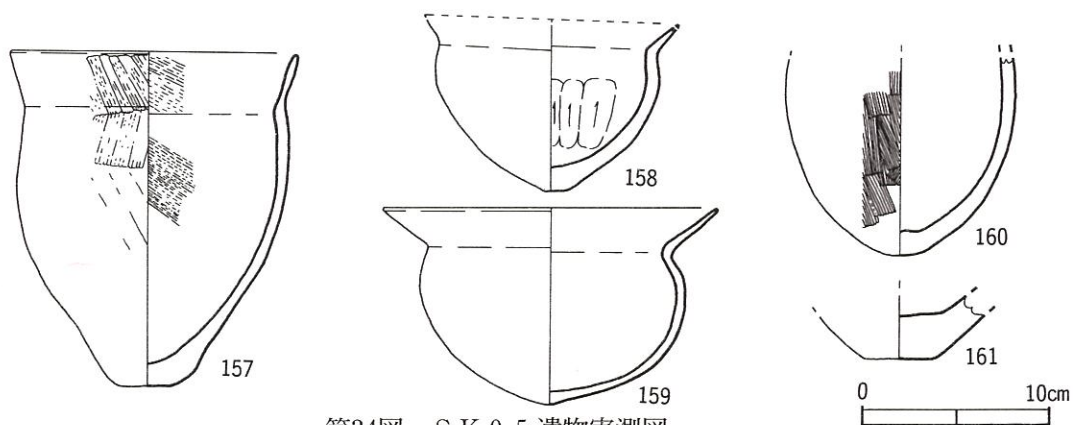
埋土の土層は、第I層が橙色土(7.5YR7/6)、第II層が褐色土(7.5YR4/6)である。

土坑の床面は溝状に細長く、土坑内の北西側に偏っており、そこから甕・鉢など、多くの遺物が出土している。

このことからSK05は、住居の周溝付近が残存した可能性がある。



第33図 SK05 出状実測図



第34図 SK05 遺物実測図

出土遺物 (第34図)

157は、平底の甕である。胴部の張りが弱く、頸部からわずかに外反し、口縁部に至る。口縁部中位は、やや膨らむ。調整は、胴部中位から口縁部にかけて、内外面にハケ、以下底部にかけて内外面にナデ。

158は、丸底の鉢である。上位が張ったほぼ球状の体部から、口縁部が外反して開く。底部はわずかに突出。調整は、外面にハケ、内面にケズリ。

159は、丸底の鉢である。上位が張ったほぼ球状の体部から、口縁部が外反して大きく開き、端部でわずかに内湾する。底部はわずかに突出。調整は、外面にハケ。

160は、丸底の甕である。調整は、外面にハケ、内面にナデ。

161は、平底の壺の底部である。調整は、外面にハケ、内面にナデ。

SK06 (第35図 図版16)

この土坑の平面形は、長軸が1.05m、短軸が1.15mの楕円形である。土坑の上面が、削平を受けているので、深さは0.10mと浅い。床面には、柱穴が2個掘り込まれており、深いもので0.30m、浅いもので0.20mである。

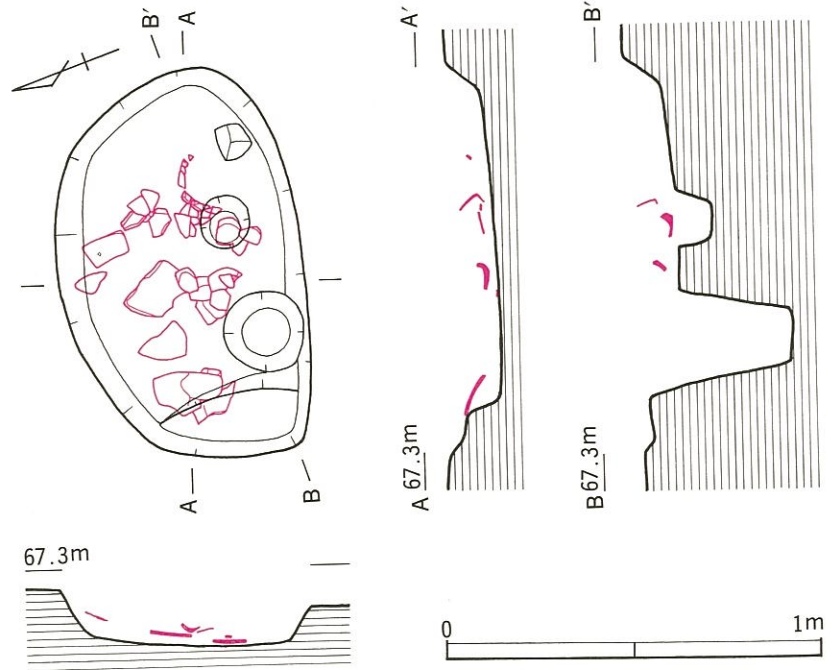
土坑内の西側に段があり、そこから甕の胴部が出土した。また甕の口縁部が、床面の東側から出土した。

SK06は、SB08・09の南側、1mの所に位置しているので、SB08・09との関連も考えられる。

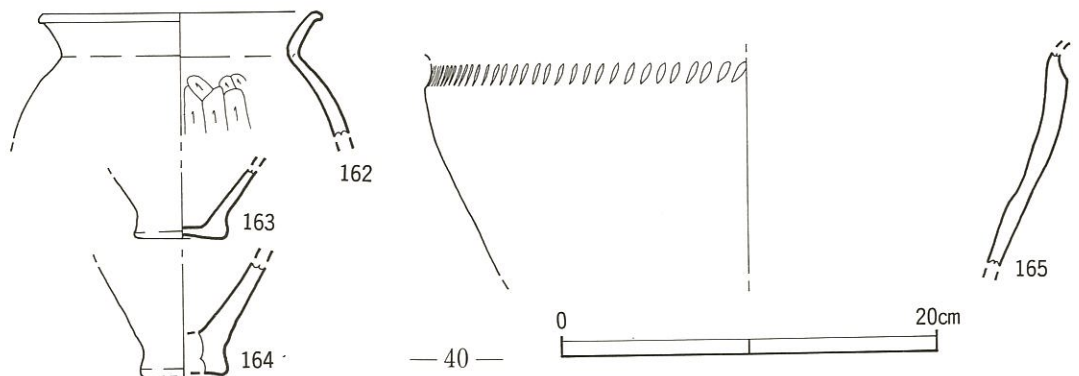
出土遺物 (第36図)

162は、甕の口縁部である。口縁部はくの字形に外反し、端部をつまみ出す。調整は、胴部内面にケズリ、口縁部内外面にナデ。

163は、甕の底部である。底部は、やや上げ底、端部をつまみ出す。



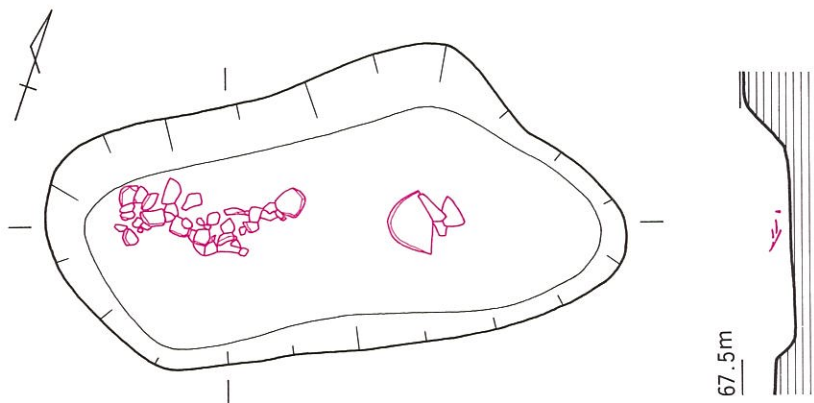
第35図 SK06 出状実測図



第36図 SK06 遺物実測図

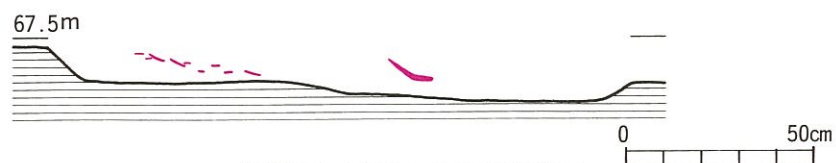
164は、甕の底部である。底部はやや上げ底。調整は、外面にハケ。

165は、鉢の体部である。頸部に斜位の刺突文を巡らす。



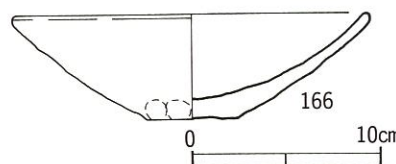
SK 07 (第37図)

この土坑の平面形は、長軸が1.56m、短軸が0.76mの平行四辺形である。土坑の南側と、上面は削平を受け、深さは0.10mである。



第37図 SK 07 出状実測図

この土坑から、再加工した鉢が出土している。



第38図 SK 07 遺物実測図

出土遺物 (第38図)

166は、土器を再加工し、転用した鉢である。口縁端部は、丸みをもつ。調整は、底部外面に指圧痕。大きく外傾した体部が、わずかに内湾し、口縁部に至る。

3 墓坑

ST01 (第39図 図版16・17)

この墓坑の平面形は、長軸が0.92m、短軸が0.55mの角丸の長方形ある。墓坑の上面は、削平を受けており、深さは0.20mである。

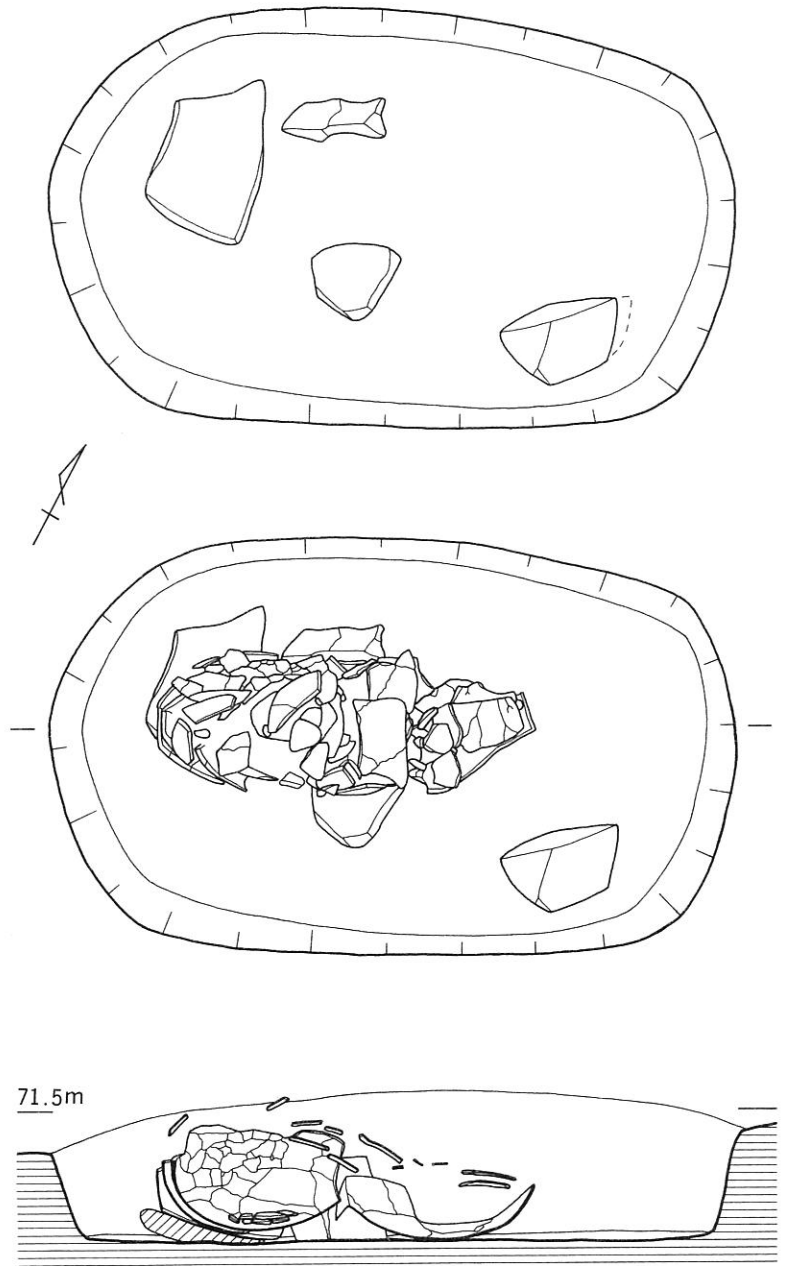
この墓坑から、乳幼児用と思われる甕棺が出土した。

その長軸方位は、S60°Wである。

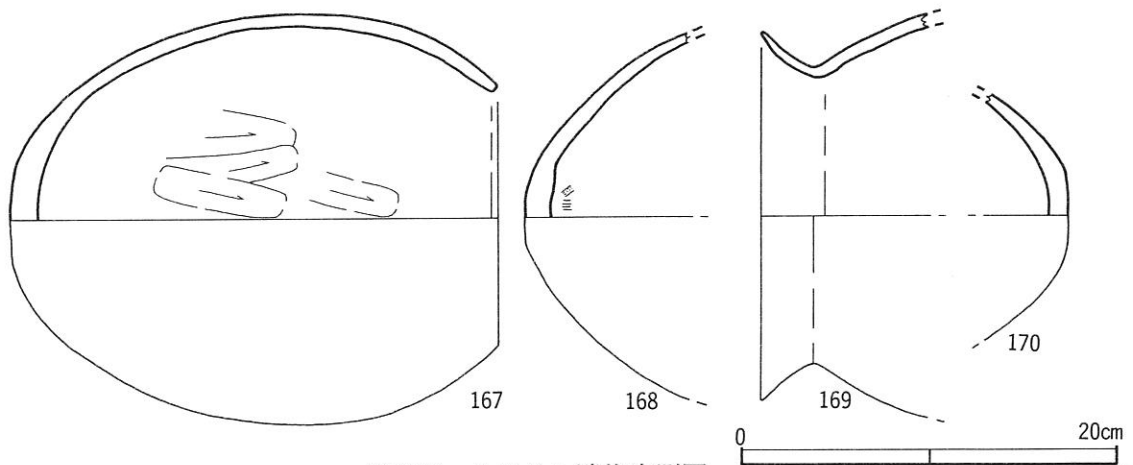
納められた甕棺の周囲には、それを支えるための石が4個置かれており、棺は、ほぼ水平に設置されていた。

甕棺の蓋と身のはっきりとした区別はできない。しかし、棺の南西側の部分は、下に平たい石が敷いてあるので、北東側の部分に比べて、設置面が、2cmほど高くなっている。このことから、南西側の部分が棺蓋、北東側の部分が棺身と考えるのが妥当であろう。

棺蓋は、3重の構造で、再加工された甕が使われている。



第39図 ST01 出状実測図



第40図 ST01 遺物実測図

もっとも内側の甕は、口縁部が除去されたもので、器高は20cm程度と推定される。その外側の真中の甕は、口縁部から胴部上位までが除去されたもので、器高は10cm程度と推定される。もっとも外側の甕は、口縁部が除去された後、正中面的に割られたもので、器高は26cmである。

3個の甕ともに、部分を除去された縁は、面取りがなされている。

棺身の甕は、器高が27cmの通常の甕を、そのまま利用したものである。

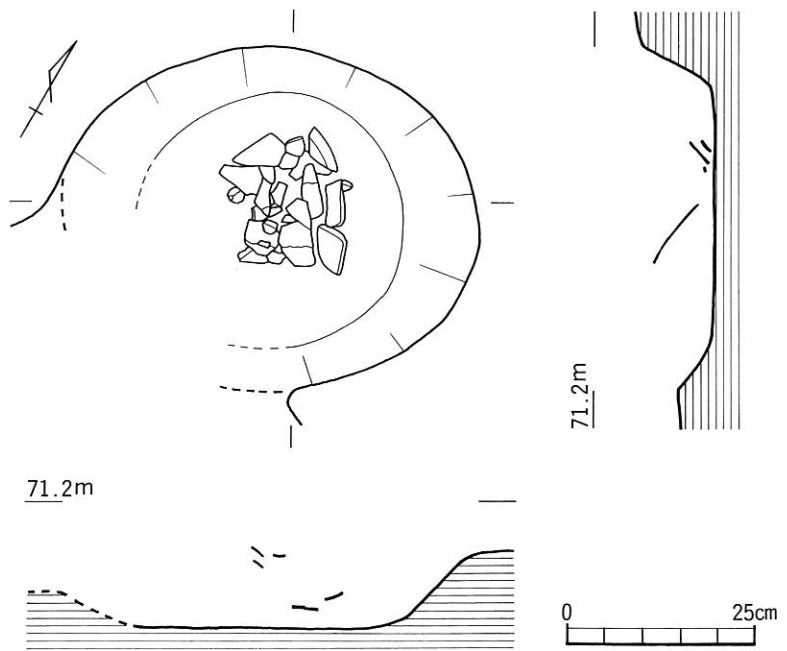
ST01は、SB01の南東側、2mの所に位置するため、SB01に関連する墓坑の可能性が高い。

出土遺物 (第40図)

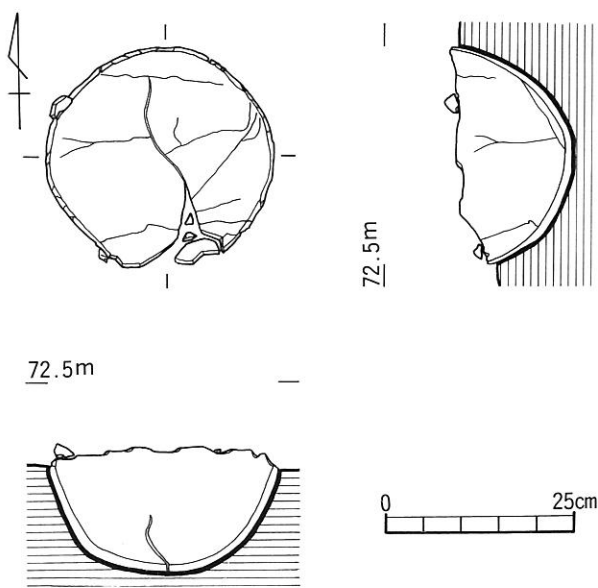
167は、出状時もっとも外側にあり、凸レンズ状の底部の甕である。口縁部を除去し、正中面で割り、再加工している。内面の調整はヘラケズリ。

168は、出状時もっとも内側にあり、凸レンズ状の底部の甕である。口縁部を除去し、再加工している。内面の調整は、底部にハケ。

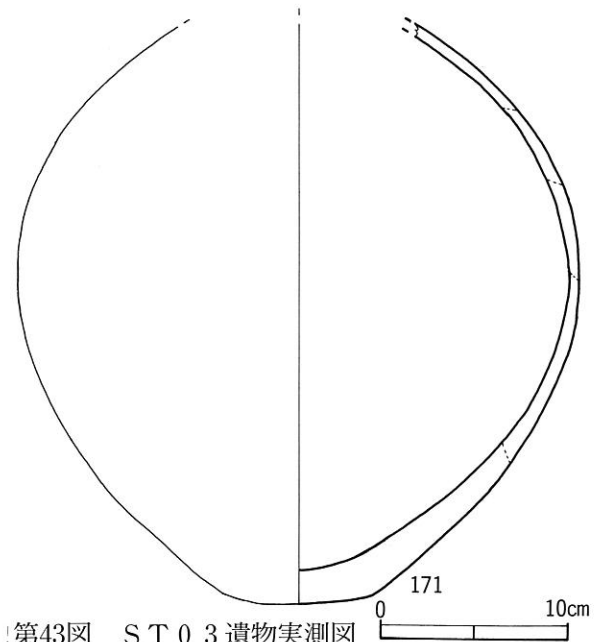
169・170は、棺身の、甕の口縁部と底部である。口縁部はくの字形に外反する。口縁部の調整はナデ。底部は凸レンズ状。



第41図 ST02 出状実測図



第42図 ST03 出状実測図



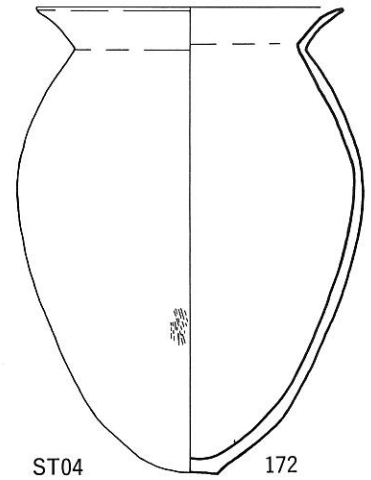
第43図 ST03 遺物実測図

ST02 (第41図 図版17)

この墓坑の平面形は、長軸が0.55m、短軸が0.45mの楕円形である。墓坑の南側は崩れており、削平によるものか、根の攪乱によるものかは不明である。また、上面も削平を受けており、深さは0.10mである。

ST02は、ST01の南側、0.55mの所にあり、ST01と同様に、長軸方位はS60°Wであるので、ST01と関連する可能性もある。

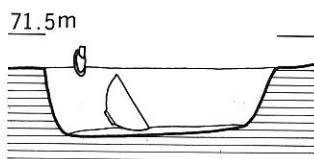
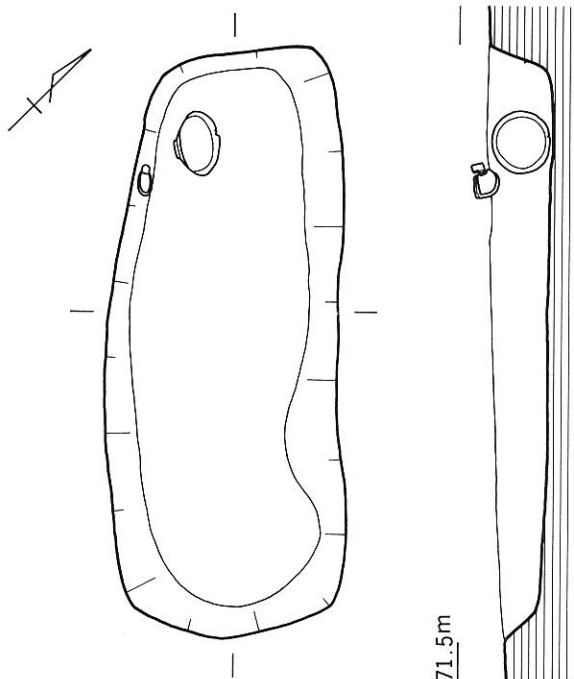
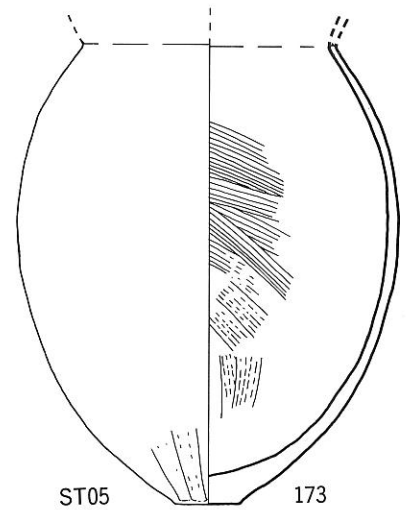
墓坑内に埋存する土器の量は、極めて少なく、器種も不明である。



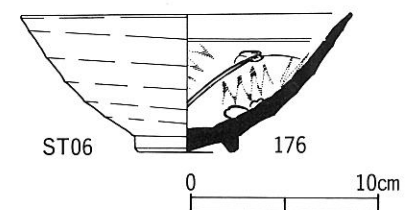
ST03 (第42図 図版17)

墓坑の上面は、著しい削平を受けている。そのため墓坑の平面形は、不明である。また壺棺は、断面が露出した状態で検出された。

壺棺の正中線方位は、東に向き、水平から上方に16度傾いていた。



第44図 ST06 出状実測図



第45図 ST04・05・06 遺物実測図

ST03は、SB02の東側、1mの所にあるので、SB02に関連する可能性もある。

出土遺物 (第43図)

171は、平底の底部をもつ壺である。

ST04 (第45図 図版17)

ST04は、SB04内の北東側の端に位置し、甕棺は口縁部を住居の中心側に向けた状態で出土した。正中線方位は、S46°Wである。そのためST04は、SB04に関連する可能性が高い。

出土遺物 (第45図)

172は、凸レンズ状の底部を持つ甕である。口縁部はくの字形に外反する。外面の調整は、ハケ。

ST05 (第45図 図版18)

ST05は、SB11内の北北西側の端に位置し、甕棺の正中線方位は、東を向いている。そのためST05は、SB11に関連する可能性が高い。

出土遺物 (第45図)

173は、凸レンズ状の底部を持つ甕である。口縁部はくの字形に外反する。内外面の調整は、ハケ。

ST06 (第44図 図版18)

この墓坑の平面形は、長軸が1.58m、短軸が0.65mの角丸の長方形である。深さは0.19mで、墓坑の上面は削平を受けている。墓坑の長軸方位は、N55°Wである。

墓坑内、西側の角からは、瓦器皿が2点(174・175)、白磁の碗(176)が1点出土した。このことから被葬者は、北西側に頭部を置き、埋葬されたものと考えられる。

ST06は、出土した遺物からして、12世紀頃のものと考えられる。

出土遺物 (第45図)

174・175はともに、畿内和泉型の瓦器皿である。両者ともに調整は、左回転のロクロナデ。皿の底部はヘラギリ。

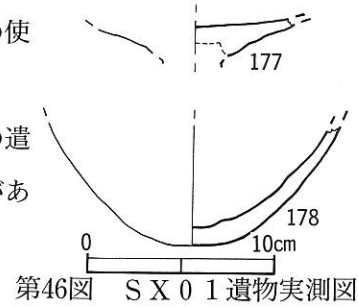
176は、中国の景德鎮系の輸入白磁碗である。調整は、左回転のロクロナデ。高台は、削り出し。内面には、ヘラガキによる唐子唐草の文様が施されている。また、ネコカキ文もみられる。釉は、高台を除き全体に施されている。

4 その他の遺構・遺物

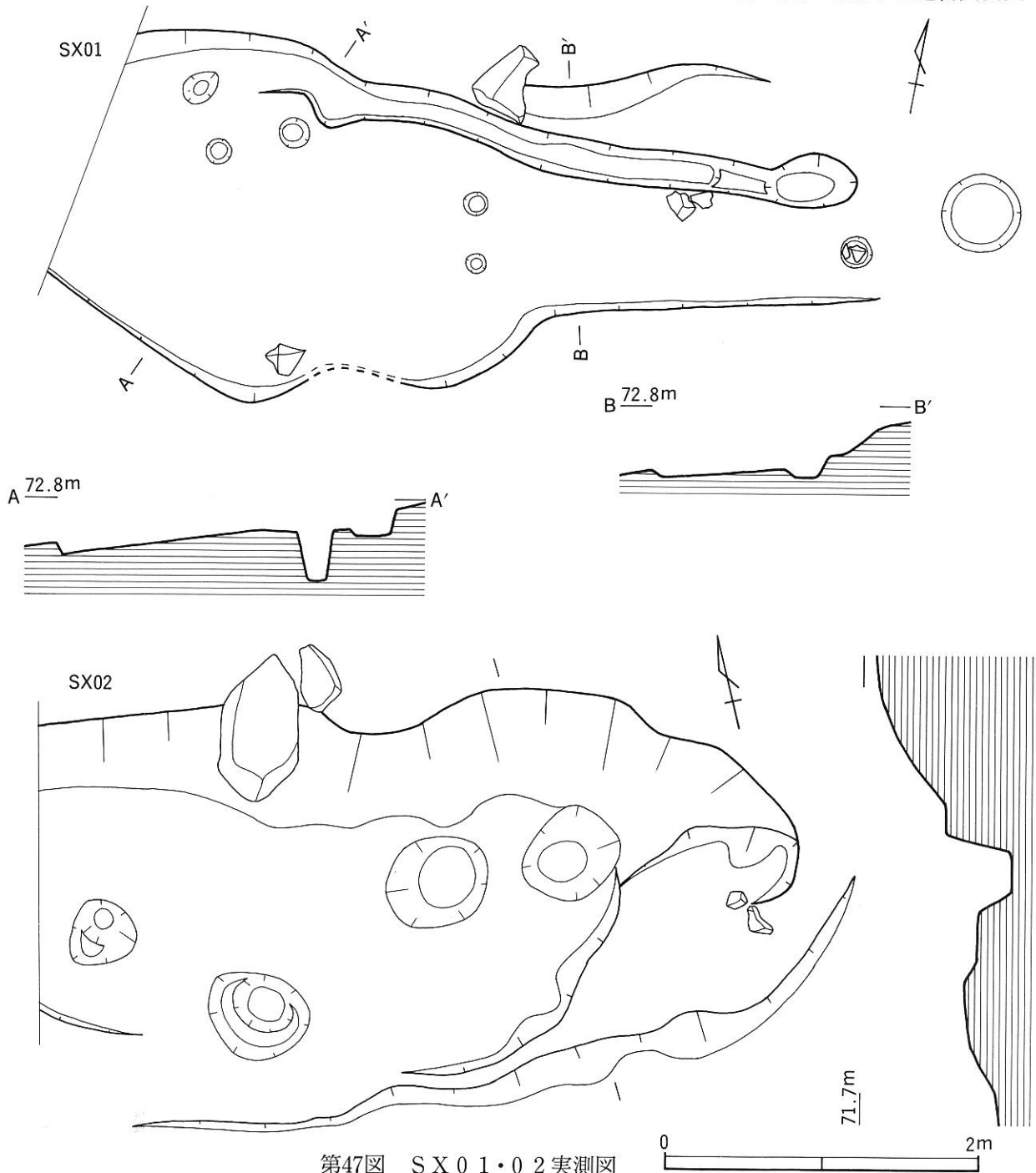
SX01 (第47図 図版18)

この遺構は溝状で、調査区の北西端にある。南側の削平を著しく受けており、遺構の端は、地山の石が露出している。幅は、最大で約2mである。床面には、柱穴が6個掘られている。深さは、深いもので0.22mである。また床面の北側に、溝が掘られているが、遺構の使用意図は不明である。

この遺構から、弥生土器の小片が、礫と共に多数出土した。遺構内の遺物は、廃棄されたものか、あるいは斜面上位からの流れ込みの可能性がある。



第46図 SX01 遺物実測図



第47図 SX01・02実測図

出土遺物 (第46図)

177は、高坏の坏身である。

178は、丸底の壺である。

S X 0 2 (第47図 図版18)

この遺構は、調査区の北西端、S X 0 1の南西側4mの所にある。遺構の平面形は、長軸が約6m、短軸が3mの楕円形と推定される。この遺構も、S X 0 1と同様に、南側は著しく削平を受けており、遺構の端には、地山の石が露出している。遺構内には、土坑が4個掘られている。深さは深いもので0.55mである。S X 0 2も使用意図は不明である。

この遺構からの出土遺物はない。

S X 0 3 (第49図 図版18)

この遺構は、S B 0 1・S B 0 2の北側に位置しており、遺構の平面形は、溝状である。南西側が削平を受けており、幅は不明である。

この遺構からは、甕を中心に多量の土器片が出土した。

遺物の出状から、S X 0 3は、祭祀用の段状遺構であった可能性がある。

出土遺物 (第48図)

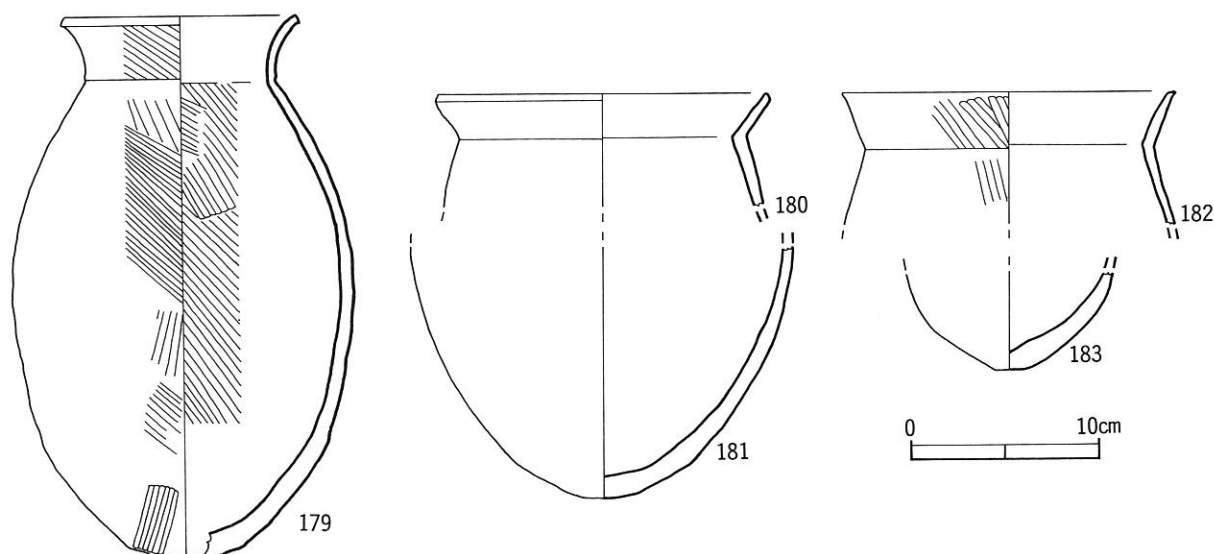
179は、平底の甕である。口縁部は外反し、端部に面を持つ。口縁部から長い胴部が続く。調整は、口縁部にナデ、体部内外面にハケ、底部内面にナデ。

180は、甕の口縁部である。口縁部は外反して立ち上がり、端部に面を持つ。調整は、外面にハケ。

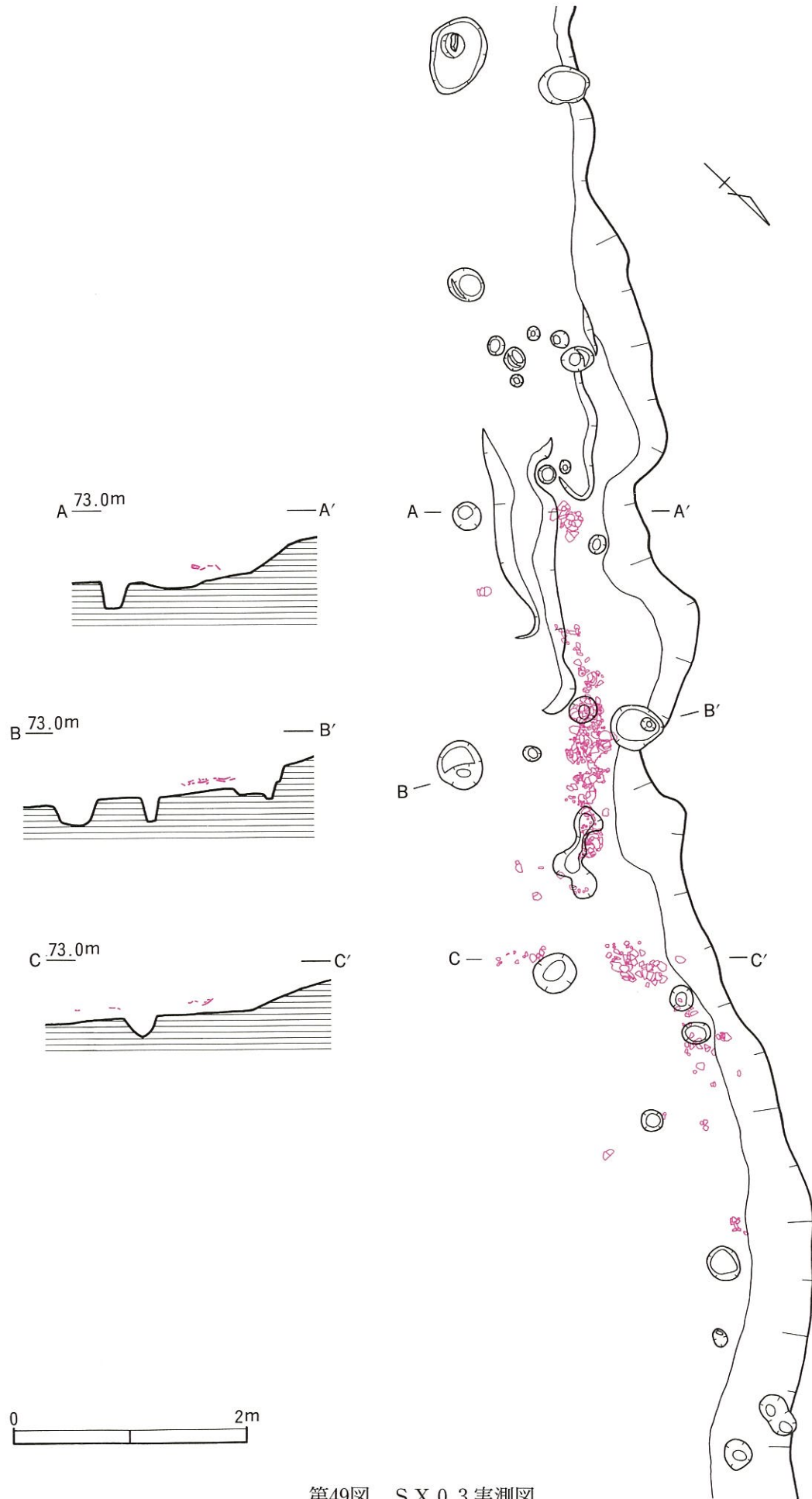
181は、丸底の甕である。

182は、甕の口縁部である。口縁部はくの字形に外反し、端部は、つまみ出し。調整は、外面にハケ。

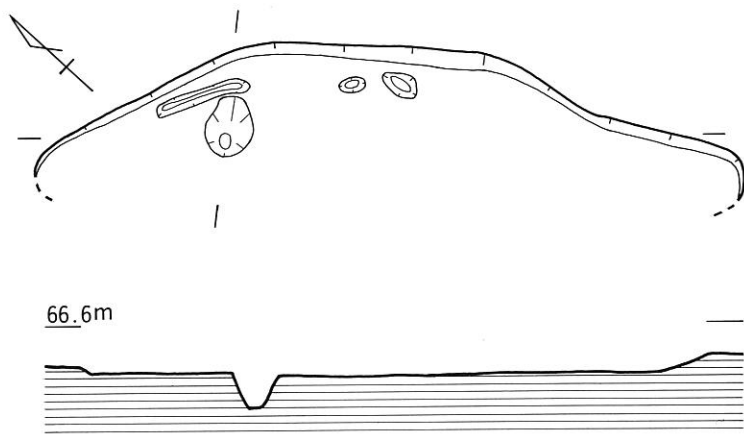
183は、丸底で底部の突出した壺である。調整は、内面にナデ。



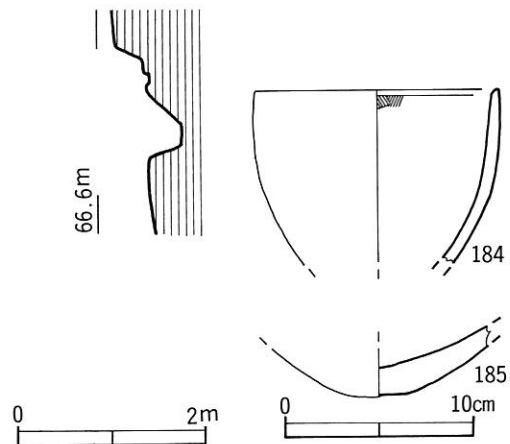
第48図 S X 0 3 遺物実測図



第49図 SX 03 実測図



第50図 SX04 実測図



第51図 SX04 遺物実測図

SX04 (第50図)

この遺構の平面形は、南西側が著しい削平を受けており、不明である。残存径は0.76mである。深さは0.28mである。柱穴が1個掘られている。深さは0.20mである。

この遺構からは、少量ではあるが遺物が出土している。また、床面の端に溝の痕跡もあることから、SX04は、住居であった可能性がある。

出土遺物 (第51図)

184は、鉢である。体部は直線的に立ち上がる。調整は、外面にハケ。

185は、甕の底部である。

SX05

この遺構は、南北に長い溝状の遺構で、SB03・SB07・SB11を削り貫いている。SB07・SB11には、その痕跡と思われる石列が残っていた。遺構の断面形は、碗状であった。

遺構の埋土は軟質で、土の堆積した時期はわからないが、この遺構は他の遺構とは違い、後世に作られた山道か、溝の跡の可能性はある。

第4章 まとめ

今回の調査は、4000㎡のうち試掘調査によって、斜面下位の後世の耕作により削平された部分を除く、3000㎡の範囲で本格的な調査を行った。

その結果、弥生時代の竪穴住居11軒・土坑23基・墓坑5基・その他用途不明遺構が5基、中世の墓坑が1基検出され、多量の弥生土器とともに、鉄鏃、鉄鎌、刀子、砥石、叩き石、石庖丁、石鏃、紡錘車そして、中世（12世紀）の輸入白磁碗、和泉型瓦器皿などが出土した。ここでは、遺跡の主体となる弥生時代の竪穴住居とそれに伴う出土土器について、若干の資料を提示し、まとめとしたい。

1 集落について

吉政遺跡は、大平山（標高314m）から南に派生した舌状台地の、標高65mから75mの緩斜面に立地する弥生時代後期後半から終末期の集落である。当時は、現標高10mから13mに海岸線を持つ古柳井水道が眼前に広がった眺望が良好な集落であったと思われる。

当遺跡の約2km西側の明地遺跡が、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて集落が営まれていたのに対し、当集落の中心は弥生時代後期後半から終末期に集中しており、その前後の遺構はほとんど検出されず、比較的短期間に集落が営まれていたと思われる。また、同時存在可能な住居はその形状と埋土、出土遺物から11軒中2軒から最高4軒である。

集落の範囲については、後世の削平が激しい斜面下位側、南側に緩やかに広がる台地の裾部があり、むしろこちら側が集落の中心であった可能性が高い。くわえて遺跡の北側には、斜面上位からの流入と思われる土器片が大量に出土していることから、調査区の上位にも集落が広がっていると推測される。

また、周辺には当遺跡と同様の舌状台地が、背後の大平山、さらに南側の赤子山からも多数派生しており、それらの台地上部にも当遺跡と類似した遺跡が存在すると推測される。

当遺跡は、標高が70m前後であり、現在の水田面との比高は約20mでしかない。また、清水遺跡で見られる環壕も検出されていないことから現時点では、高地性集落である可能性については、今後の類例の増加を待って検討する必要がある。

2 住居について

当遺跡の住居は、緩斜面に立地する関係で床面を構築する際に、大規模な地山整形を行っており、その方法として3つに分類される。

第1に、単純に斜面上位の地山整形を行い斜面下位を造成する方法で、SB01がこの方法をとる。

第2に、斜面上位の地山整形の際、壁途中で傾斜角を交える方法で、SB03がこの方法をとる。SB03の場合、上位の斜面に斜傾した柱穴を掘り住居建設に利用したと推測される。

第3に、斜面上位の地山整形の際、壁途中に平坦部を儲け段を成す方法で、SB05・06がこの方法をとる。SB05の場合、総壁高が約120cmと高く、段を設けることによって壁の崩落を防いだものと推測される。SB06の場合、中位の平坦部に連続した柱穴が掘られており、上位からの土砂

や雨水の流入を防いだものと推測される。

また、緩斜面であるがゆえ上位からの雨水の流入は避けられず、そのため住居内には一様に周溝をもつ。11軒のうち6軒に中央炉から斜面下位に向かって溝状遺構が伸びており、さらに住居外へと伸びるものもある。これら一連の排水施設の充実も当遺跡の特徴と言える。

住居の規模については、当遺跡の住居は比較的大きく、特にS B 0 6は床面長径10.38mと県下最大級の規模である。

3 出土土器について

今回の調査では、住居内や土坑内より多量の土器が出土した。しかし、器面摩耗が激しく、残存状況も悪い。その中で当遺跡の時代を表す数点の土器について考察したい。

鉢は、上位の張ったほぼ球状の体部から口縁が大きく外反し尖りぎみの端部に至るもので、底部に若干の突出がみられる。(遺物番号37・130・159) 特に底部の突出に注目すると、清水遺跡で出土した同形の鉢にはまだほとんど底部の突出はみられず、吹越遺跡のものは大きく突出している。このことは当遺跡が営まれていた時期が清水遺跡と吹越遺跡の間に位置するもので、どちらかというとな吹越遺跡に近いことを示している。この底部の突出は甕の底部にもみられる。(遺物番号85)

また、胴部より内傾して頸部が立ち上がり、くの字形に外反して口縁部に至る複合口縁の壺が出土している。(遺物番号48) この壺はいわゆる吹越式と呼ばれる壺の形状と類似している。

その他の遺物としては、長い胴部を持つ甕が出土している。(遺物番号123・125) この甕は、やや凸レンズ状の底部をもっており、平底の底部からやや尖った丸底の底部に移行する過渡期の様相を示している。また、胴部外面にタタキ調整が施されている。

出土土器から当遺跡の時代を考察すると、弥生時代後期後半から終末期にあたり、厳密には吹越遺跡の直前に位置すると思われる。

〈参考文献〉

- 「柳井市史(総論編)」「柳井市史(通史編)」 柳井市 1984
- 「田布施町史」 田布施町 1990
- 「弥生時代の鉄器文化」 川越哲志 1993
- 「世界陶磁全集 12 宗」 小学館 相賀徹夫 1977
- 「山口県の考古学」 小野忠熈 1985
- 「日本の古代遺跡 30 山口」 小野忠熈 1986
- 「土地分類基本調査 柳井・室津・青島」 山口県 1978
- 「山口県の弥生式土器」 周陽考古学研究所報2 周陽考古学研究所 1979
- 「山口県の古代遺跡〔I〕集落・墳墓編」 古代遺跡教材化研究会 周陽考古学研究所 1996
- 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集」 福岡県教育委員会 1978
- 「堺市文化財調査概要報告 第8冊」 堺市教育委員会 1990
- 「日置荘遺跡(その3) 調査の概要」 大阪府教育委員会(助大阪文化財センター) 1988
- 「清水遺跡」 山口県教育委員会 1989
- 「畑岡遺跡」 山口県教育委員会 1990
- 「吹越遺跡第2次調査概報」 平生町教育委員会 山口県教育委員会 1972
- 「明地遺跡」 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1993
- 「明地遺跡II」 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会 1994
- 「井上山」 井上山遺跡発掘調査団 1979

第2表 遺物観察表①

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
5-1 22-1	SB01	壺	口径 24.4	口縁内外面にヨコナデ	粗 含細粒多	やや硬質	黄橙色	複合口縁の立ち上がり部に櫛描波状文
5-2 23-2	SB01	壺	—	ヨコナデ	密	やや硬質	黄橙色	複合口縁の屈折部上面に櫛描波状文
5-3 25-3	SB01	甕か	底径 7.0	外面にハケ	粗 含細粒多	やや軟質	内) 黒褐色 外) 橙色	上げ底
5-4 25-4	SB01	甕か	底径 7.0	外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	内) 褐灰色 外) 橙色	平底
5-5 27-5	SB01	壺か	底径 7.5	底部外面にヨコナデ	粗	やや軟質	明黄褐色	平底
7-6 22-6	SB02	壺	—	口縁内面にヨコナデ	粗 含細粒少	軟質	内) にぶい橙色 外) 黄褐色	複合口縁の屈折部外面に斜格子文 屈折部より内傾しながら立ち上がる部分に 篋描文
7-7 23-7	SB02	壺か	—	口縁内面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	複合口縁の立ち上がり部に縦に板状の粘土 ひもを2本貼付けた浮文
7-8 27-8	SB02	壺か	胴部最大径 8.8	胴部外面にハケ	粗 含砂粒少	軟質	浅黄褐色	丸底
7-9 25-9	SB02	甕か	底径 3.6	底部内外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄褐色	平底
7-10 25-10	SB02	甕か	胴部最大径 18.6	胴部内外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	浅黄褐色	
10-12 24-12	SB03	鉢	口径 19.8	口縁内外面にハケ後ヨコ ナデ	密	やや硬質	橙色	口縁部はくの字形に強く外反しさらに外湾 しながら端部に至る
10-13 24-13	SB03	甕	口径 21.2	口縁内外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	橙色	口縁部はくの字形に強く外反 口縁端部を下方へ強くつまみ出す 胴部上位に篋描斜め文
10-14 24-14	SB03	甕	口径 14.8 胴部最大径 23.8	口縁内外面にナデ 胴部外面にハケ	粗 含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	口縁部はくの字形に外反
10-15 20-15	SB03	壺	底径 7.3 胴部最大径 21.1	胴部外面にハケ後ヘラミ ガキ 底部内外面にナデ	粗 含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	
10-16 23-16	SB03	壺	口径 29.4	内面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄褐色	複合口縁外面に2段の山形文
10-17 21-17	SB03	鉢	口径 10.2 底径 2.2 体部最大径 10.8 器高 8.4	体部内外面にハケ	粗 含細粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	口縁端部がやや内湾 体部上位が張る
10-18 25-18	SB03	甕	底径 1.2	不明	粗 含砂粒多	やや硬質	内) 浅黄褐色 外) 淡黄色	丸底
10-19 26-19	SB03	甕か	底径 1.2	底部・胴部内外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	浅黄褐色	平底

第3表 土器観察表②

挿図版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
10-20 25-20	SB03	甕か	底径 2.6	底部内面にナデ 胴部内外面にハケ後ナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	平底
10-21 27-21	SB03	壺か	底径 2.6	底部内面にナデ	粗 含砂粒少	軟質	浅黄橙色	平底
10-22 25-22	SB03	甕か	底径 5.2	底部内外面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 黒色 外) 浅黄橙色	底部凸レンズ状
10-23 23-23	SB03	壺	口径 13.4	口縁内外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	頸部外面に櫛描平行線
10-24 23-24	SB03	壺	—	頸部内外面にハケ	密	やや硬質	内) 橙色 外) におい橙色	頸部と胴部との境に斜格子文の入った貼付突帯
10-25 27-25	SB03	壺	底径 5.2	底部・胴部内外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	内) 浅黄橙色 外) 灰白色	平底
10-26 26-26	SB03	甕か	底径 4.0	底部内外面にナデ	密 含細粒少	やや硬質	内) 褐灰色 外) 橙色	やや上げ底
10-27 28-27	SB03	台付鉢	—	底部内面にハケ	粗 含細粒少	硬質	橙色	
13-29 23-29	SB04	甕	口径 20.8	口縁内外面にナデ	粗 含細粒多	やや軟質	浅黄橙色	短い口縁部はくの字形に強く外反し、やや器厚を増しながら口縁端部に至る。端部に面をもつ。頸部直下に斜位の刺突文
13-30 24-30	SB04	鉢	口径 20.2	不明	粗 含細粒少	軟質	浅黄橙色	口縁部はくの字形に強く外反し、さらに外湾しながら端部に至る。
13-31 24-31	SB04	甕	口径 15.6	内面にハケ 頸部外面にナデ 胴体部外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	内) 浅黄橙色 外) 黄橙色	口縁部がくの字形に外反
13-32 25-32	SB04	甕か	—	不明	粗 含細粒多	軟質	橙色	
13-33 26-33	SB04	甕か	底径 3.8	不明	粗 含砂粒多	やや軟質	内) 浅黄橙色 外) 黒褐色	平底
13-34 27-34	SB04	壺か	底径 4.2	不明	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	やや上げ底
13-35 26-35	SB04	甕か	底径 4.0	底部内面にシボリ痕	粗 含細粒少	軟質	内) 黒褐色 外) 黄橙色	平底
13-36 26-36	SB04	高坏	底径 13.6	脚部下位にナデ	粗 含細粒多	軟質	橙色	脚部中位に穿孔(数不明)
13-37 20-37	SB04	鉢	口径 16.8 体部最大径 10.0 器高 9.9	内面にナデ 口縁部外面にナデ	粗 含細粒多	やや軟質	におい黄橙色	上位が張ったほぼ球状の体部から、口縁部が外反し大きく開く。底部に若干の突出
13-38 21-38	SB04	甕	口径 12.2 胴部最大径 12.6	外面にハケ 内面にヘラケズリ後ハケ	粗 含細粒多	やや軟質	におい黄橙色	胴部上位がやや張る 口縁部はわずかに外反

第4表 遺物観察表③

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
13-39	SB04	壺か	底径 4.2	不明	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 淡黄色 外) 淡赤橙色	平底 底部内面中央にくぼみ
13-40 27-40	SB04	壺か	—	不明	粗 含砂粒少	軟質	浅黄橙色	丸底
13-41 26-41	SB04	甕か	底径 1.6	不明	粗 含砂粒少	軟質	浅黄橙色	平底
13-42 25-42	SB04	甕か	底径 6.2	内面にハケ 外面にナデ後ハケ	粗 含細粒少	やや硬質	内) 浅黄橙色 外) 黄橙色	平底
13-43 25-43	SB04	甕	底径 4.6	底部外面にナデ	粗 含砂粒多	軟質	内) 浅黄橙色 外) 明赤褐色	平底
13-44 26-44	SB04	甕か	底径 3.4	底部外面に指頭圧痕	粗 含細粒多	軟質	にぶい黄橙色	やや上げ底
13-45 26-45	SB04	甕か	底径 3.6	底部外面にナデ	粗 含砂粒多	軟質	内) 黄橙色 外) 橙色	やや上げ底
13-46	SB04	甕	口径 17.6 胴部最大径 18.0	内外面にハケ	密 含砂粒少	やや軟質	内) 灰白色 外) 橙色	胴部は内湾気味に立ち上がり口縁部へ至る。 口縁端部をつまみ出す。
13-47 22-47	SB04	壺	—	内外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	頸部と胴部の境に斜格子文の入った貼付突帯
13-48 22-48	SB04	壺	—	不明	粗	軟質	内) 浅黄橙色 外) 黄橙色	頸部と胴部のとの境に突帯の中心を頂点として上下に斜め文の入った貼付突帯 胴部より内傾して、頸部が立ち上がり、くの字形に外反して口縁部へ至る。
13-49 22-49	SB04	壺	口径 18.8	不明	粗 含細粒多	やや軟質	浅黄橙色	やや長い頸部をもつ複合口縁 頸部と胴部の境に斜格子文の入った貼付突帯 口縁部はわずかに外反し、直線的に端部へ至る。
13-50 26-50	SB04	ミニチュア 土器	口径 6.0 底径 3.0 体部最大径 6.0 器高 4.3	内外面に指頭圧痕	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	手づくね鉢
13-51 26-51	SB04	ミニチュア 土器	底径 1.0 体部最大径 4.3	内外面に指頭圧痕	粗 含砂粒少	軟質	黄橙色	手づくね鉢
13-52 26-52	SB04	ミニチュア 土器	体部最大径 5.2	内外面に指頭圧痕	粗 含細粒多	やや軟質	橙色	高坏
16-57 21-57	SB05	鉢	口径 14.0 器高 6.3	不明	粗 含細粒少	軟質	橙色	半球状の器形
16-58 28-58	SB05	鉢か	—	底部内面にナデ	粗 含細粒少	やや軟質	浅黄橙色	丸底
16-59 25-59	SB05	甕か	—	内外面にハケ	粗 含砂粒少	軟質	浅黄橙色	丸底

第5表 遺物観察表④

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
16-60 27-60	SB05	壺	底径 5.4	内外面にハケ	密 含砂粒少	やや軟質	内) 黄灰色 外) 浅黄橙色	平底 底部より外傾し立ち上がり徐々に内傾
16-61 27-61	SB05	壺か	底径 1.2	内外面にハケ	粗 含砂粒少	軟質	内) 浅黄橙色 外) 黄橙色	丸底
16-62 23-62	SB05	壺	—	頸部外面にハケ	粗 含砂粒少	軟質	黄橙色	頸部と胴部の境に斜め文や刺突文を施した貼付突帯 頸部は外反しながら立ち上がり、さらに外反して口縁部へ至る。
16-63	SB05	器台	—	不明	粗 含細粒多	軟質	橙色	口縁端部は上下に拡張 外面に斜格子文
16-64 27-64	SB05	台付壺	胴部最大径 8.4	胴部内面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	橙色	
16-65 26-65	SB05	ミニチュア 土器	口径 5.0 体部最大径 5.2	外面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	鉢
16-66 26-66	SB05	ミニチュア 土器	底径 4.4 体部最大径 6.2	内面に指頭圧痕	粗 含細粒少	やや軟質	内) 浅黄橙色 外) にぶい黄橙色	手づくね 底部の端をつまみ出す。
20-73 20-73	SB06	台付鉢	口径 19.4 底径 12.0 体部最大径 18.8 器高 20.2	口縁部内外面にナデ 脚部内外面にハケ後ナデ	粗 含細粒多	軟質	橙色	球状の体部からくの字形に強く外反する口縁部をもち、端部はやや薄くなる。 台部は裾に向かって緩やかに広がる。 頸部に刷毛原体による段
20-74 20-74	SB06	台付鉢	口径 20.8 体部最大径 14.8	口縁部内外面にナデ 体部内面にナデ 体部外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	口縁部はくの字形に強く外反し、さらに外湾しながら端部に至る。 体部は上位が張る。
20-75 28-75	SB06	鉢	口径 14.8 体部最大径 12.2	口縁端部にナデ 内外面にハケ後ナデ	粗	やや軟質	内) 橙色 外) 浅黄橙色	体部は上位が張る。
20-76 25-76	SB06	甕か	底径 2.4	外面位にハケ 底部内面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	平底
20-77 21-77	SB06	甕	—	不明	粗 含細粒多	軟質	橙色	ほぼ丸底
20-78 27-78	SB06	壺か	—	内外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	丸底
20-79 21-79	SB06	壺	口径 17.0 胴部最大径 20.6 器高 23.4	口縁内外面にナデ 胴部内面にナデ 胴部外面にヘラケズリ後ハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	胴部中位やや下方で張る球状の胴部からくの字形に強く外反する口縁部をもつ。 胴部上位に篋描の複雑な文様
20-80 21-80	SB06	鉢	口径 14.2 底径 5.8 体部最大径 15.2 器高 9.1	口縁部内外面にナデ 体部内面上位にハケ 体部内面下位にナデ 体部外面にハケ	粗 含細粒多	やや軟質	橙色	平底より外反しながら体部を形成し、体部の上端で内湾し、口縁部をなす。
20-81 24-81	SB06	甕	口径 15.4 胴部最大径 16.6	口縁部内外面にナデ 内面にヘラケズリ	粗 含細粒多	やや軟質	にぶい黄橙色	口縁部はくの字形に外反し、端部上面で傾斜する。

第6表 土器観察表⑤

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
20-82 24-82	SB06	鉢	口径 17.8	口縁部内面にナデ	粗 含細粒多	軟質	橙色	口縁部はくの字形に外反
20-83 24-83	SB06	甕	口径 20.4	口縁部内外面にナデ 胴部外面にハケ 胴部内面にナデ	粗 含細粒少	やや軟質	黄橙色	口縁部はくの字形に外反 頸部に刷毛原体による段
20-84 23-84	SB06	壺	—	頸部外面にハケ後ヨコナ デ 胴部外面にヨコナデ	粗 含砂粒少	軟質	黄橙色	頸部は外傾して、直線的に立ち上がる。 頸部と胴部との境に斜格子文の貼付突帯
20-85 19-85	SB06	甕	口径 9.4 底径 1.2 胴部最大径 13.8 器高 16.0	内面にナデ 外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	底部内面にしほり痕 底部に若干の突出
20-86 19-86	SB06	甕	口径 10.4 胴部最大径 12.8 器高 12.8	内面にナデ 外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	にぶい橙色	丸底 口縁端部でわずかに内湾
20-87 21-87	SB06	鉢	口径 10.0 体部最大径 10.0 器高 14.4	内面にナデ 外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	丸底 口縁端部でわずかに内湾
20-88 28-88	SB06	鉢か	体部最大径 11.5	底部内面に指頭圧痕	粗 含砂粒多	軟質	明黄褐色	大きい凸レンズ状の底部より、緩やかに立 ち上がり、体部下位より内湾気味に丸みをも って、頸部付近で強く内傾する。
20-89 26-89	SB06	甕	底径 4.6	内面にナデ 外面にハケ 底部外面にヨコナデ	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 黒褐色 外) 浅黄褐色	底部中央に穿孔 底端部をややつまみ出す
20-90 25-90	SB06	甕か	底径 1.0	内面にハケ	粗 含細粒少	軟質	黄橙色	
20-91 25-91	SB06	甕	底径 2.0	内外面にミガキ 底部内面にシボリ痕	粗 含砂粒多	やや軟質	黄橙色	
20-92 27-92	SB06	壺	底径 4.6	不明	粗 含細粒多	軟質	内) 橙色 外) にぶい黄褐色	平底
20-93 27-93	SB06	壺	底径 3.0	内面にナデ 外面にハケ	粗 含細粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	平底
20-94 26-94	SB06	高塚か	底径 32.0	脚部外面にハケ後ヨコナ デ・内面にハケ 脚部貼付部にナデ	粗 含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	裾部はほぼ水平に開いた後、屈折して段を なし、さらに外下方へ伸び、端部へ至る。 端部はつまみ出し 大型の高塚
20-95 28-95	SB06	器台	底径 29.0	不明	粗 含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	裾部は外下方へ開いた後、緩やかに屈曲し、 さらに外下方へ伸び端部へ至る。 端部に面をもつ。 大型の器台

第7表 土器観察表⑥

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
20-96 28-96	SB06	器台	底径 35.0	外面にハケ	粗 含細粒多	やや硬質	浅黄橙色	裾部は外下方へ開いた後、緩やかに屈曲しさらに外下方へ伸び端部へ至る。 端部はつまみ出し 大型の器台
20-97 28-97	SB06	台付鉢	底径 13.0	不明	粗 含細粒少	軟質	橙色	台端部に面をもつ
20-98 28-98	SB06	台付鉢	—	脚貼付部にヨコナデ 内外面にハケ 脚部内面に輪積み痕	粗 含細粒少	やや軟質	内) 浅黄橙色 外) 黄橙色	
20-99 26-99	SB06	高坏	底径 9.2	不明	粗	やや軟質	橙色	
21-100 21-100	SB06	小型壺	胴部最大径 7.2	外面上位にタテハケ・下位にヨコハケ 内面上位に指頭圧痕・下位にナデ 頸部内面にナデ	粗 含細粒多	やや軟質	褐灰色	
21-101 26-101	SB06	ミニチュア土器	胴部最大径 7.6	内外面に指頭圧痕	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	手づくねの壺
21-102 26-102	SB06	ミニチュア土器	底径 1.5 体部最大径 5.0	内外面に指頭圧痕	粗 含砂粒少	軟質	内) 黄橙色 外) 橙色	手づくねの鉢か 口縁部貼付
21-103 28-103	SB06	器台か	—	口縁部内外面にナデ 内面にハケ	粗 含砂粒少	やや硬質	浅黄橙色	屈折部に刷毛原体の段があり、その下方に沈線、さらに複雑な文様がある。
21-104 23-104	SB06	壺	—	不明	粗	軟質	黄橙色	複合口縁外面に斜め文 口縁部は内傾しながら立ち上がる。
21-105 23-105	SB06	壺	—	不明	粗	軟質	内) 明黄褐色 外) 黄橙色	複合口縁部外面に篋描文
21-106 23-106	SB06	壺	—	内面にナデ	粗 含砂粒少	軟質	黄橙色	屈折部外面に斜格子文の貼付突帯 立ち上がり部外面に山形文
21-107 23-107	SB06	器台か (壺の可能性)	—	内外面にナデ	密	やや軟質	黄橙色	口縁部外面に篋描の複雑な文様 口縁端部に山形文
23-115 24-115	SB07	鉢	口径 17.4 体部最大径 14.6	口縁部内外面上位にナデ 口縁部外面下位より体部にかけてハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	球状の体部より大きく外反する口縁部をもつ
23-116 21-116	SB07	鉢	口径 15.6 体部最大径 15.6 器高 10.7	体部外面にハケ 口縁部外面にハケ 口縁部内面にハケ後ナデ	粗 含細粒多	やや軟質	橙色	球状の体部より大きく外反する口縁部をもつ 丸底
23-117 28-117	SB07	鉢か	—	体部内面にハケ 底部内面にナデ	粗 含砂粒多	やや軟質	内) 黄橙色 外) 浅黄橙色	丸底

第 8 表 土器観察表⑦

挿 図 版	出土位置	器 種	法量 (cm)	手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	形態の特徴
23-118 26-118	SB07	高坏	底径 12.3	脚端部にナデ 脚部外面にハケ	粗 含細粒少	やや軟質	橙色	脚端部で外反する。
25-119 26-119	SB08	甕か	底径 1.2	不明	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	平底
25-120 27-120	SB08	壺か	底径 2.2	内面にハケ	粗 含砂粒多	やや軟質	内) 黒褐色 外) 浅黄橙色	平底
27-123 20-123	SB09	甕	口径 22.0 胴部最大径 20.8 器高 25.8	胴部外面にタタキ後ハケ 頸部外面にハケ 口縁部内面にナデ 胴部内面にヘラケズリ後 ナデ	粗 含砂粒少	やや軟質	黄橙色	外反した口縁部に到卵形の胴部が続き凸レンズ状の底部
27-124 27-124	SB09	壺	底径 3.6	内面にヘラケズリ	粗 含細粒多	やや軟質	内) ぶい黄橙色 外) 浅黄橙色	平底
27-125	SB09	甕	口径 10.8 胴部最大径 14.8 器高 14.1	胴部外面にハケ 口縁部内外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	ぶい黄橙色	外反した口縁部に長い胴部が続く。 丸底 凸レンズ状の底部
27-126 25-126	SB09	甕	底径 1.8	内面にハケ 底部外面にハケ後ミガキ	粗 含細粒多	やや軟質	内) ぶい黄橙色 外) ぶい橙色	
27-127 26-127	SB09	甕か	底径 3.3	外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	平底
27-128 27-128	SB09	壺か	底径 3.4	不明	粗 含細粒多	軟質	内) 黄橙色 外) 浅黄橙色	平底
27-129	SB09	鉢	底径 5.0 体部最大径 16.4	不明	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	体部は上位が張る。 体部より緩やかに外反した口縁部
27-130 28-130	SB09	鉢	底径 1.9 体部最大径 14.6	不明	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	体部上位が張る。 底部が突出
27-131 25-131	SB09	甕	底径 1.6	内外面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	底部がやや突出
27-132 28-132	SB09	台付鉢か	底径 6.4	脚部貼付部外面にナデ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	
27-133 26-133	SB09	甕か	底径 2.6	胴部外面にハケ 底部外面に指頭圧痕	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 浅黄橙色 外) 淡黄色	やや上げ底
27-134 26-134	SB09	ミニチュア 土器	—	外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	内) 浅黄橙色 外) 黒褐色	丸底部からわずかに外傾し、直線的に立ち上がる。
27-135 27-135	SB09	壺	底径 3.4	内面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	凸レンズ状の底部
27-136 26-136	SB09	高坏	—	不明	粗 含細粒多	軟質	黄橙色	脚部は外傾しながら裾部へ向かって開く。
27-137 28-137	SB09	鉢か	底径 2.0	不明	粗 含砂粒多	軟質	内) 黄橙色 外) 浅黄橙色	平底 球状の体部
27-138 23-138	SB09	壺	—	内面にナデ	粗 含細粒多	軟質	橙色	複合口縁外面に複雑な斜め文
29-139 27-139	SB11	壺	—	外面にハケ 頸部内面にハケ	粗	やや軟質	黄橙色	頸部と胴部との境に斜格子文の貼付突帯 頸部は外反しながら立ち上がる。
29-140 24-140	SB11	甕	—	胴部内外面にハケ 頸部内外面にナデ	粗 含砂粒少	軟質	黄橙色	口縁部はくの字形に外反
29-141 28-141	SB11	鉢	体部最大径 11.8	内面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 黄橙色 外) 橙色	体部は球状
29-142 25-142	SB11	甕か	底径 2.1	外面にハケ 底部内面にナデ	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	

第9表 土器観察表⑧

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
29-143 24-143	SB11	甕	—	内外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	口縁部はくの字形に外反
29-144 28-144	SB11	台付鉢	—	内面にハケ 脚部貼付部にナデ	粗 含砂粒多	軟質	橙色	
29-145 26-145	SB11	高坏	底径 13, 5	不明	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	脚部は外傾し、外下方へ伸び端部へ至る。
29-146 28-146	SB11	器台	—	不明	粗 含細粒少	軟質	橙色	脚部に穿孔
29-147 28-147	SB11	台付鉢	—	内面にハケ 外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	脚部は外傾しながら外下方へ開き、さらに屈曲して外下方へ伸びる。
29-148	SB11	ミニチュア 土器	底径 3, 1	内外面にハケ 底部外面にナデ	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	平底 ミニチュアの甕
29-149 28-149	SB11	鉢か	底径 3, 2	内外面にハケ 底部外面にナデ	粗 含細粒少	やや軟質	内) 黄灰色 外) 淡黄色	やや上げ底 底端部つまみ出し
29-150 27-150	SB11	壺か	底径 3, 2	不明	粗 含細粒少	やや軟質	内) 浅黄橙色 外) 黒色	底部中央に穿孔
29-151 28-151	SB11	鉢か	—	外面にハケ後ナデ	粗 含細粒少	軟質	浅黄橙色	丸底
29-152	SB11	甕	—	不明	粗 含細粒多	軟質	内) 灰白色 外) 橙色	頸部外面に斜格子文の入った貼付突帯があり、その上位に斜め文がある。
29-153 23-153	SB11	壺	—	内外面にナデ	粗 含細粒少	軟質	黄橙色	屈折部直下に斜格子文の貼付突帯
29-154 28-154	SB11	器台か	底径 32, 4	内面にハケ	粗 含細粒少	やや軟質	浅黄橙色	裾部は外下方に開いた後、屈曲して段をなし、さらに外下方へ伸び端部へ至る。
29-155 28-155	SB10	鉢	底径 5, 9	不明	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	やや上げ底 底部より外傾し、直線的に立ち上がる。 底部の端部をつまみ出す。
34-157 19-157	SK05	甕	口径 15, 4 底径 2, 8 胴部最大径 14, 5 器高 12, 9	胴部中位より口縁部へかけて内外面ともハケ 胴部中位以下は内外面ともナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	胴部の張りが弱く、口縁部はわずかに外反し、口縁端部へ至る。
34-158 21-158	SK05	鉢	底径 1, 0 体部最大径 11, 9 器高 9, 5	外面にハケ 内面にケズリ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	上位が張ったほぼ球状の体部から、口縁部が外反して開く。 底部がわずかに突出
34-159 21-159	SK05	鉢	口径 17, 8 体部最大径 14, 4 器高 10, 5	外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	内) 浅黄橙色 外) 橙色	上位が張ったほぼ球状の体部から、口縁部が大きく開く。 口縁上端部でわずかに内湾する。 底部がわずかに突出
34-160 25-160	SK05	甕か	胴部最大径 12, 4	外面にハケ 内面にナデ	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	丸底
34-161 27-161	SK05	壺か	底径 3, 6	外面にケズリ 内面にナデ	粗 含砂粒少	やや軟質	内) 黒色 外) 浅黄橙色	平底
36-162 24-162	SK06	甕	口径 15, 2	口縁部内外面にナデ 胴部内面にケズリ	粗 含細粒多	やや軟質	橙色	口縁端部をつまみ出す。
36-163 25-163	SK06	甕か	底径 5, 0	不明	粗 含砂粒少	軟質	橙色	やや上げ底
36-164	SK06	甕	底径 4, 2	外面にハケ	粗	軟質	内) 黄橙色 外) 明黄褐色	やや上げ底
36-165 23-165	SK06	鉢	体部最大径 22, 8	不明	粗 含細粒多	やや軟質	橙色	頸部に斜位の刺突文を巡らす。

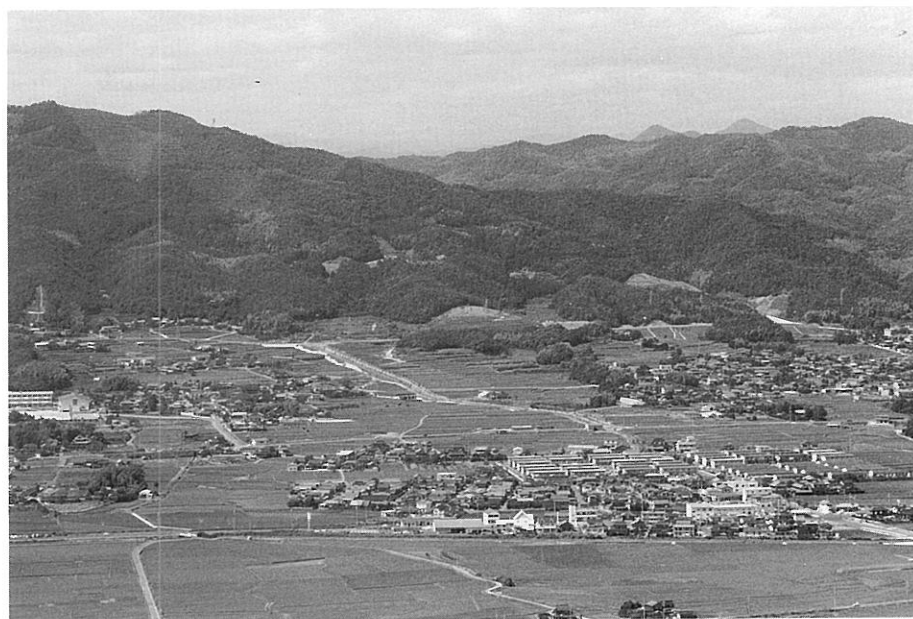
第10表 土器観察表⑨

挿 図 版	出土位置	器種	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	形態の特徴
38-166 21-166	SK07	鉢	口径 20.1 底径 4.8 器高 5.6	底部外面に指頭圧痕	粗 含細粒多	硬質	にふい黄橙色	大きく外傾した体部がわずかに内湾して口縁部へ至る。 端部は丸みをもつ。
40-167 19-167	ST01	甕	口径 13.6 底径 4.0 胴部最大径 22.0	内面にヘラケズリ	粗 含細粒多	軟質	内) 明黄褐色 外) 橙色	口縁部・胴部は再加工
40-168 25-168	ST01	甕	底径 3.4	内面にハケ	粗 含細粒多	軟質	橙色	
40-169 24-169	ST01	甕	口径 19.6	口縁部内外面にナデ	粗 含細粒多	軟質	浅黄橙色	口縁部はくの字形に外反
40-170 25-170	ST01	甕	底径 4.8	不明	粗 含細粒多	軟質	内) 灰白色 外) 浅黄橙色	
45-171 20-171	ST03	壺	底径 6.0 胴部最大径 30.0	不明	粗 含細粒多	やや硬質	浅黄橙色	
45-172 19-172	ST04	甕	口径 16.6 底径 3.2 胴部最大径 18.4 器高 24.8	不明	粗 含細粒少	やや軟質	浅黄橙色	口縁部はくの字形に外反
45-173 25-173	ST05	甕	底径 3.4 胴部最大径 22.2	内外面にハケ	粗 含細粒多	軟質	内) にふい黄褐色 外) 橙色	口縁部はくの字形に外反
45-174 30-174	ST06	瓦器皿	口径 9.3 底径 4.1 器高 1.8	回転ナデ 底部はヘラギリ	密 含砂粒少	やや軟質	灰色	
45-175 30-175	ST06	瓦器皿	口径 9.1 底径 3.2 器高 2.0	回転ナデ 底部はヘラギリ	密 含砂粒少	やや軟質	灰白色	
45-176 30-176	ST06	白磁碗	口径 17.8 底径 5.6 器高 7.5	回転ナデ	密 含砂粒少	硬質	明緑灰色	
46-177 26-177	SX01	高坏	—	不明	粗 含細粒多	軟質	内) 明黄褐色 外) 橙色	坏身貼付
46-178 27-178	SX01	壺か	—	不明	粗 含砂粒多	軟質	黄橙色	丸底
48-179 19-179	SX03	甕	口径 14.6 底径 6.0 胴部最大径 10.2 器高 28.5	口縁部内面にナデ 体部内外面にナデ 底部内面にナデ	粗 含細粒多	やや軟質	浅黄橙色	外反した口縁部より、長い胴部が続く。 平底
48-180 24-180	SX03	甕	口径 18.0	外面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	にふい黄橙色	口縁部が外反して端部へ立ち上がる。 端部に面をもつ
48-181 27-181	SX03	壺か	—	不明	粗 含砂粒少	やや軟質	にふい黄褐色	丸底
48-182 24-182	SX03	甕	口径 17.8	外面にハケ	粗 含砂粒少	やや軟質	内) にふい黄褐色 外) 橙色	口縁部がくの字形に外反する
48-183 27-183	SX03	壺か	底径 1.4	内面にナデ	粗 含細粒少	やや軟質	内) 褐灰色 外) 黄褐色	
51-184	SX04	鉢	口径 11.0 体部最大径 11.2	外面にハケ	粗 含砂粒多	軟質	浅黄橙色	体部が直線的に立ち上がる。
51-185	SX04	甕	底径 2.0	不明	粗 含砂粒多	軟質	黄褐色	

圖 版



東より古柳井水道を望む



南より吉政遺跡を望む



調査前



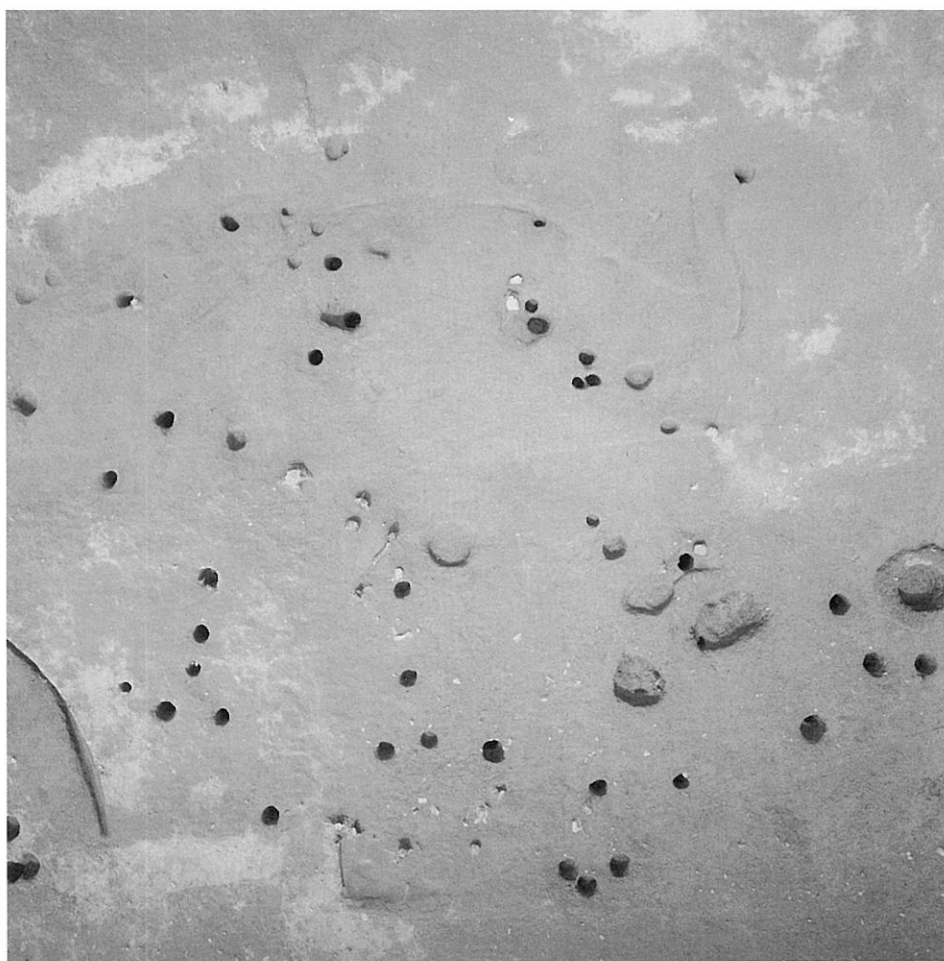
上空より遺跡を望む



完掘近景



S B 0 1 完掘



S B 0 2 完掘



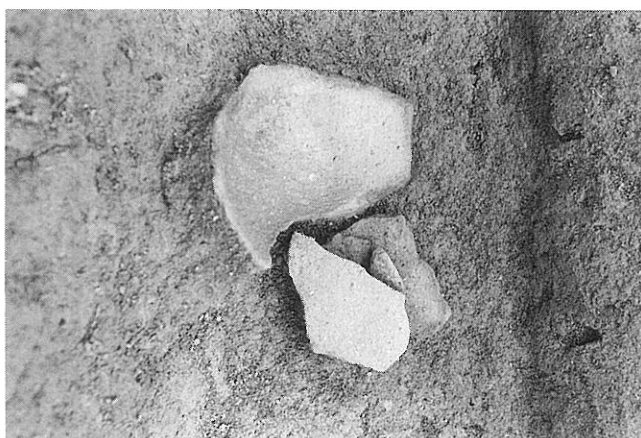
S B 0 3 完掘



土器の出状①



土器の出状②



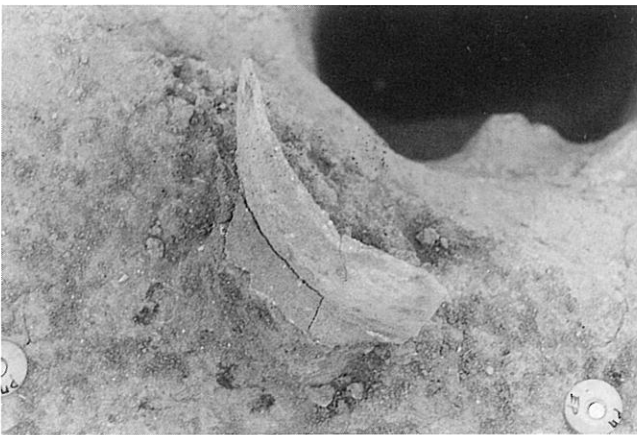
土器の出状③



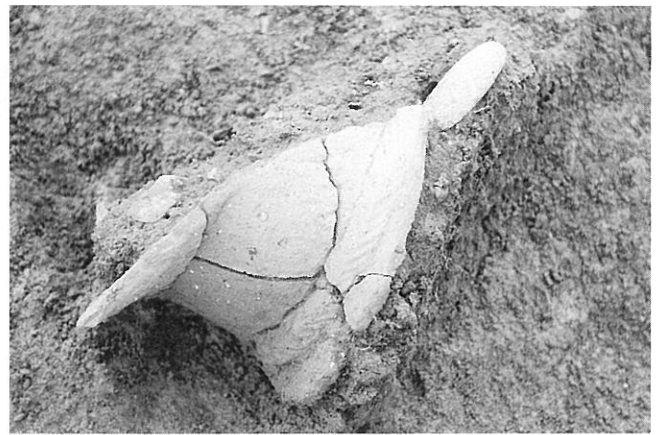
南東より望む



S B 0 4 完掘



土器の出状①



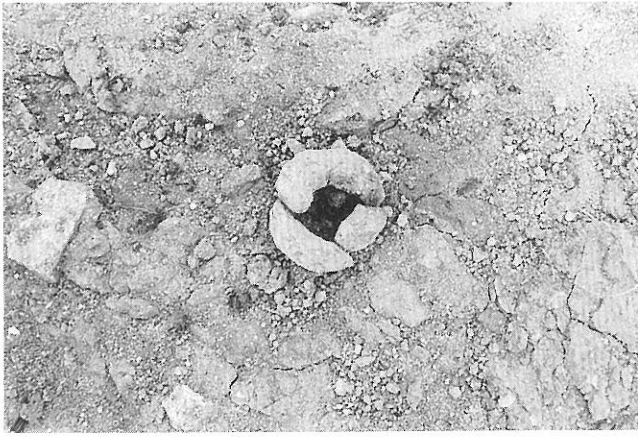
土器の出状②



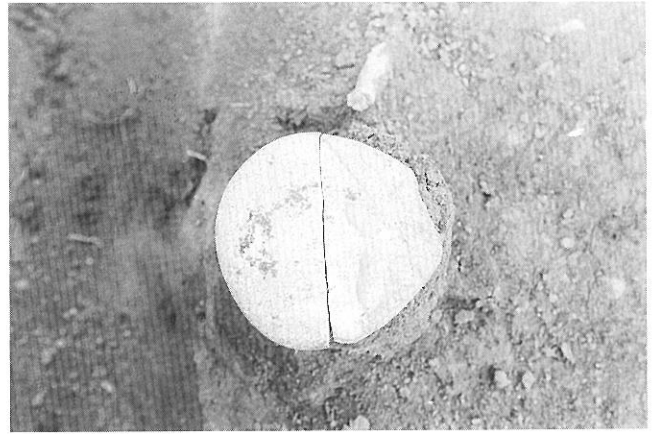
土器の出状③



土器の出状④



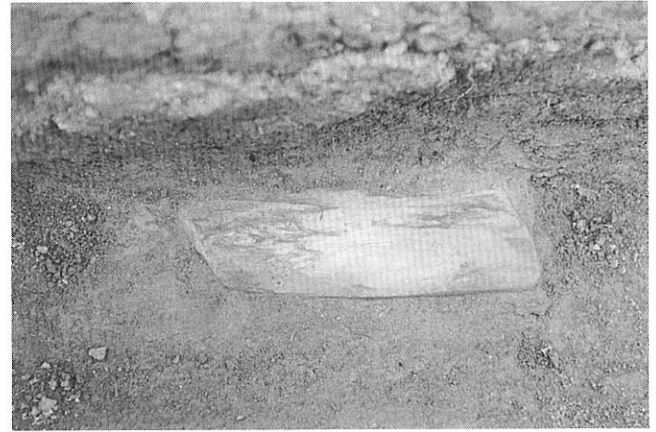
輪状土製品出状



砥石の出状①



砥石の出状②



砥石の出状③



焼土面検出



焼けた木材



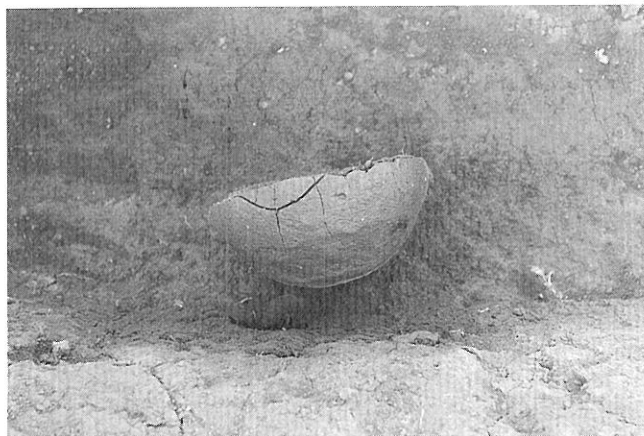
S B 0 5 完掘



北側土層断面



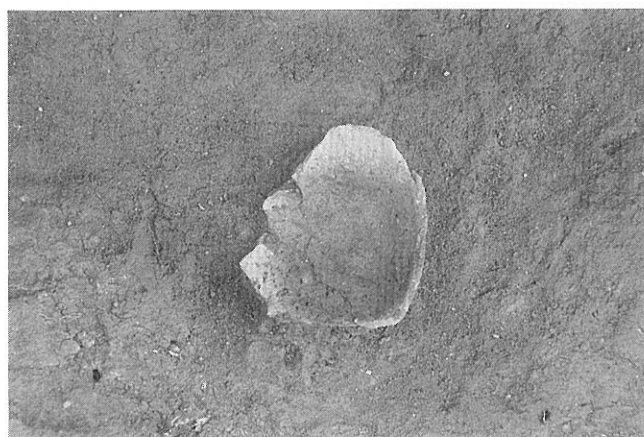
南側土層断面



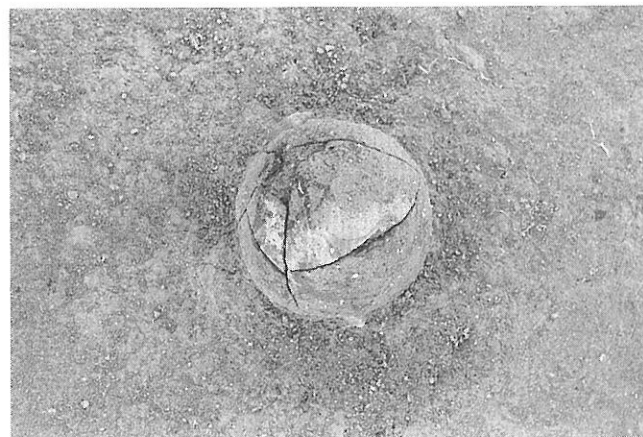
土器の出状①



土器の出状②



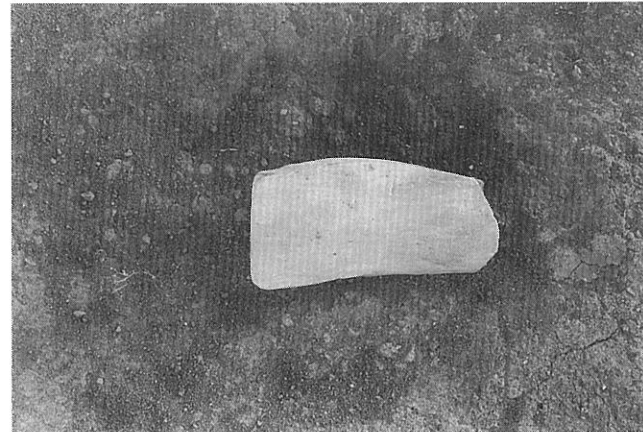
土器の出状③



土器の出状④



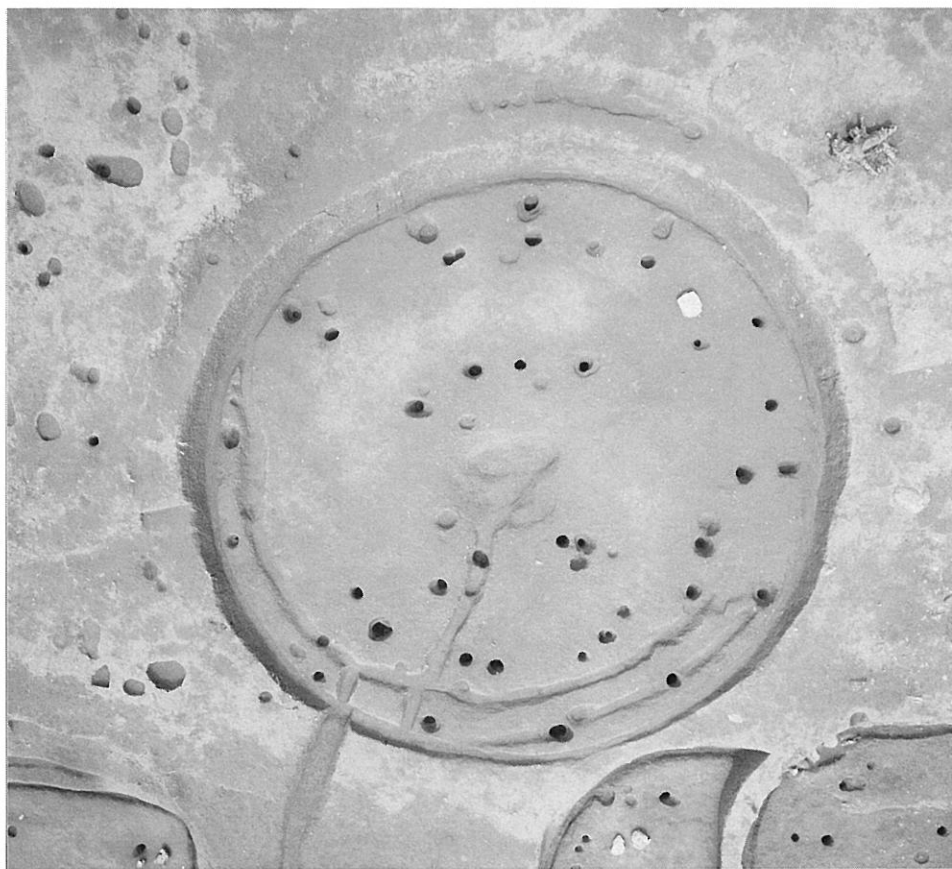
鉄器の出状



砥石の出状



排水溝か



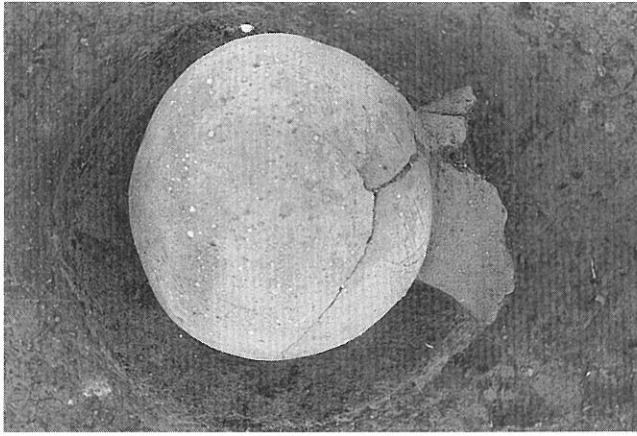
S B 0 6 完掘



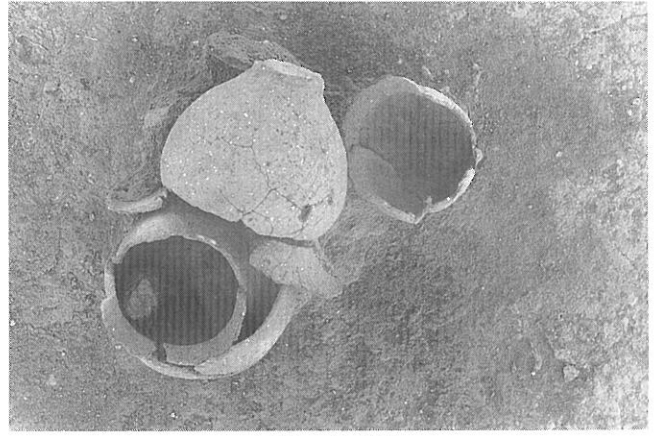
北側土層断面



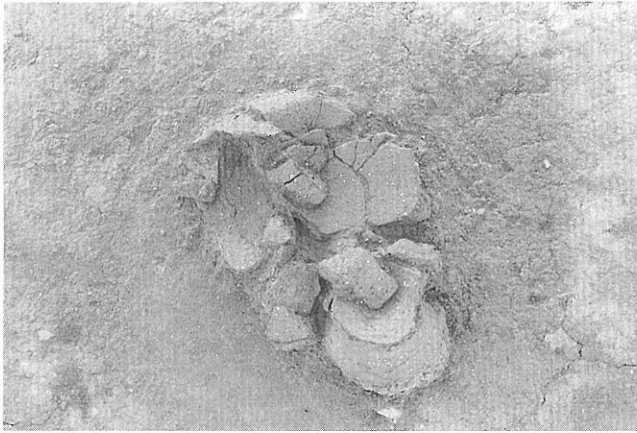
南側土層断面



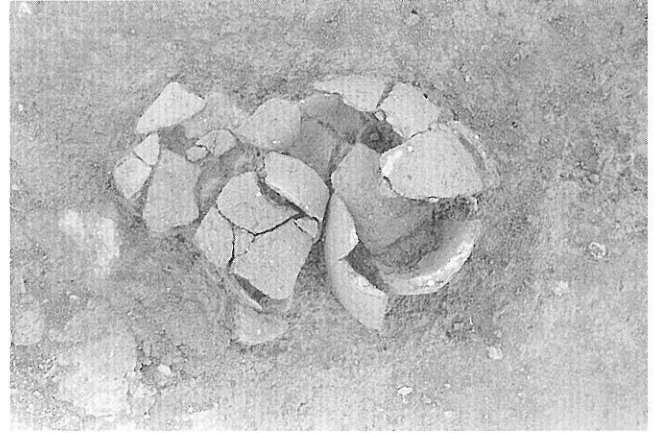
土器の出状①



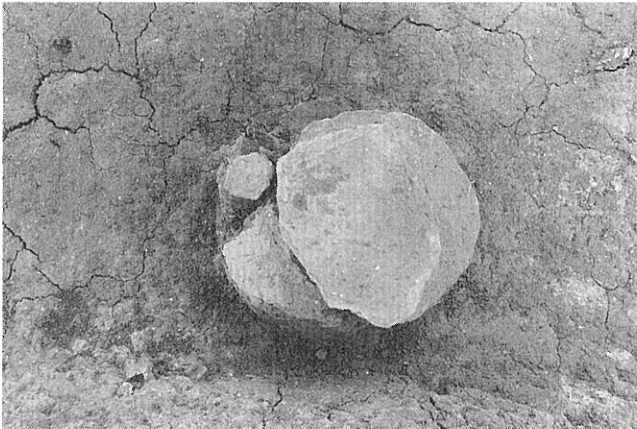
土器の出状②



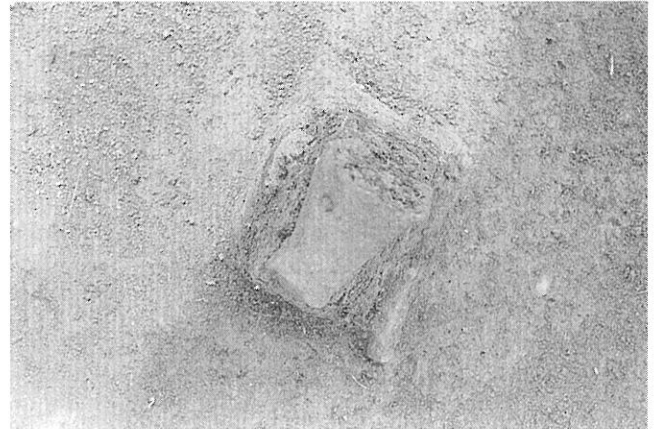
土器の出状③



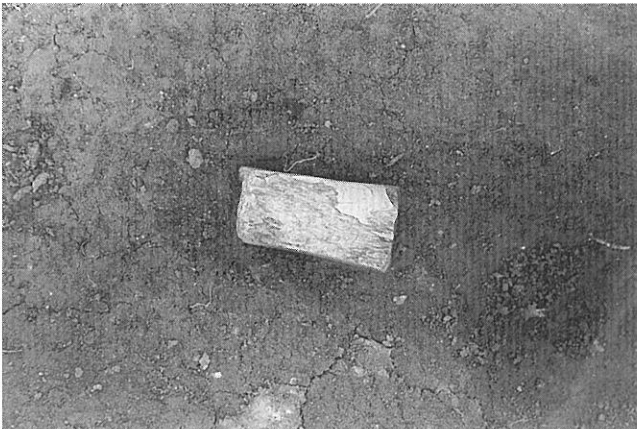
土器の出状④



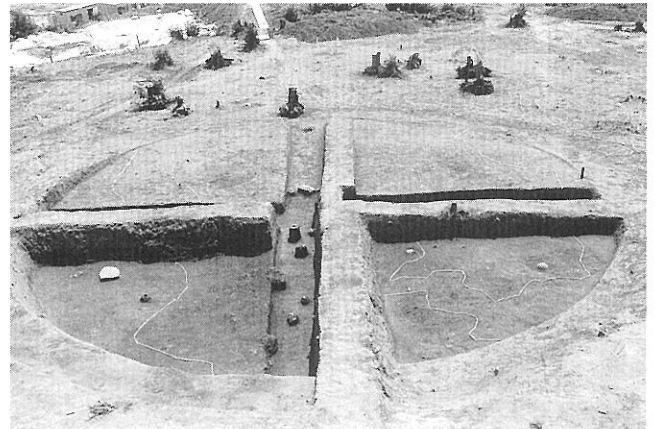
土器の出状⑤



土器の出状⑥



砥石の出状



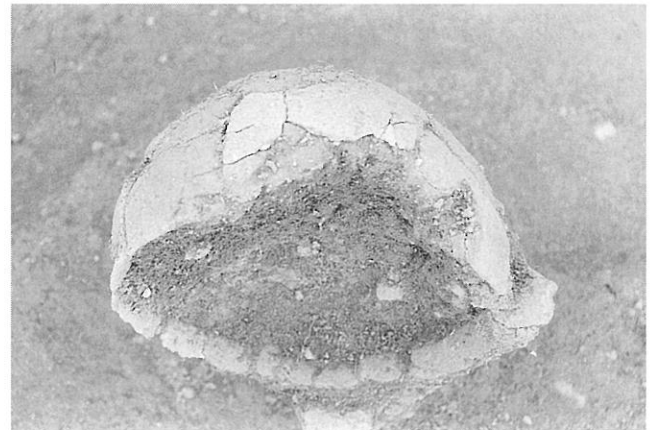
焼土面検出



S B 0 7 出状



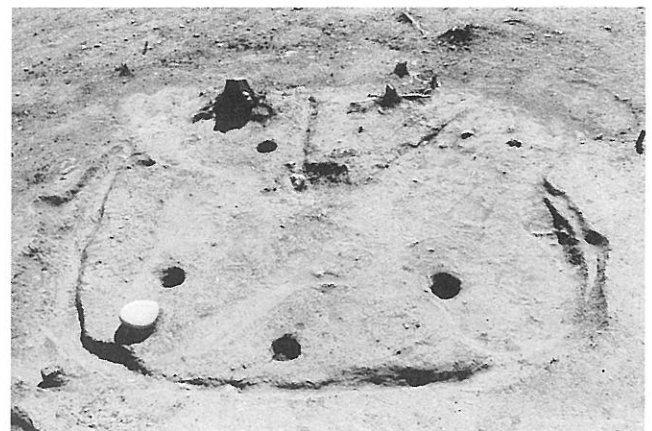
土器の出状①



土器の出状②



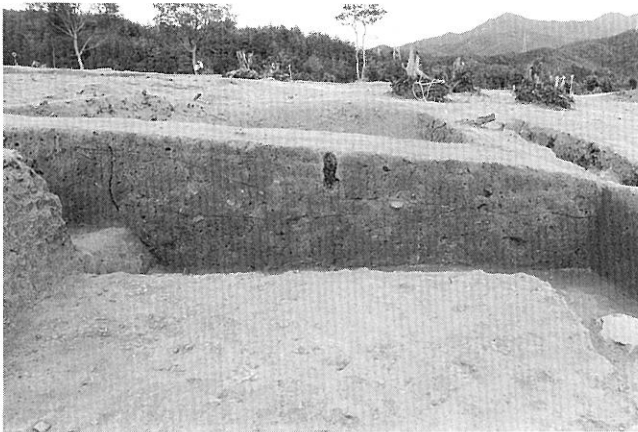
土器の出状③



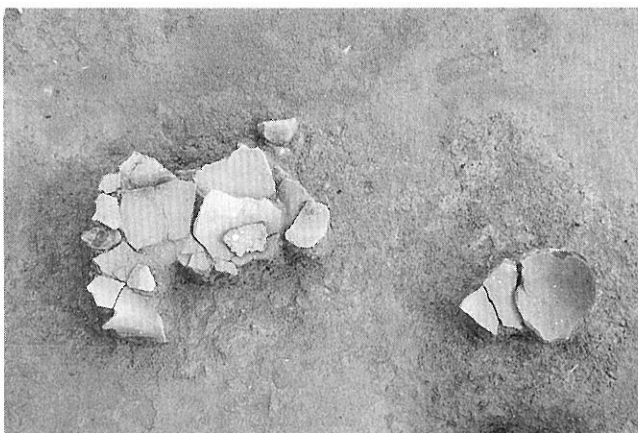
完掘 (北より)



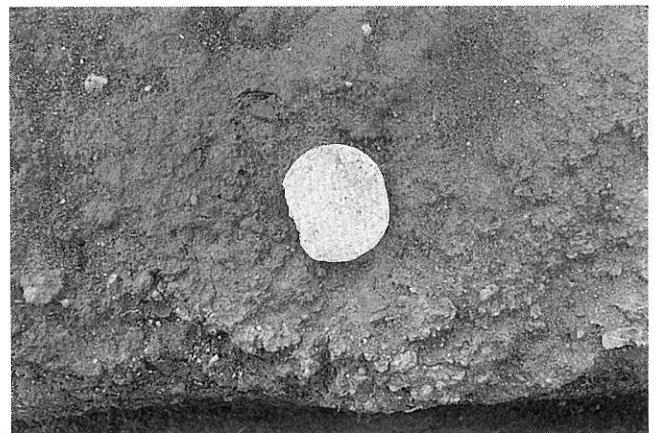
SB08・09出状



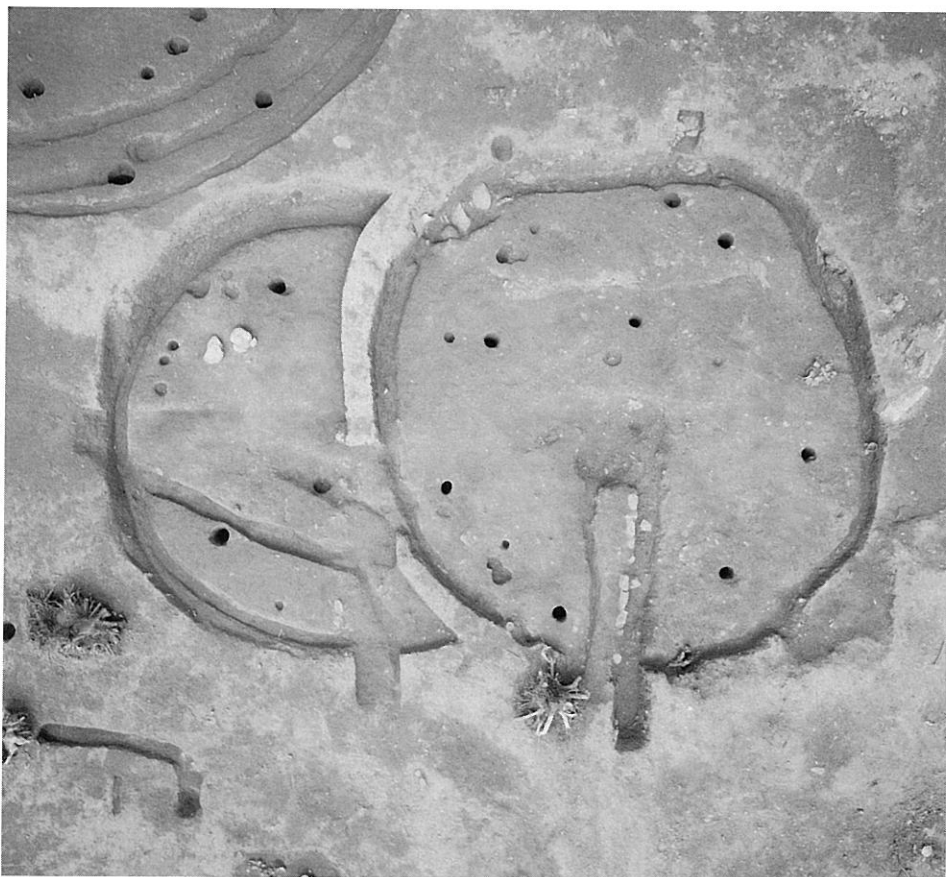
北側土層断面



土器の出状



石製紡錘車の出状



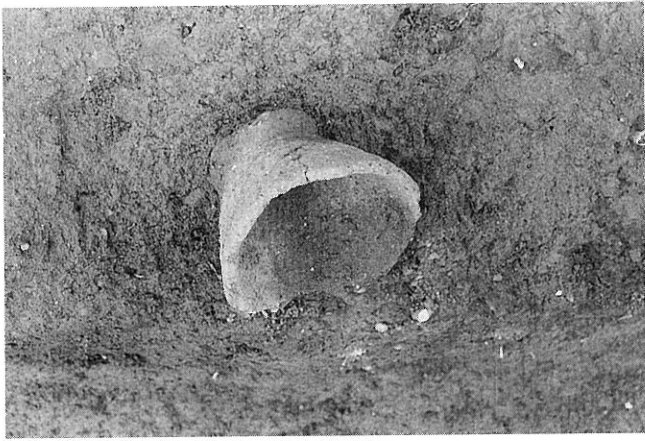
SB10・11出状



東西土層断面



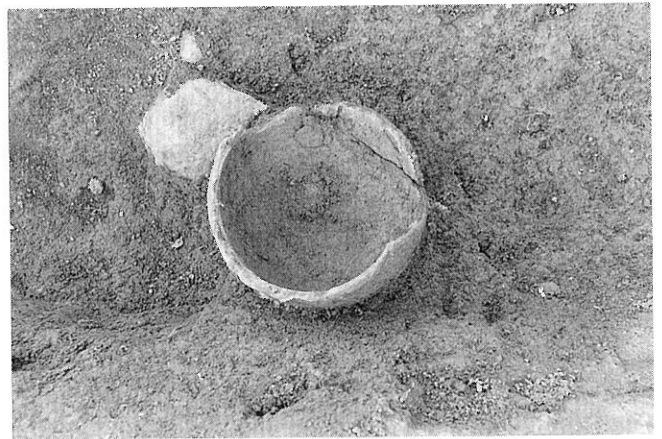
SB11北側土層断面



住居10土器出状



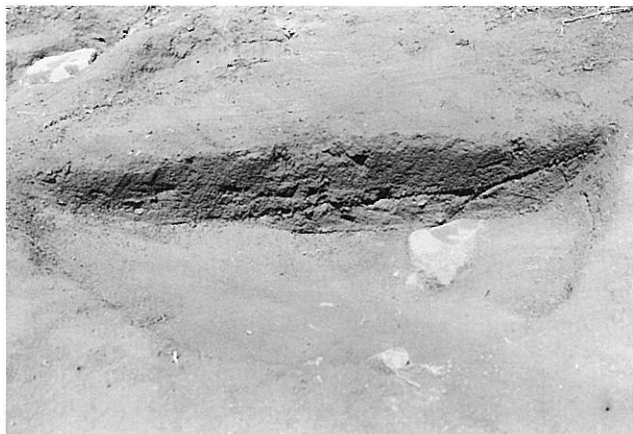
住居11土器出状①



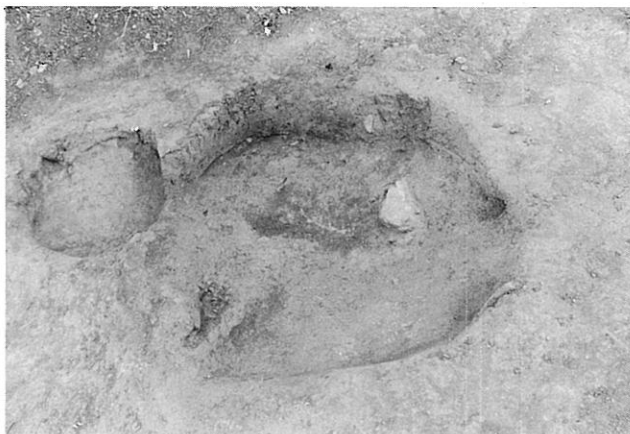
住居11土器出状②



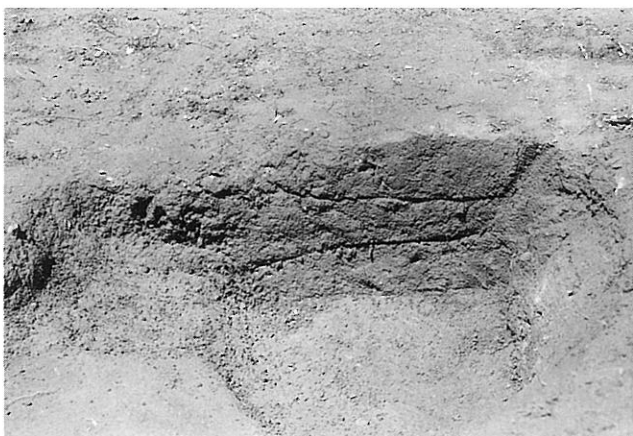
SB10・11完掘



SK 0 1 土层断面



SK 0 1 完掘



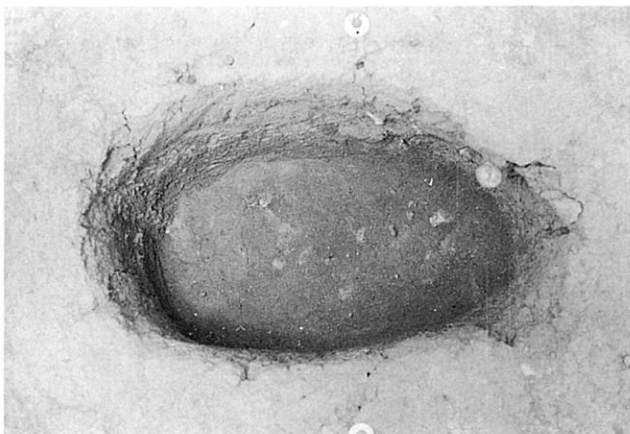
SK 0 2 土层断面



SK 0 2 完掘



SK 0 3 土器出状



SK 0 3 完掘



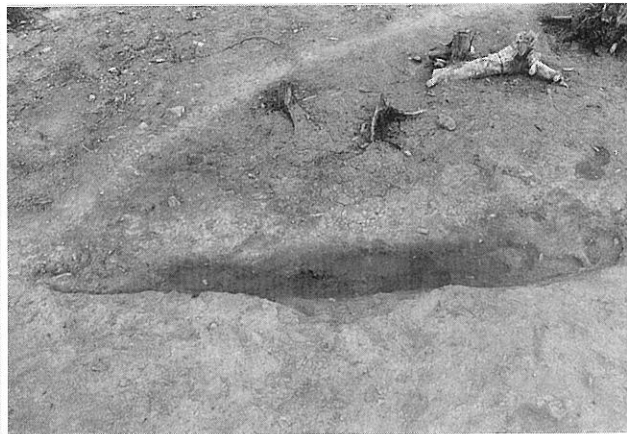
SK 0 4 完掘



SK 0 5 土层断面



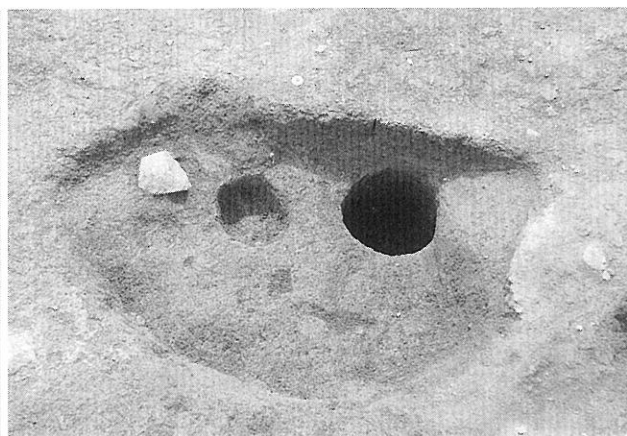
S K 0 5 土器出状



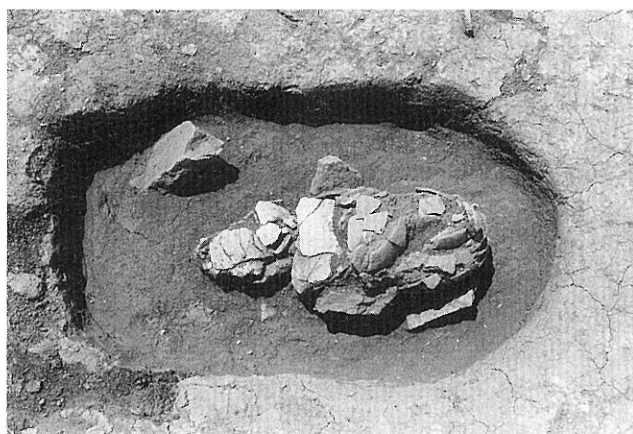
S K 0 5 完掘



S K 0 6 土器出状



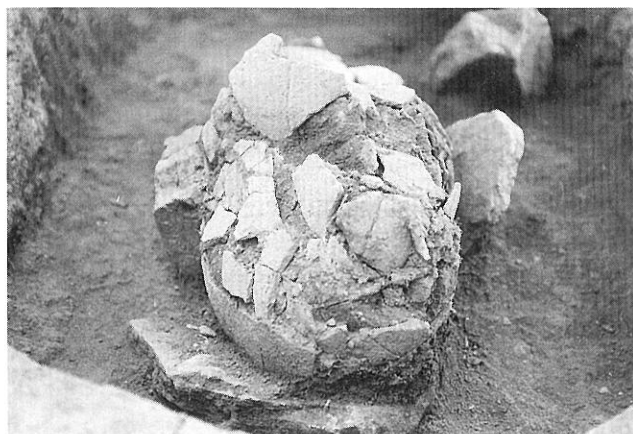
S K 0 6 完掘



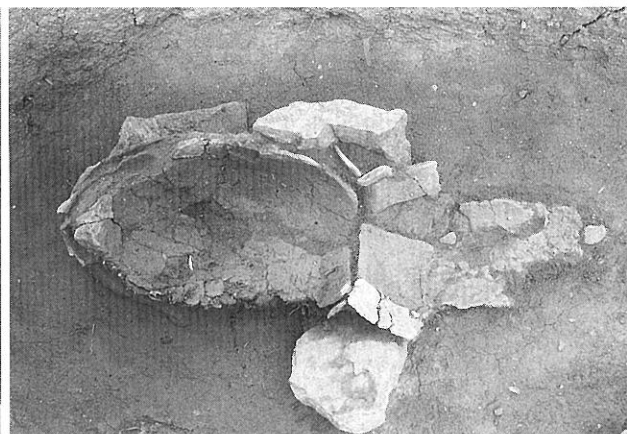
S T 0 1 甕棺出状



S T 0 1 甕棺出状(南より)



S T 0 1 甕棺出状(西より)



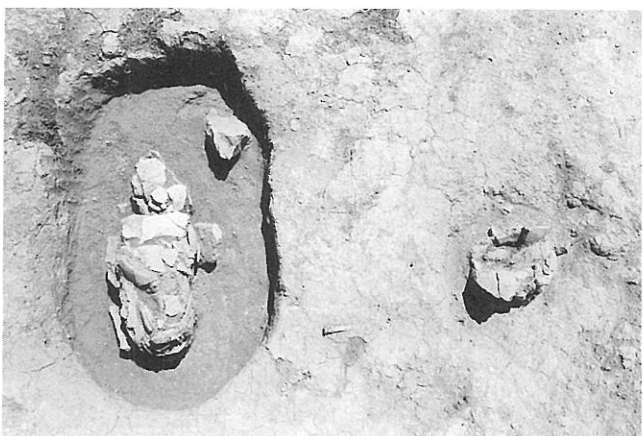
S T 0 1 甕棺出状(上部取り上げ後)



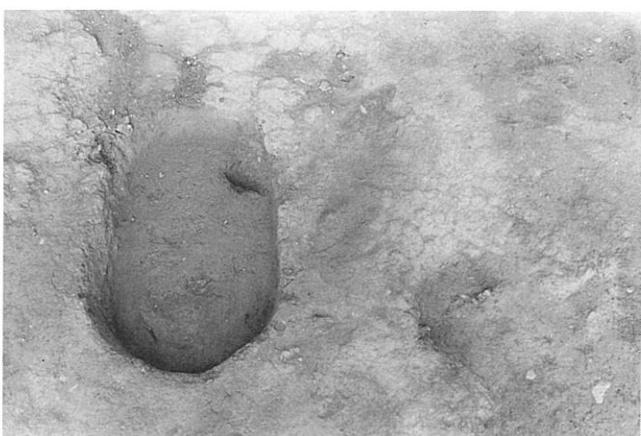
ST 01 甕棺取り上げ後



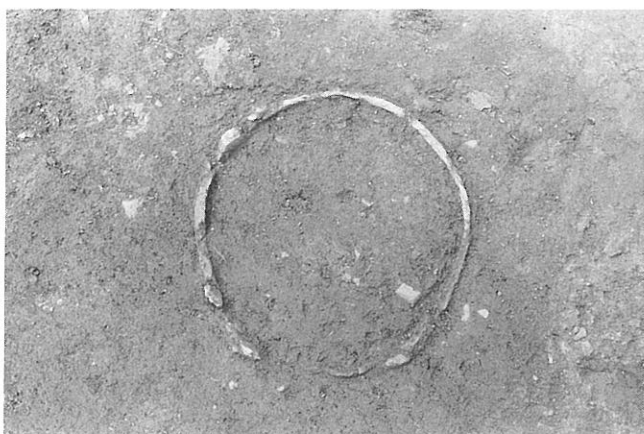
ST 02 土器出状



ST 01・02 土器出状(西より)



ST 01・02 完掘(西より)



ST 03 検出状況



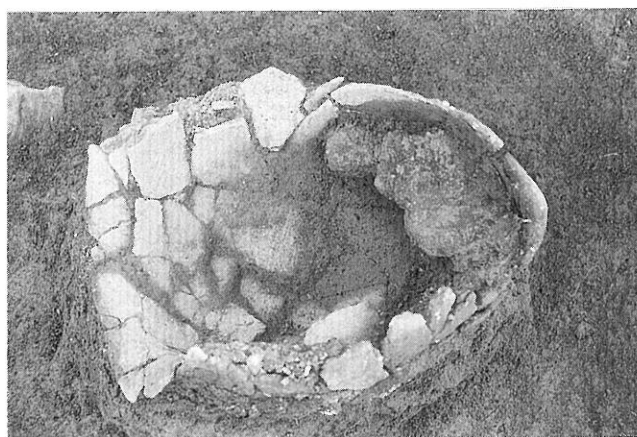
ST 03 甕棺出状



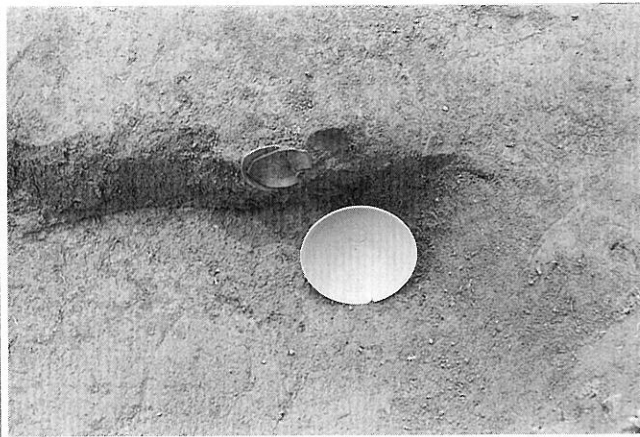
ST 03 完掘



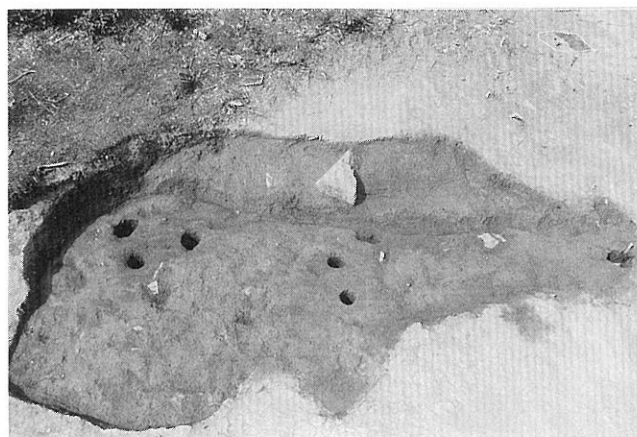
ST 04 甕棺出状



ST 05 甕棺出状



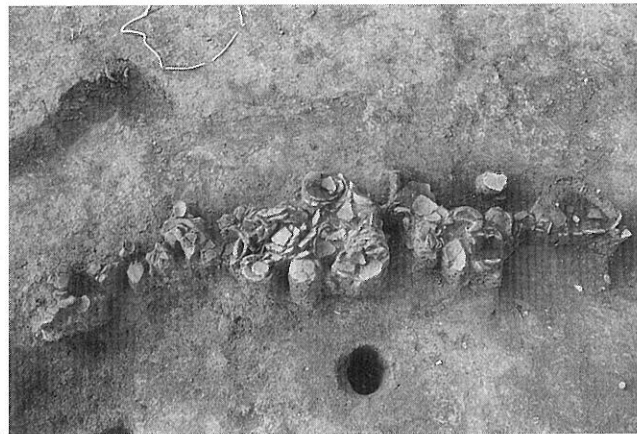
ST 06 出状



SX 01 完掘



SX 03 土器出状①



SX 03 土器出状②



SX 03 完掘



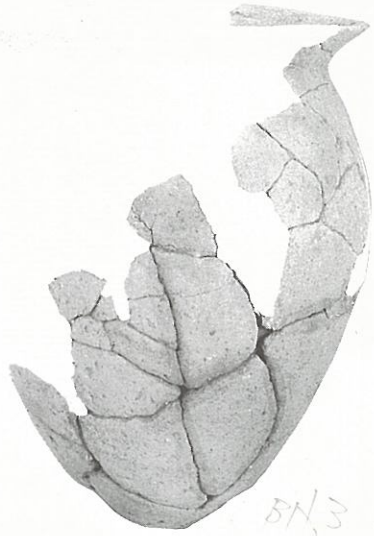
作業風景



実測風景



BN. 5 展 86



BN. 3 展 172



167



BN. 19

展 85

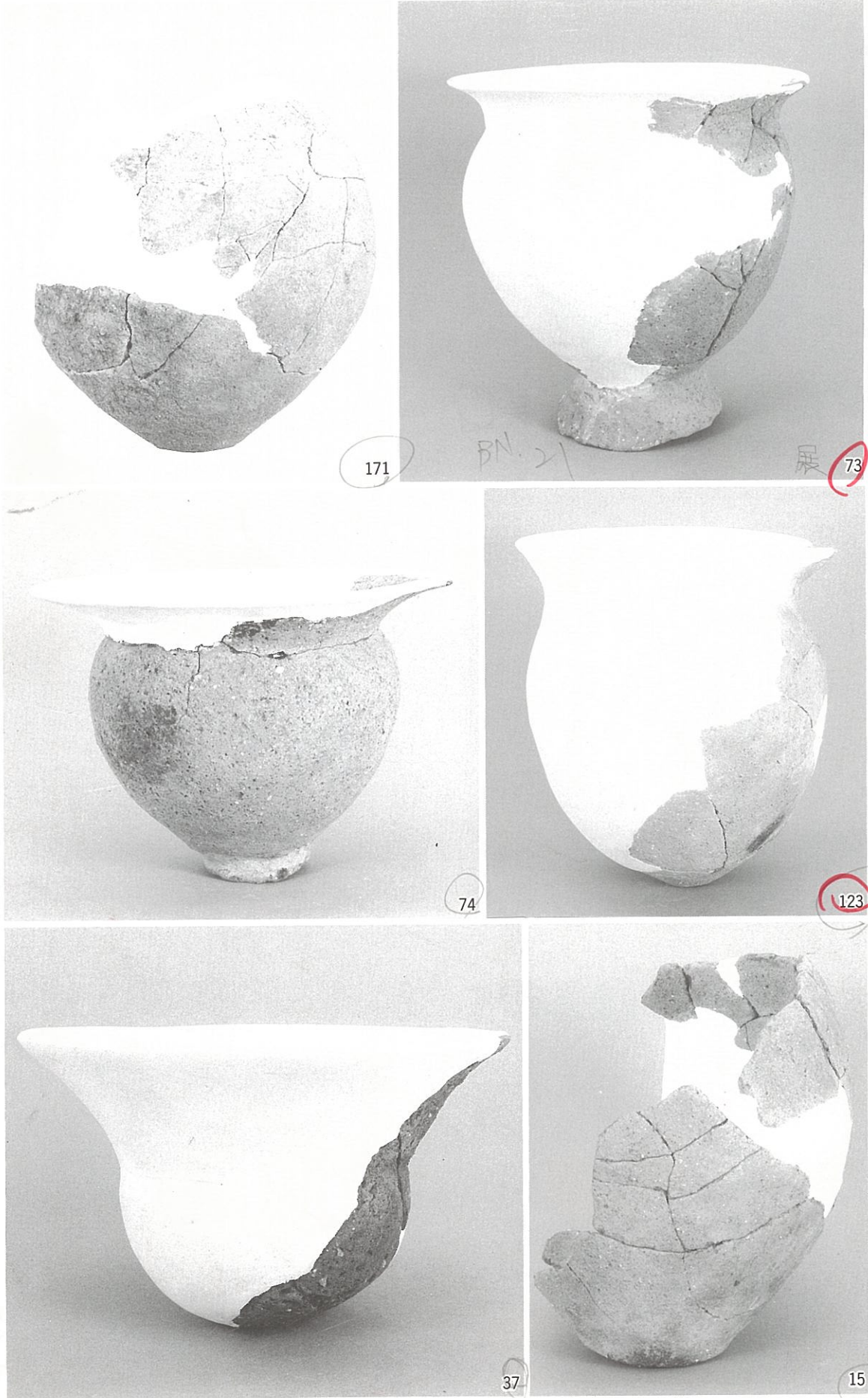


BN. 10

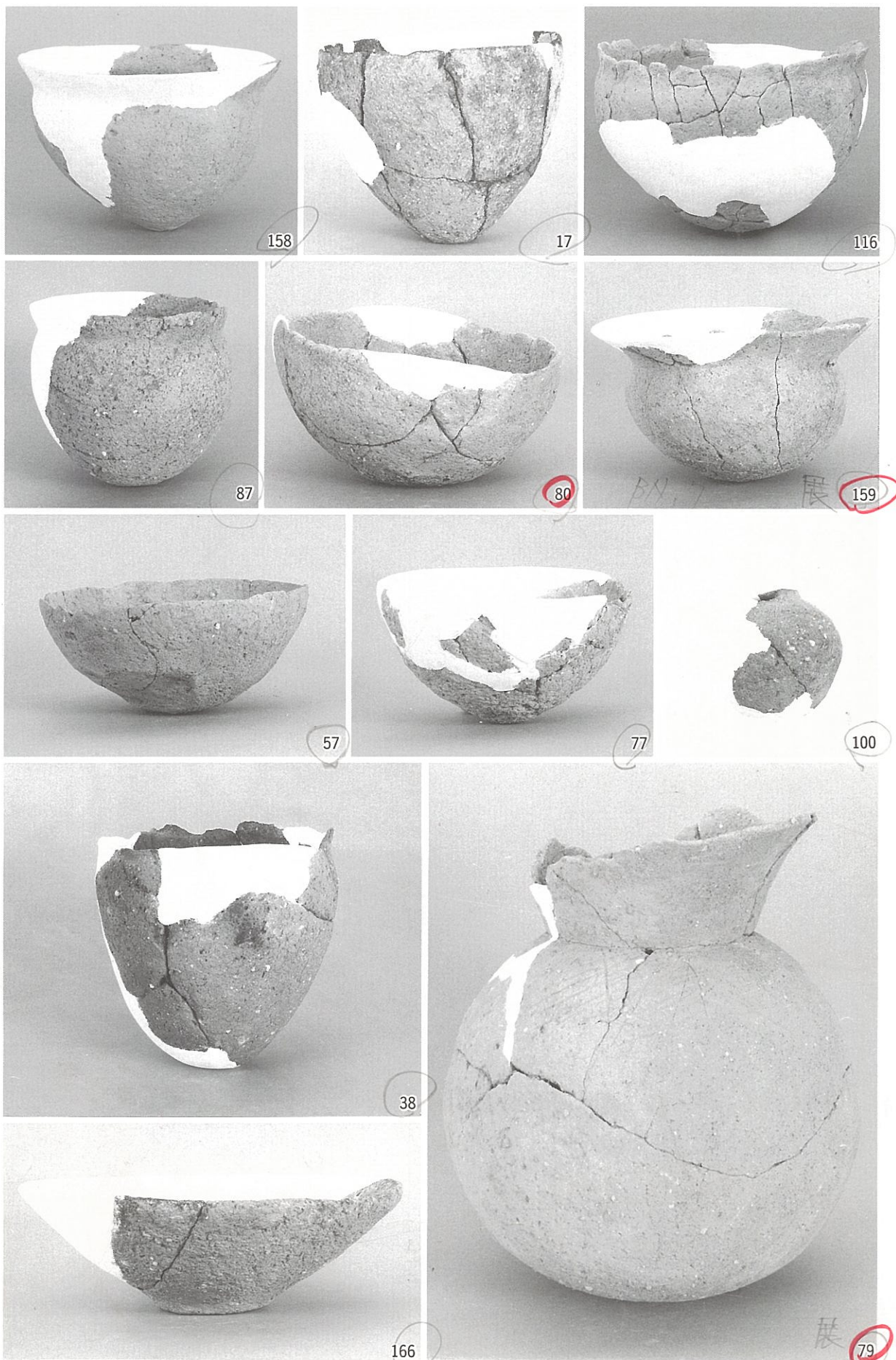
展 157



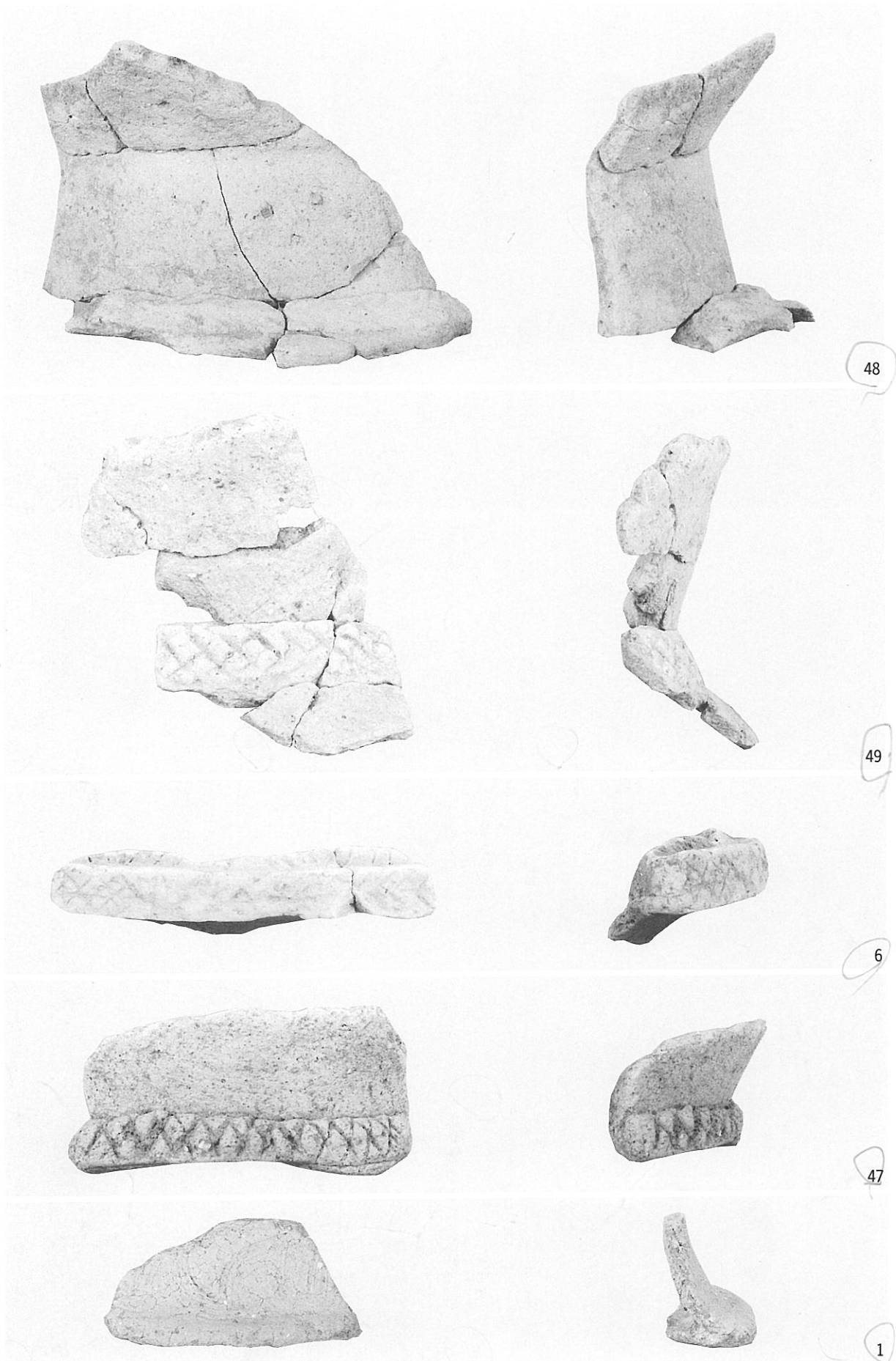
179



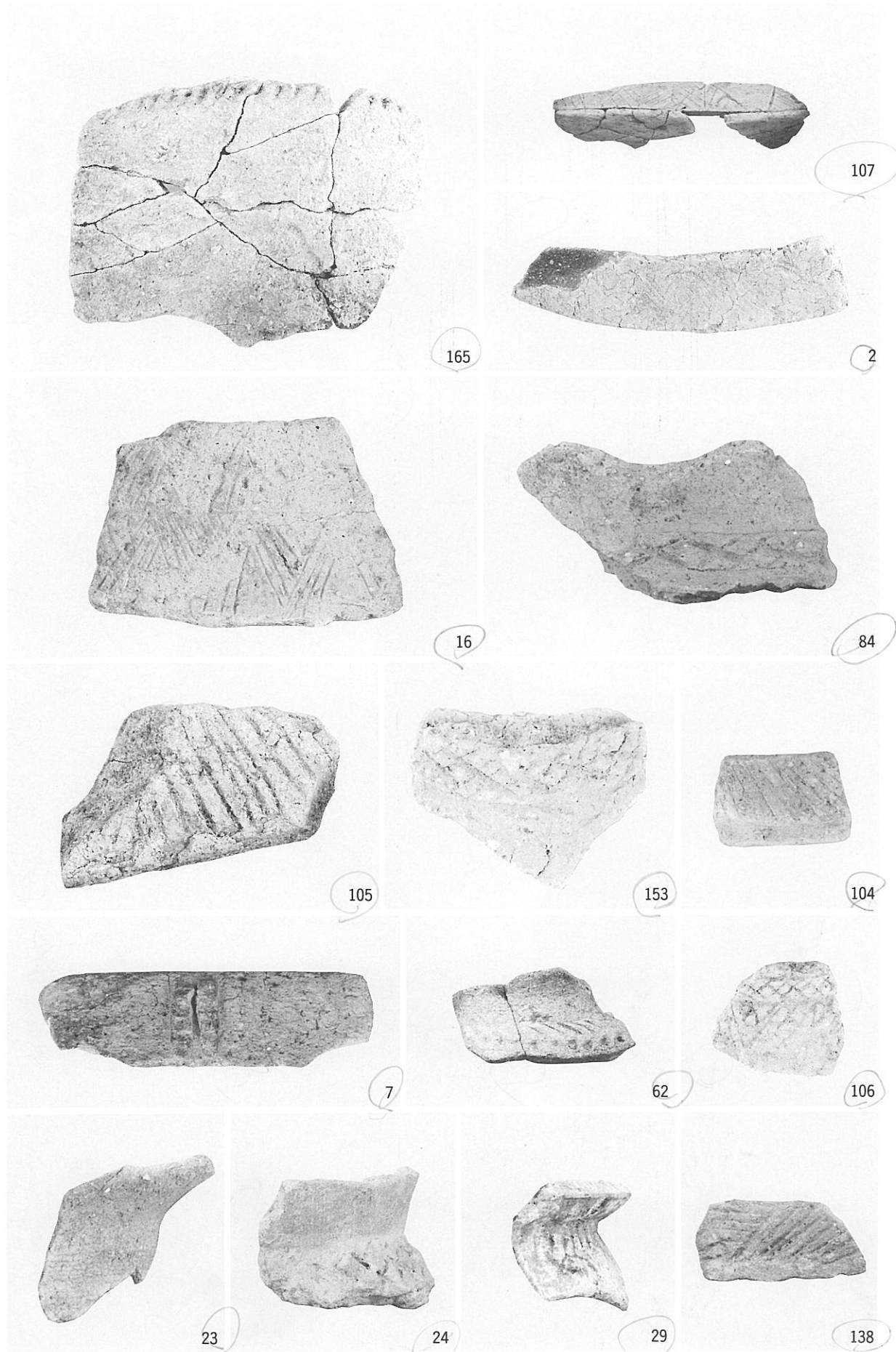
出土遺物(2)



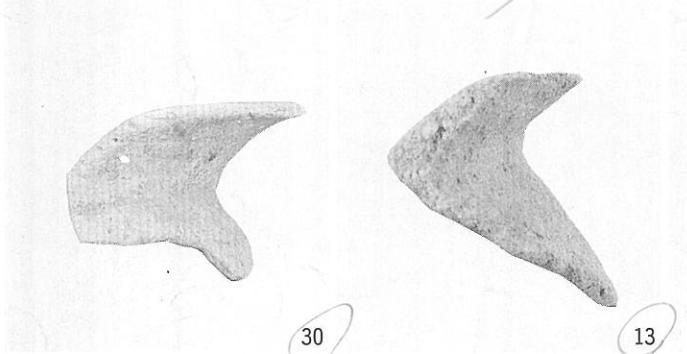
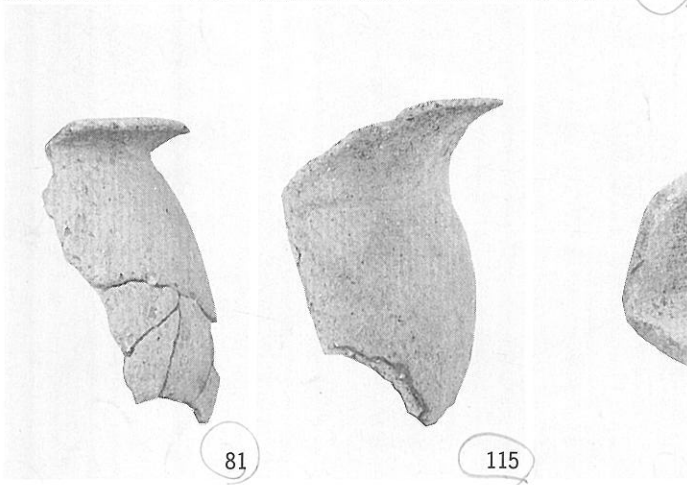
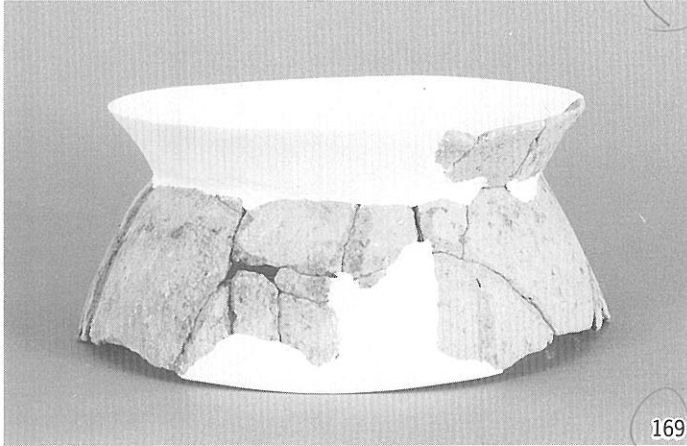
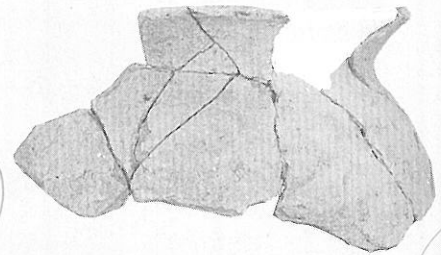
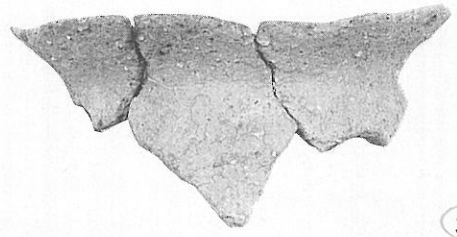
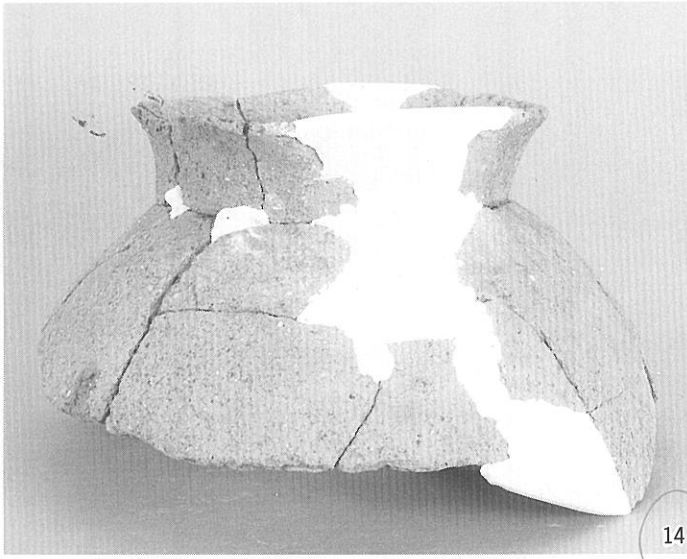
出土遺物(3)

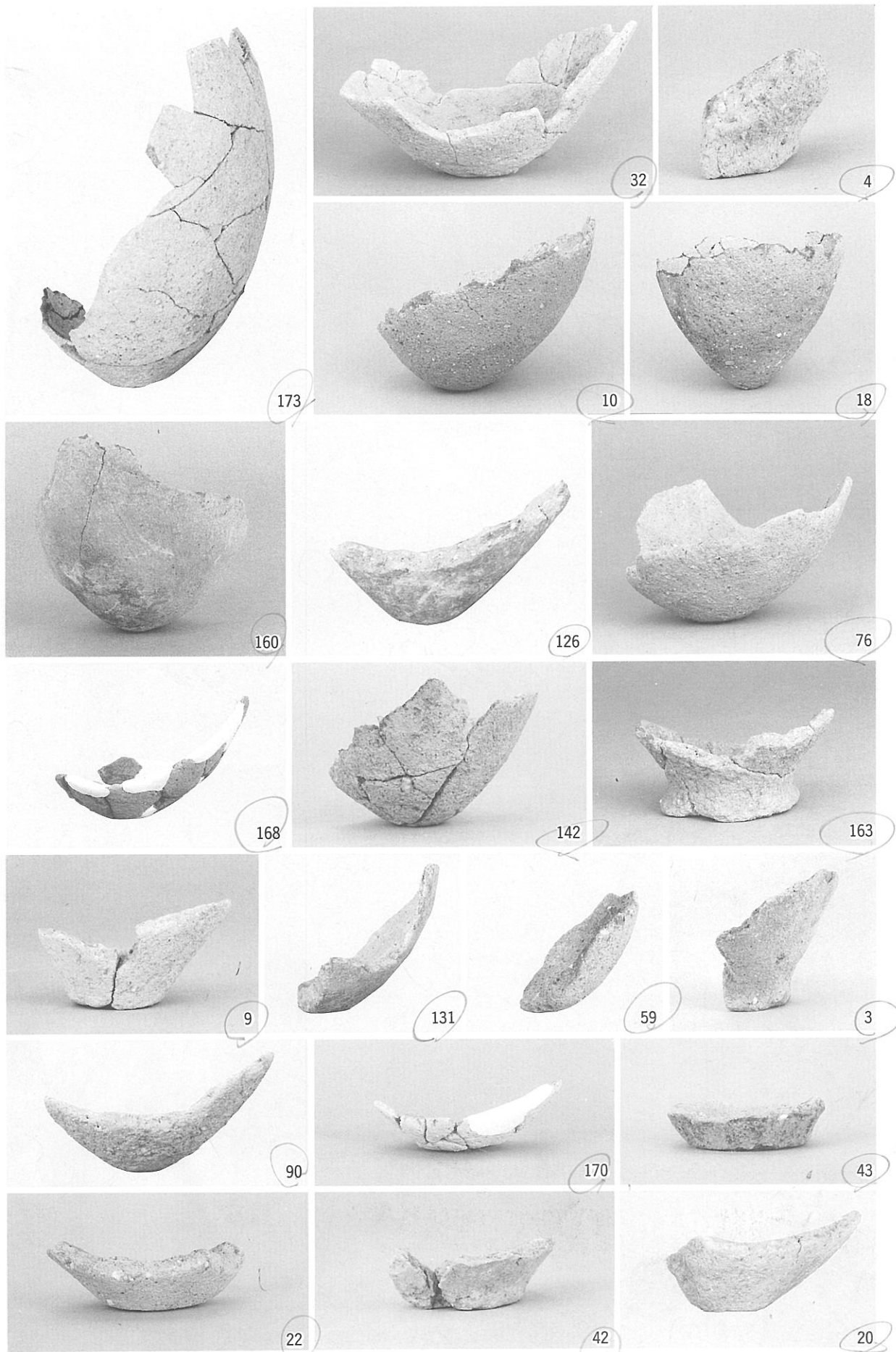


出土遺物(4)

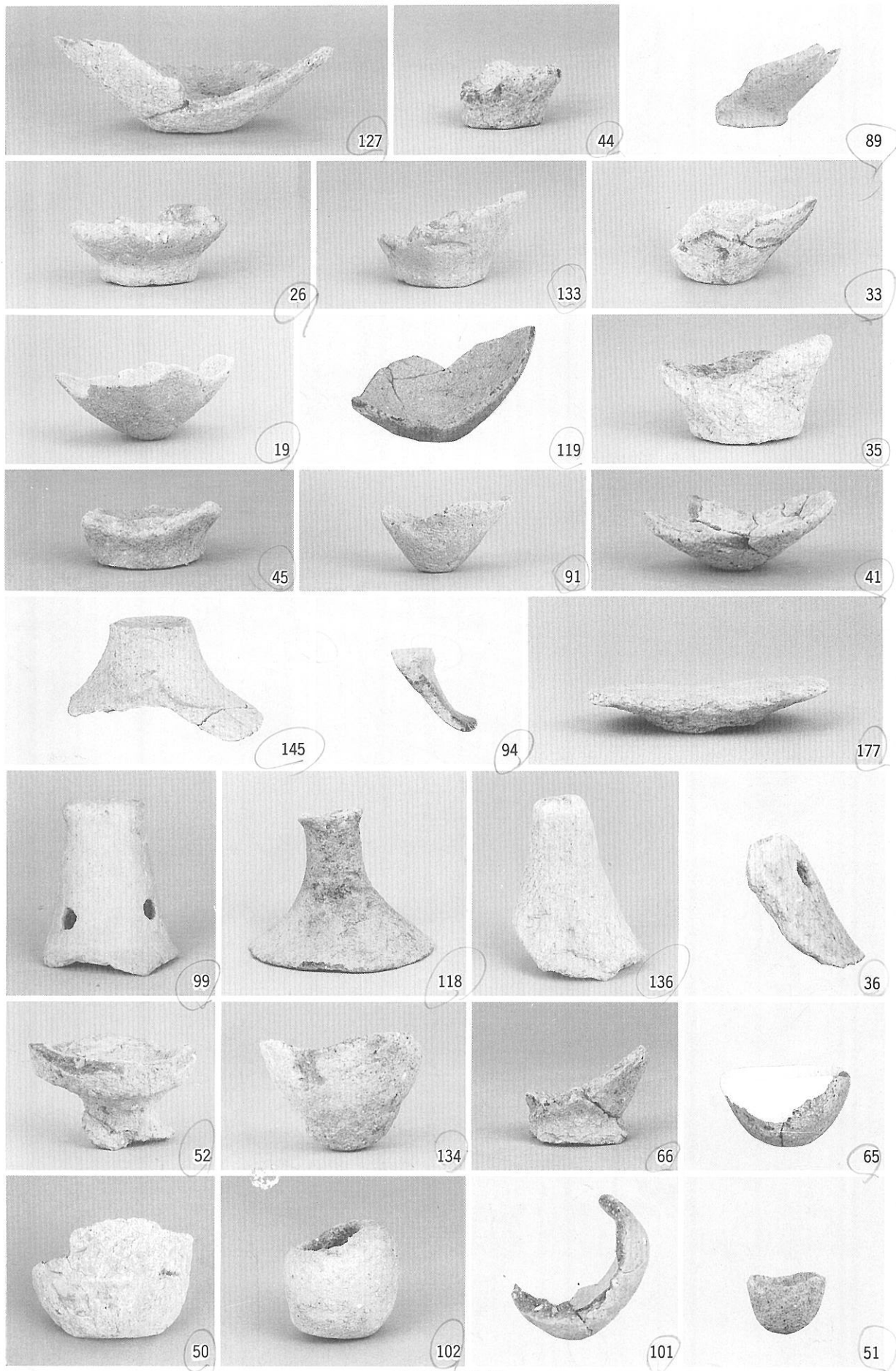


出土遺物(5)

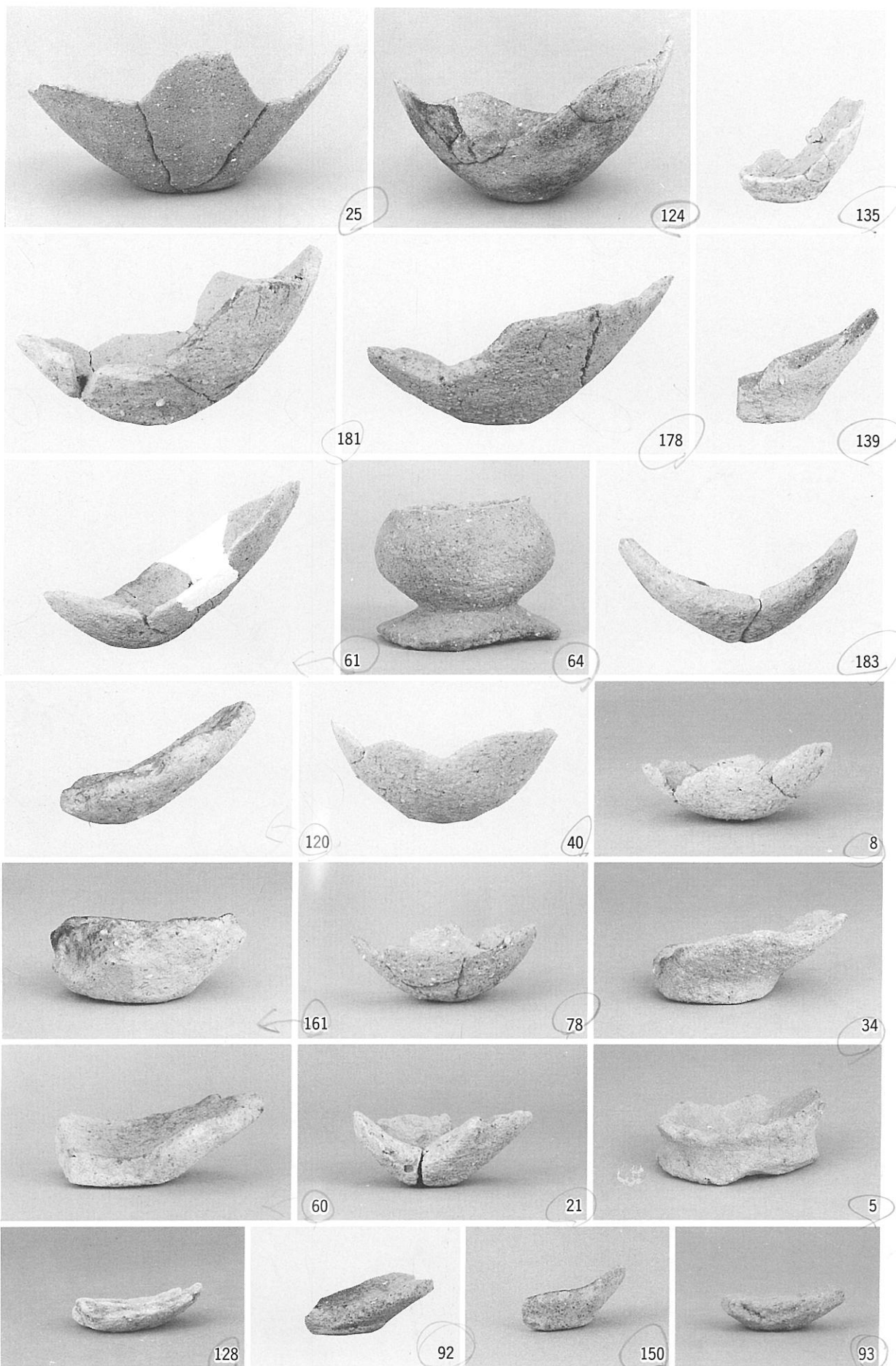




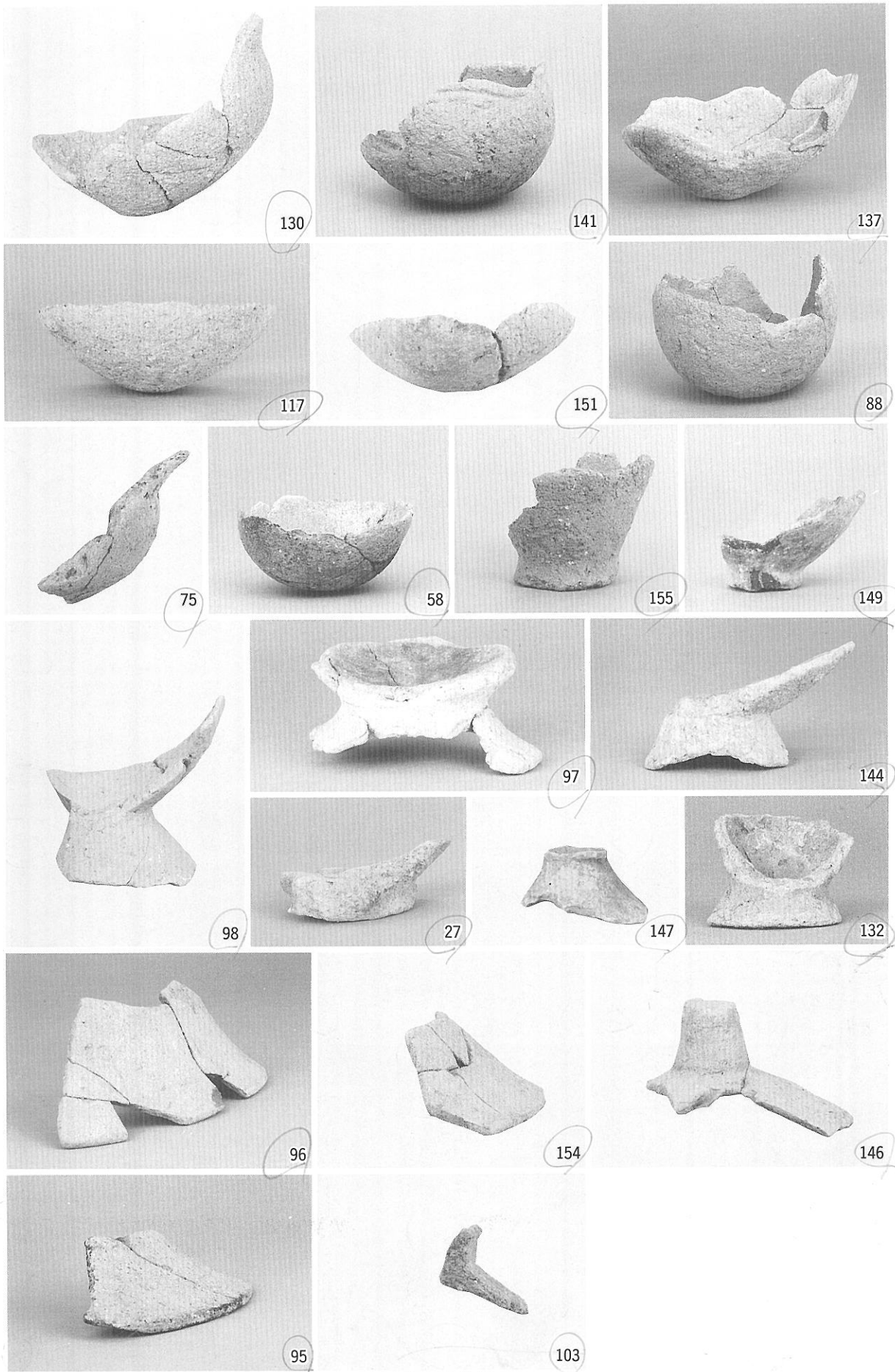
出土遺物(7)



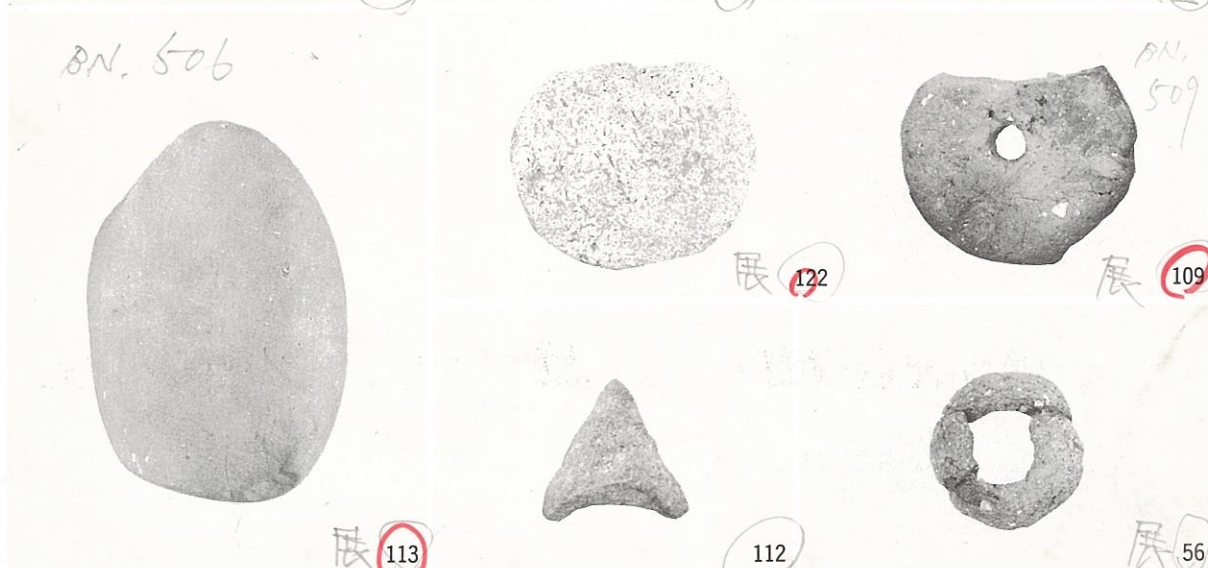
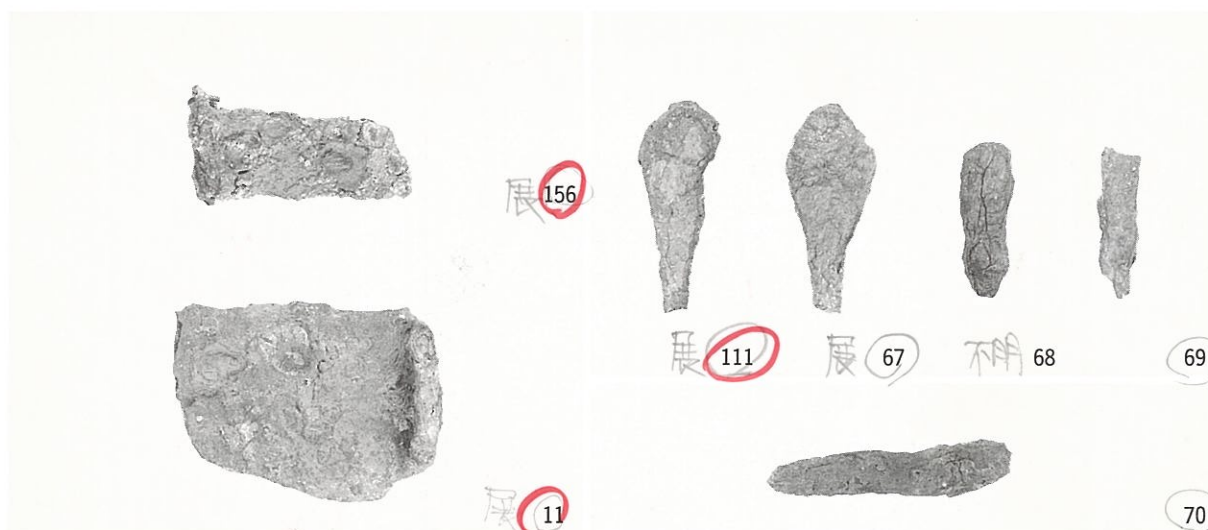
出土遺物品(8)



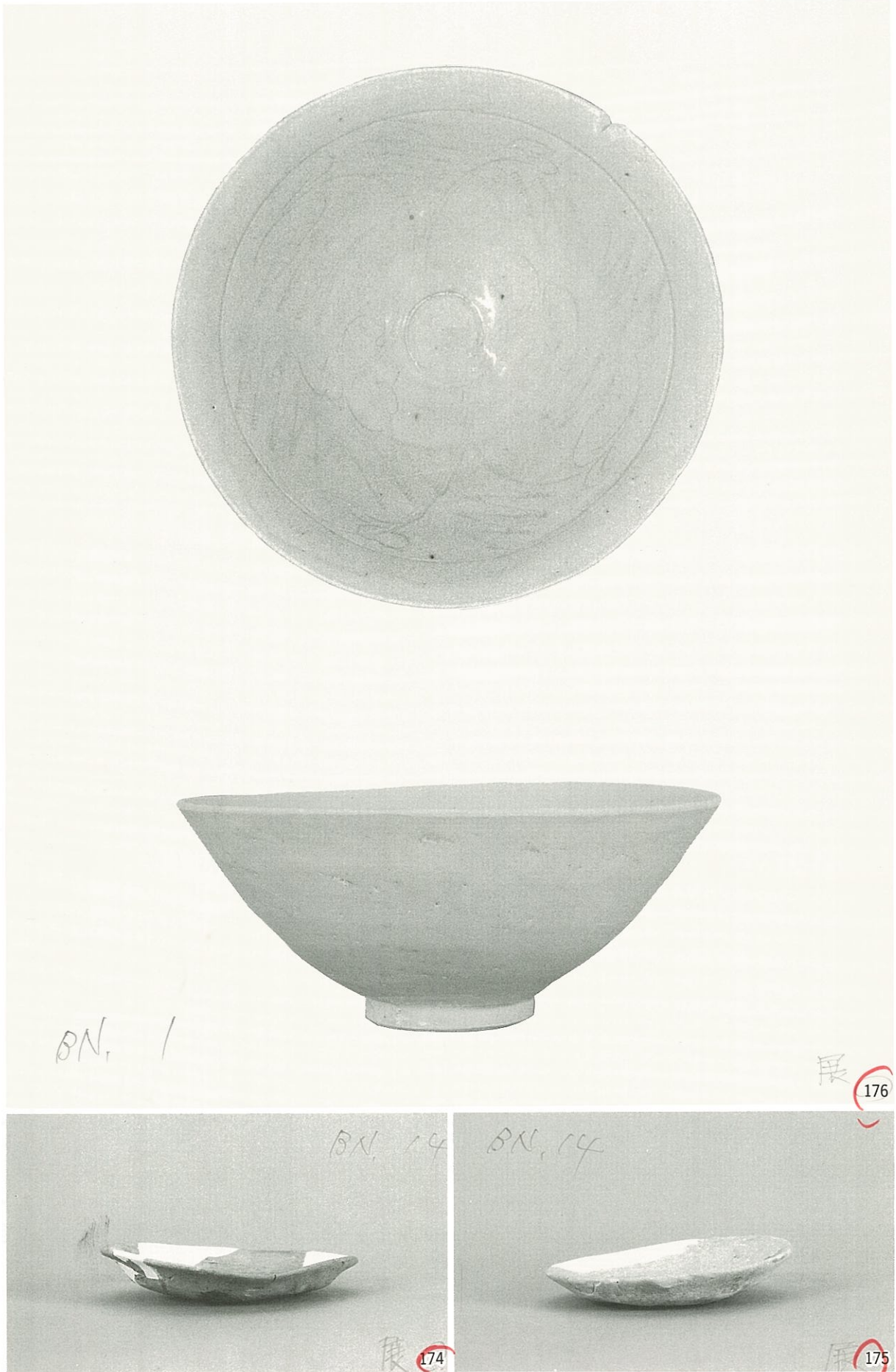
出土遺物(9)



出土遺物(10)



出土遺物(11)



出土遺物(12)

報告書抄録

ふりがな	よしまさいせき
書名	吉政遺跡
副書名	柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県教育財団埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第1集
編著者名	豊島 正行 田中 敏夫 平海 泰政
編集機関	財団法人山口県教育財団
所在地	〒753 山口県山口市大手町2130 TEL0839-23-1060(山口県埋蔵文化財センター)
発行年月日	西暦1996年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしまさい 吉政	やないし 柳井市 おおあざしんじょう 大字新庄	35212		33度 58分 43秒	132度 05分 05秒	19950601 ～ 19951024	4,000	柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
吉政	集落跡	弥生時代	竪穴住居	11軒	弥生土器	直径10mをこえる大型住居
			土坑	23基	石器	
			土器棺墓	5基	鉄器	
		平安時代	土坑墓	1基	白磁瓦器	輸入磁器

山口県教育財団埋蔵文化財調査報告 第1集

吉 政 遺 跡

—柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査報告—

1996年 3月

編集 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
発行 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
印刷 大村印刷株式会社